令和４年度

報告書

国際キャリア教育プログラム

UTSUNOMIYA UNIVERSITY

国際キャリア教育セミナー

国際キャリア教育

International Career Seminar

国際キャリア実習

主催：大学コンソーシアムとちぎ・宇都宮大学

開催趣旨

宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際交流に関心がある高校生の皆さんも、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。

そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア教育プログラム」です。本プログラムは、宇都宮大学国際学部や栃木県の大学が中心になって 2004 年から毎年実施され、参加者数は過去 19 年間合計 2058 名（宇都宮大学 1279 名、外部参加者 779 名）となっています。2020 年より、コロナウイルス感染症流行への対応のためのオンライン化によって、海外からの参加も可能になり、英語でセミナー全体を行う「International Career Seminar」へは、本学交流協定校であるペラデニヤ大学(スリランカ)およびサラワク大学(マレーシア)から多数学生の参加があり、国際交流実体験の場としての学修効果を生んでいます。

このプログラムの科目は、学生が生きることや働くことの意味について考えるという点で共通の「国際キャリア教育」（日本語によるセミナー）と、「International Career Seminar」（英語によるセミナー）、そして、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPO でインターンシップを行う「国際キャリア実習」の 3 科目、6 単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行われます。２つのセミナーはどちらも 3 日間の集中講義形式で、共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化(Globalization)」、「地域のグローバル化（Glocalization）」の 2 つの柱を立て、国際ビジネス、国際協力・国際貢献、多文化共生と日本、異文化理解・コミュニケーションの 4 つのテーマで分科会を構成します。各分科会のためには、その道のプロの専門家や講師を揃えています。一方、総時間数 80 時間で行われる「国際キャリア実習」のためには、国内・海外の魅力的で個性的な研修先を用意しています。3 科目すべての履修を勧めますが、１つか２つを選択して受講することも可能です。

「国際キャリア教育プログラム」は、毎年宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から優秀な大学生、社会人が多数参加します。皆さんもこのプログラムに参加して、国際キャリアについて一緒に学び、国際社会や地域社会への「キャリアパス」の可能性を探っていきましょう。

最後に、本プログラムは、栃木県からの支援を受けて、大学コンソーシアムとちぎとの共同事業として企画しましたが、その実施に際しましては、（公社）栃木県経済同友会、（公財）栃木県国際交流協会、NPO 法人宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流会、そして、JICA 筑波センターからご後援をいただきました。また、（公財）あしぎん国際交流財団からはご協賛、宇都宮市創造都市研究センターからは特別協力をいただきました。ご関係の皆様からの多大なご理解とご支援に対し、主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。

令和 5(2023)年 3 月

国際キャリア教育プログラム委員会　委員長
宇都宮大学　国際学部　教授
吉田　一彦

目次

開催趣旨 1

第１部　国際キャリア教育セミナー

1. 目標とルール 3

国際キャリア教育

1. 概要 4
2. 開催日程 5
3. 全体講義 6
4. 分科会・講師及び講義概要 12
5. パネルトーク 39

International Career Seminar

1. 概要 42
2. 開催日程 43
3. 全体講義 44
4. 分科会・講師及び講義概要 49
5. パネルトーク 76

附　表

1. 参加者名簿 78
2. 参加者全体コメント 80

第２部　国際キャリア実習

1. 実施要項 83
2. 令和４年度春期受入団体および実習概要一覧 87
3. これまでの受入団体および実習概要一覧 87

国際キャリア教育セミナー

目標とルール

目標

■ 「働く」とはどういうことなのかについて考える。
■ 自分と地域社会や世界とのつながりについて考える。
■ 主体的に関わりたい分野を見つけ、今後の学びに向けた“きっかけ”を得る。

ルール

□ どんな意見も臆せず、積極的に発言しよう。
□ 一人ひとりが参加者の自覚をもとう。
□ 異なる意見を尊重するとともに自分の意見をもとう。
□ 自分独自の意見を述べよう。
□ 多様な発想を生み出す雰囲気をつくろう。
□ 時間厳守で行動しよう！
□ 安全、健康に注意をしよう。

AIM

■ Engage with those who wish to work on the world stage.
■ Grasp the image of “working in society with motivation.”
■ Provide opportunities to think about your roles in local and global societies.
■ Find motivation to actively pursue your career.

RULES

□ Speak out!　Share your opinions freely.
□ Make sure that we are all participants.
□ Have your own ideas as well as respecting different ideas of others.
□ Express your own opinion.
□ Try to make a congenial atmosphere to encourage interest and creativity.
□ Always be punctual.
□ Pay attention to safety and to your health.

国際キャリア教育

1．概要

目的

－問題解決能力を身につける－
国際的な分野で仕事をするための専門的知識と実務能力の向上に向け、第一線で活躍する講師を招き、演習を通して高度な専門知識や技能、仕事への姿勢を学び、国際キャリアの具体化を目指します。

開催日程

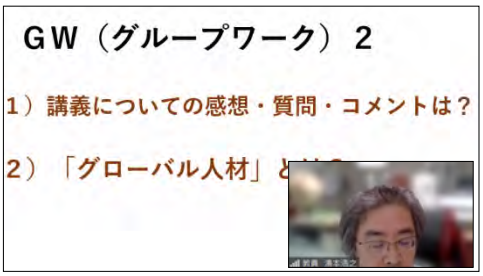
2022 年 9 月 23 日（金祝）　～　9 月 25 日（日）
事前指導：2022 年 7 月 19 日(火)　18:00-19:30

実施形態

Zoom 等によるオンライン授業

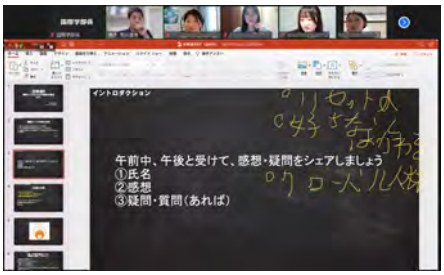
開講式

全体講義



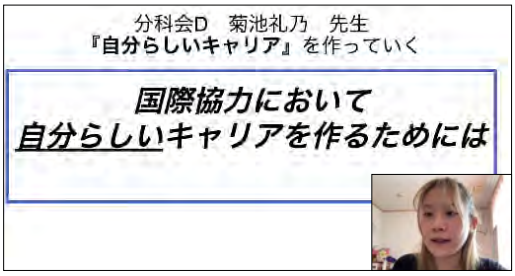
ワークショップ

パネルトーク

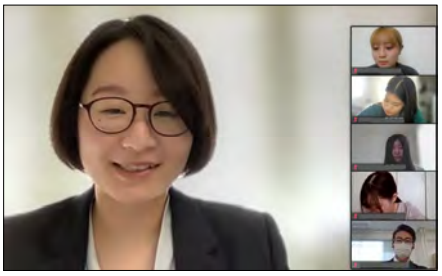


分科会

中間発表



全体発表



振り返り

閉講式

2. 開催日程

１日目（９月23日　金曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
9:00 9:30	受付	13:00 15:00	パネルトーク 「グローバル時代におけるキャリア形成について」
9:30 9:50	開講式 オリエンテーション	15:10 15:30	趣旨説明 分科会・プレゼン方法の説明等
9:50 12:00	全体講義 ワークショップ	15:50 17:50	分科会
12:00 12:50	昼食		

２日目（９月24日　土曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30 12:00	分科会	15:30 16:30	分科会まとめ 中間発表準備
12:00 12:50	昼食	16:30 17:30	中間発表
13:00 15:30	分科会	17:30 18:30	分科会 発表準備

３日目（９月25日　日曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30 10:00	分科会 発表準備	12:20 13:10	昼食
10:00 12:20	全体発表 （発表 10 分、質疑応答 5 分、講評 5 分）	13:30 15:00	ふりかえり・閉講式

3. 全体講義

混迷の時代の国際キャリアを考える
－真のグローバル人材に必要な条件－

重田　康博（しげた　やすひろ）
宇都宮大学　国際学部客員教授／前国際キャリア教育運営委員会委員長

略　歴：
北九州市立大学大学院社会システム研究科博士後期課程修了（博士・学術）。国際協力推進協会（APIC）主任研究員、クリスチャン・エイド客員研究員（イギリス・ロンドン）、NGO 活動推進センター（現、国際協力 NGO センター、JANIC）主幹等を経て元宇都宮大学国際学部教授（2007-2022）、専門は国際開発研究、国際 NGO 研究。JANIC 政策アドバイザー、アジア・アフリカ研究所理事、JVC とちぎネットワーク代表。福島原発震災に関する研究フォーラム・アドバイザー。著書に『NGO の発展の軌跡』（明石書店　2005）、『国際 NGO が世界を変える』（共著、東信堂　2006）、『開発教育－持続可能な世界のために』（共著、学文社　2008）、『激動するグローバル市民社会－慈善から公正への発展と展開』（明石書店 2017）、『グローバル時代の「開発」を考える―世界と関わり、共に生きるための 7 つのヒント』（共著、2017 明石書店）、『SDG s 時代のグローバル開発協力論』（編著、明石書店　2019）、『日本の国際協力 アジア編－経済成長から「持続可能な社会」の実現へ』（編著、ミネルヴァ書房 2021）、他。

全体講義の概要

今世界は混迷の時代と言われています。その混迷の時代を生きるための真のグローバル人材とは何か、その必要な条件を具体的な事例を示しながら紹介し、国際キャリア形成について考えます。

★最初に、混迷の時代とはどのような時代なのかを説明します。
21 世紀は 9.11 米国同時多発テロに始まり、今日まで世界のいたるところで、未曽有の危機が発生しています。米国などの主導による経済のグローバリゼーションの進行により、かつての先進国と途上国の間の格差だけではなく、同じ国の中の富者と貧者、都市生活者と農今日世界各地で、国家の分断、孤立、難民・移民の排除、自国第一主義とポピュリズムの波が押し寄せ、第 2 次世界大戦後世界の多くの国が目指してきた、「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の危機が叫ばれています。

このような「国際協調主義」と「共生・包摂・寛容な社会」の崩壊の危機の中で、NGO・CSO（市民社会組織）も含めたグローバル市民社会による多元主義の再構築と公共圏の形成が求められています。
この危機をどのように乗り越えるのか、どのように「国際協調主義」と「共生できる寛容な社会」を取り戻せるのでしょうか。混迷する時代を生きるためにグローバル人材をどのように育成すればいいのでしょうか。

★次に、「グローバル人材」とは、何かを説明します。
では、「グローバル人材」にはどのような能力が求められるのでしょうか。2011 年 6 月文部省「グローバル人材育成推進会議」中間まとめ」では、そのポイントとして、「語学力向上（英語）」と「内向き志向」

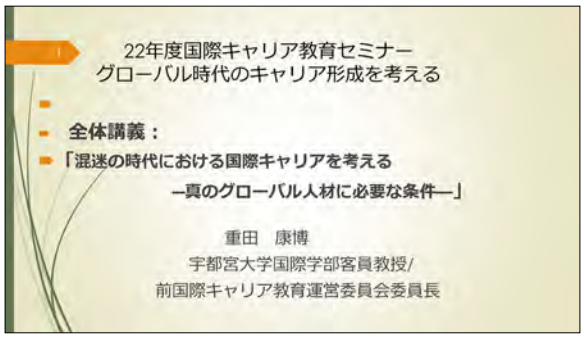
の克服で、その取組みは「英語」と「海外体験」となっています。しかし、この「英語」と「海外体験」だけで今の混迷の時代を生きるグローバル人材を育てられるのでしょうか？
☆宇都宮大学グローバル構想―「地域からのグローバル化」「地域のグローバル化」に貢献
☆国際学部国際学科において養成する人材像（改組に伴い 2017 年 4 月から実施）
⇒21 世紀型グローバル人材（グローカル人材）の育成
☆国際学部の卒業生は、その多くがフローバル企業、マスコミ、NGO などで働き、国内外で活躍しています。

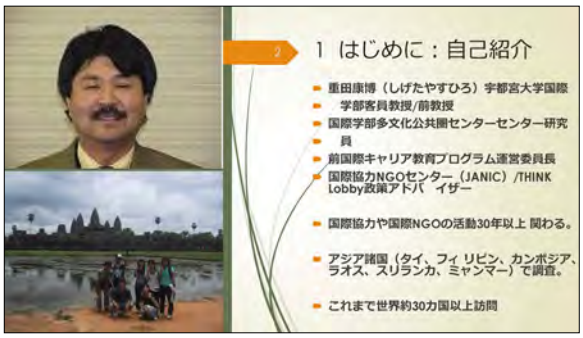
★最後に、地球公益を目指す「グローバル（地球）市民」について説明します。
「グローバル（地球）市民」として生きるためには、「グローバル（地球）市民社会」の育成が必要だと思います。つまり、「国際協調」を超えた「地球公益」を求めていく人間や社会を育て、「非寛容社会」から「寛容社会」への価値観の転換が求められています。

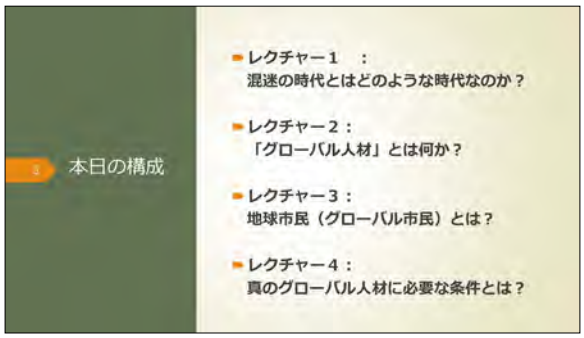
☆国連による「持続可能な開発目標（SDGs、Sustainable Development Goals ）」は、2015 年 9 月の国連総会で採択され、17 の目標と 169 のターゲットからなり、2016 年から 2030 年までの 15 年間世界の国々はこの開発目標の達成に向けて取り組み、その達成のために、国際機関、国家、企業、NGO・CSO が問題の解決に向けて取り組むことが求められています。
☆「地球公益（地球市民のための公益、Global Public Interests)」とは、公正な地球社会を求める世界の人々のための非営利活動です。その根底にあるのは公正、寛容、包摂、共生、多様性、多文化です。「地球公益」を求めることは、グローバルマインドを養い、グローバル人材を育成することだと思います。

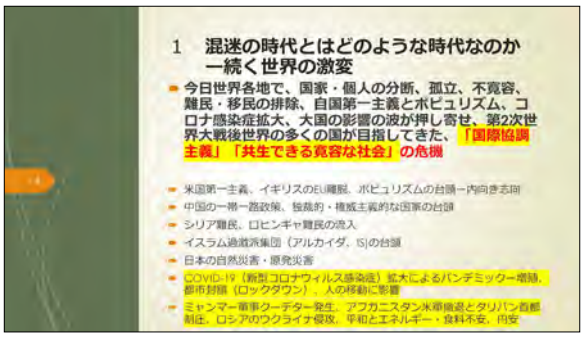
参考文献

- 駒井洋監修/五十嵐泰正・明石純一編著『「グローバル人材」をめぐる政策と現実』
- 明石書店、2015 年
- 加藤／九木元『グローバル人材とは誰か　若者の海外経験の意味を問う』
- 青弓社、2016 年
- 重田康博『激動するグローバル市民社会―慈善から公正へ発展と展開』
- 明石書店、2017 年
- 友松篤信『グローバルキャリア教育―グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版　2012 年









5

21世紀の新世界秩序はどうなるのか？
「無政府化・カオス化する世界」
ジャック・アタリ（2018）『新世界秩序―21世紀の"帝国の攻防"と"世界統治"』
Jacques AttaliDemain, qui gouvernera le monde？

- **システミック・リスク個別の問題が他に波及し、システム全体を脅かすこと**
- 10番目の「中心都市」はどこに？
- **市場による世界統治―市場のローバル化**
- 新たな世界金融危機
- 制御不能の人口問題―難民・移民問題への対応
- 地域紛争の多発
- **地球環境の破壊―種の大量絶滅など**
- 水資体衝突の可能性
- **原理主義と全体主義**
- **新感染症の拡大**

方方（2020）『武漢日記』河出書房新社
封鎖下60日の魂の記録

- 「ある国の文明度を測る唯一の基準は、弱者に対して国がどういう態度を取るかだ」
- 感染症は中国だけ蔓延したのではなく、全世界に蔓延しています。
- ウィルスは人類共通の敵
- 中国は2002年のSARS流行の教訓を生かせず

「バタフライ効果：Butterfly Effect）
ーコロナ後は「VOCA」の時代

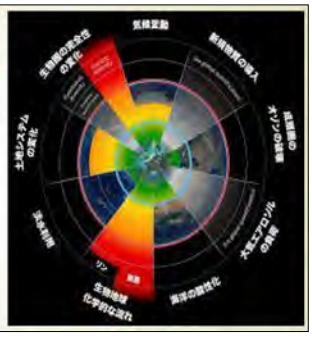
Beautiful Butterfly

- 「バタフライ効果：Butterfly Effect）
- 1972年　気象学者エドワード・ローレンツ提唱
- 「一匹の蝶の羽はたきが遠くの場所の気象に影響を与える」
- 例、ジェイムス・グリック『カオス―新しい科学をつくる』、映画『パハナ』、NHKテレビ『映像の世紀』
- 人類が病気に対する免疫力を持つのかどうか？ウィルスは「増殖すること」ジャレット・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄』（草思社、『危機と人類』（日本経済新聞社）等
- 新型コロナは私たちの生活を一変させ、「VUCA（ブーカ）」の時代
- 変動性（Volatility）、不確実性（Uncertainty）、複雑（Complexity）、曖昧性（Ambiguity）、2016年の世界経済フォーラムで使用

プラネタリー・バウンダリー（地球の限界）

J.ロックスストローム、

気候変動
成層圏オゾン層の破壊
生物多様性の損失率
化学物質の汚染
海洋酸性化
淡水の消費
土地利用の変化
窒素およびリンによる汚染
大気汚染またはエアロゾル



10

SDGs（持続可能な開発目標）

2015年9月の国連サミットで全会一致で採択。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため，2030年を年限とする17の国際目標（その下に，169のターゲット，232の指標が決められている）。特徴は，以下の5つ。

普遍性	先進国を含め，全ての国が行動
包摂性	人間の安全保障の理念を反映し「誰一人取り残さない」
参画型	全てのステークホルダーが役割を
統合性	社会・経済・環境に統合的に取り組む
透明性	定期的にフォローアップ

前身：ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）

- 2001年に国連で専門家間の議論を経て策定。2000年に採択された「国連ミレニアム宣言」と，1990年代の主要な国際会議で採択された国際開発目標を統合したもの。
- 発展途上国向けの開発目標として，2015年を期限とする8つの目標を設定。
  （1）貧困・飢餓，（2）初等教育，（3）女性，（4）乳幼児，（5）妊産婦，（6）疾病，（7）環境，（8）連帯
  ✓ MDGsは一定の成果を達成。一方で，未達成の課題も残された。
  ○ 極度の貧困半減（目標1）やHIV・マラリア対策（同6）等を達成。
  × 乳幼児や妊産婦の死亡率軽減（同4，5）は未達成。サブサハラアフリカ等で達成に遅れ

環境
人権
平和

11

2「グローバル人材」とは何か？

- 2009年「新成長戦略実現会議」の開催
- 2010年「グローバル人材育成推進会議」設置
- **2012年度「グローバル人材育成事業公募」**
- 日本経済の景気後退、若い世代の**「内向き志向」**の克服
- 中国、韓国の台頭、アジア諸国の国際的な産業競争力の向上や国と国との絆の強化
- グローバルな舞台に活躍できる「人財」の育成
- 大学教育のグローバル化を目的とした体制整備を推進する事業に対する政府の財政支援、採択42大学、50億円支給

12

求められる能力

- 2011年6月「推進会議　中間まとめ」
- 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ
- ポイントは、「語学力向上」（英語）と「内向き志向」の克服、取組みは「英語」と「海外体験」

13

「優れた取組」を評価する観点（日本学術振興会）

- 1　教育課程の国際有用性（大学の改革）
- 2　グローバル人材としての能力の育成(学生の育成)
- 3　語学力向上のための一体的な取組（学生の育成）
- 4　教員のグローバル教育力向上（大学の改革）
- 5　日本人留学生の留学を促進するための環境整備（学生の育成）

どのような「国際キャリア」を目指すのか？
渥美育子（2013）『「世界で戦える人材」の条件』

14

- グローバル人材になる5つの「道（どう）」
- 道1　グローバルマインドを持つ
  世界のすべての人を見る心を持つ
- 道2　<文化の世界地図>で世界を俯瞰ー4つの文化コード
  リーガルコード、モラルコード、レリジャスコード、ミックスコード
- 道3　倫理とリーガルマインドを強化する
- 道4　日本のDNAを磨き、日本型グローバル人材を目指す
  自然の摂理、神道の二つの要素
- 道5　21世紀の学習方法に切り替える

グローバル人材には何が必要？
多様性の尊重　Diversity

- **海外に住む日本人、日本に住む外国人の増加**
- **女性、マイノリティの社会参加**
- **相手の宗教、言語、文化の尊重**
- **コロナ禍の中で世界や日本がどのように変わるのか**
- **多様な働き方、多様な学び方に変化**
- **多様なITの活用による人のつながり方の変化―SNS、検索エンジン、GAFAのパワフル化**

AI（Artficial Intelligence）とどのように向き合うのか？

- 人間の脳の働きによる知的な行為を、コンピューターを使って再現させる技術
- 例、対話型人工知能サービス、AI翻訳、自動運転
- 自動化の可能性が高いとされた職業
- 自動化の可能性が低いとされた職業
- 精神科医、国際協力専門家、作業療法士、言語聴覚士、産業カウンセラー、外科医、鍼灸師、養護学校教員、メイクアップアーティスト、小児科
- **人であることの強みー創造性、協力、感覚、コミュニケーション、共感、特定の技術、AIを使いこなす人間になれるのか？**

スティーヴン・ホーキングズ
ブラックホール等の理論物理学者
『ビッグ・クエスチョン<人類の難問に答えよう>』
ー「科学に興味なし」ではすまされないー

- 「人類の未来のためにできること
- 1、惑星を求めて宇宙を探査すること、
- 2、人工知能を建設的に利用すること

- すべての若者は、科学のさまざまな科目に親しみ、それらに自信を持つべきだ
- 科学上の次の大発見は、何か？

- 大切なのはあきらめないことだ。想像力を解き放とう。より良い未来を作っていこう。

18

難関なき道（2017）Utopia for Realist
ルトガー・ブレグマン（オランダの歴史家）著
野中香方子訳

- 人間はAI（人工知能）との勝負に勝てない
- テクノロジーの恩恵を手放したくないのであれば、残る選択肢はただ一つ。
- 「再分配」
- 金銭、時間、課税、そしてロボットも再分配する。

- 具体的方法：
- 「ベーシック・インカム（基本的な所得」
- 労働時間の短縮（1日３時間労働）

E・F・シューマッハ（1986）の『スモール　イズ　ビューティフル』の理論と実践

- シューマッハが1970年代に経済成長一遍の物質至上主義と科学技術の巨大信仰を批判し、人間中心の経済学として小さな経済でも適正技術や中間技術がいかに美しく正しいのかという人類社会への問題提起に感銘

- 英国のNGO「プラティカル・アクション」（旧IMTG)による適正技術の実践

20

『LIFE　SHIFT－100年時代の人生戦略』(2016)　リンダ・グラットン/アンドリュー・スコット/訳　池村千秋

- 従来は３ステージの人生
- 「教育」⇒「仕事」⇒「引退」（定年後６０代）

- しかし、人生１００年時代をどのように生きるのか？
- 有形資産、無形資産、特に「無形資産」の重要性
- 出口治明『遠暦からの底力ー歴史・人・旅に学ぶ生き方』

複数のキャリアを渡り歩く「マルチステージ」の人生へのシフトの勧め

21

1「エクスプローラー（探検者）」

人生の旅をして自分と世界を再発見する時期、選択肢を広くし幅広い計路を検討

2「インディペンデント・プロデューサー（独立生産者）」

自由と柔軟性を重んじて独立して小さなビジネスを起こす

3「ポートフォリオ・ワーカー」

企業、教育機関、NGOなど様々な仕事や活動に同時並行に携わる

この3つの共通のキーワード：選択肢の多様化

日本で社会人の「学び直し（Recurrent)」がむずかしい理由　⇒　リカレント教育

1　時間、2　お金、3　目的の欠如、4　企業の姿勢

- 「無形資産」には以下の3つがある。
- 1　生産性資産ー自分の生産性や高度なスキル
- 2　活力資産ー肉体的・精神的な健康が不可欠
- 3　変身資産ー変化への対応力・柔軟性
- 生涯学習、健康、良好な人間関係の3つが重要

- コロナのパンデミックは「新しい生活規範」をもたらした（グラッデン教授）
- パンデミックは、社会に抵抗力Resilience、共創（共同創造、Co-Creation)をもたらした。

3「地球（グローバル）市民とは
ーどのような国際キャリアを歩むのか？

なぜ世界の問題に関心を持ったのか？

- 主体的に「きっかけ」を作る。
- 自分が気づかなれば何も変わらない、自分が気づけが世界が変わる
- 世界の問題に関わることができるキャリアの道を歩む、例、国際協力活動への参加
- 世界にある問題に関心を持ち続け、常に自分との関わりを考える

2019年に亡くなった二人の日本の国際人
ー国際協力、平和、アフガニスタン

緒方貞子さん（元国連UNHCR）　　中村哲さん（元国際NGO）

緒方貞子さんの人生キャリア
ー難民救済と人間の安全保障、

- 1927年生、東京都、犬養毅首相のひ孫、父中村豊一は外交官、外交官一家
- 米国での経験、英語の勉強、日中関係の重要性
- 聖心女子大学、ジョージタウン大学、カルフォルニア大学バークリー校、国際感覚を養う
- 結婚して家庭へ、国際基督教大学講師から国際連合総会日本代表団へ、女性国連公使第1号、国連の活動に参加
- 国際基督教大学准教授、上智大学教授等歴任
- 第8代国連難民高等弁務官（1990年～2000年）
- JICA理事長（2003年-2013年）
- 2019年ご逝去
- 混迷の時代人間の安全保障の危機、援助も国際交流も双方の利益が大事、歴史を忘れずに対話を提唱

中村哲さんの人生キャリア
ーアフガニスタン30年の闘いと難民支援

- 1946年福岡市生、医師、脳神経内科、九州大学医学部
- 日本キリスト教海外医療協力会（JOCS)からパキスタン・ペシャワールへ派遣、ペシャワール会現地代表、ハンセン病を中心とする医療活動
- その後、アフガニスタンで医療活動、独学で土木技術を学ぶ、アフガニスタンでクナール川からガンベリー砂漠まで堰（せき、筑後川山田堰）を作り、25キロの用水路建設・完成、10万人の農民の生計基盤を支援。医学、農業、土木の融合
- 2018年アフガニスタン国家勲章受章、2019年名誉市民
- 2019年12月4日アフガニスタン東部ジャラーラバドで銃撃を受け、ご逝去、
- 中村さんの言葉「一隅を照らす」（最澄の名言）、「良心を束ねて河となす」、「天、共に在り」

私の世界の問題への関心

- 大学の時インドシナ内戦とインドシナ難民の発生、カンボジアのポルポト政権による大虐殺とベトナムからのボートピープルの大きな衝撃、世界の問題に関心を持つきっかけ
- 民間企業化学メーカー営業　１年半勤務
- 特殊法人嘱託出版・編集　３年半勤務
- 財団法人国際協力推進協会（(APIC)研究員　８年勤務
- 英国NGO　Christian Aid ロンドン客員研究員　３年勤務
- NGO活動推進センター(JANIC）政策提言・調査　３年勤務
- 大学教員22年年、宇都宮大学国際学部教授15年勤務、
- 2022年定年退職、その後宇都宮大学国際学部客員教授
- 国際協力NGOセンター（JANIC)/THINK Lobby政策アドバイザー

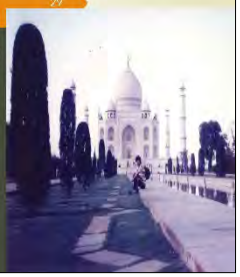
国際文化会館・国際協力推進協会専務理事
松本洋氏との出会い
私の人生の恩師

- 松本氏の持論：３つのP・３つの心
- Public Mind(おおやけの心)
- Produced　Mind（しかけの心）
- Play　Mind（あそび心）
- 自分のボールは相手に投げ返せ！
- 自分の城を守れ！

南の国々との出会い

29

- 大学時代の1981年に南の大国「インド」を訪問、コルカタ、ヴエナラシ、アグラ、カジュラホ、ゴア、ムンバイに滞在
- インドを訪問したのは南の国の代表であり、混沌とした状態を実体験したかった
- 例、小田実『何でも見てやろう』、藤原新也『インド放浪』『全東洋街道』
- 南の都市カルカッタ（コルカタ）へ行ってみて、「貧困」というグローバル・イシューの問題と初めて直接向き合う。



南の国々でのグローバル・イシューとの出会い（カンボジア）クメール・ルージュの悲劇を乗り越えて

- カンボジアの国際報道
- 1977年のカンボジアのポルポト政権による圧政と約150万人の虐殺、カンボジア難民の流出の衝撃、
- その後筆者がカンボジアのNGO研究を行い、国際協力活動に参加していく契機
- 1988年カンボジアを日本国際ボランティアセンター（JVC）の視察団のメンバーとして訪問し、虐殺や紛争国の悲惨を知る。
- カンボジアの紛争や貧困問題などグローバル・イシューに関わることになる。

1988年日本国際ボランティアセンター（JVC）カンボジア・給水活動を行う蓑田さん

南の国々でのグローバル・イシューとの出会い（スリランカ）

32

サルボダヤの「人間開発モデル」
人間開発のニーズ（BHNs）を満たすために、
①きれいで美しい環境、
②清潔な飲料水、
③十分な衣料の供給、
④適正でバランスのとれた栄養、
⑤質素な住居、
⑥基本的ヘルスケア、
⑦基本的な交通・通信機能、
⑧最小限のエネルギー供給、
⑨十分な教育、
⑩精神的・文化的ニーズの実現
（アリヤラトネ、ビニヤ、2011）

人間開発モデルは、経済開発だけでなく、文化的、道徳的、精神的開発が重要であり、伝統文化、宗教的価値観を見直し、心の開発というアプローチを実施、低開発状態を目指す人類にとって必要な教育

- 1987年スリランカ
サルボダヤ運動創始者アリヤラトネ氏と記念撮影　私教経済、人間の尊厳と労働の分かち合い

3　北の国々でのグローバル・イシューとの出会い（カナダ、イギリス）

- 多様な移民国家「カナダ」での開発教育活動
- 1987年に外務省の「カナダの開発教育実態 調査団」に参加した時、カナダ のNGOや開発教育団体が多種多様な開発の課 題を自らの多文化共生社会に引き付けて、教材 の作成など開発教育の実践を行っていることが 新鮮だった。
- 「イギリス」でのNGO活動
- 1994年から1997年までのNGO「クリスチャン・エイド」に 客員研究員として在籍した。英国のNGOは海外協力、キャンペーン、政策提言、開発教育、フェアトレード活動を通じて行って「貧困問題」「貿易問題」（例「貿易ゲーム」）「債務問題」を扱う。

北の国々でのグローバル・イシューとの出会い（イギリス）　多様性と女性の参加

34

特にグローバル・イシューはやり方次第で 世界的なキャンペーンになることをアフ リカの債務削減帳消し運動「ジュビリー2000」 の活動を通じて実感

1996年からロンドンの大学院にも通い、Development Studiesを学んだことはグローバル・イシューをマクロの視点から開発、貧 困、債務問題など総合的に分析する必要性を 教えてくれた。世銀の東洋の奇跡、アフリカの構造調整プログラム

- クリスチャン・エイドのアジア・太平洋チームと共に、左端が筆者（1994）。

グローバル・イシューの活動に参加（貧困問題、貿易格差、債務削減）

35

2005年オックスファム・インターナショナル訪問、事務局長ジェレミー・ホップブスと共に

筆者も日本のNGO「オックスファム・ジャ パン」や「ほっとけない世界のまずしさキャ ンペーン（通称ホワイトバンド・キャンペー ン）」「ジュビリー2000九州」の活動への参加 を通じて、貧困問題、貿易格差、債務削減の解 決を訴えた

BRAC訪問 2019年３月11日

- バングラデシュ最大のNGO
- BRAC
- Fazie Hasan Abed
- Founder and Chairperson
- Small is beautiful
- Big is necessary
- BRAC is Hybrid

36

４　まとめ：真のグローバルル人材に必要な条件とは？ー国境を超えるグローバルマインド

37

- 混迷の時代にどのように人材を育成するのか？
- どのような能力を求められるのか？
- 英語と海外体験だけではない
- 「システミック・リスク」「バタフライ効果」を予想し克服する力が必要
- 「選択肢の多様化」を生き抜ける人材が求められる
- 「専門性」と「マネジメント力」の育成
- 「人と人」、「ニーズとニーズ」をつなげる人

グローバル人材になるために：個人的な見解

38

- Think Globally, Act Locally
- Think Locally, Act Globally
- Small is Beautiful かBig is Necessary か
- 想像力から創造力への展開
- ライフワークを見つける
- 遊び心を持て
- 自分の居場所を見つけ、ベストを尽くせ！
- SDGsや南の問題は、「格差」や「ライフスタイル（生活）」に対する北の責任の問題、私たちの生活の見直しの必要性、

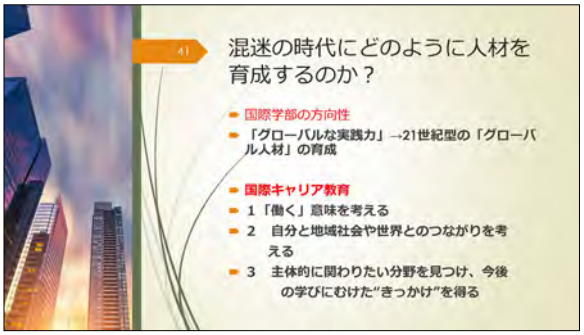
タイで活躍する宇都宮大学のグローバル人材Ⅰ

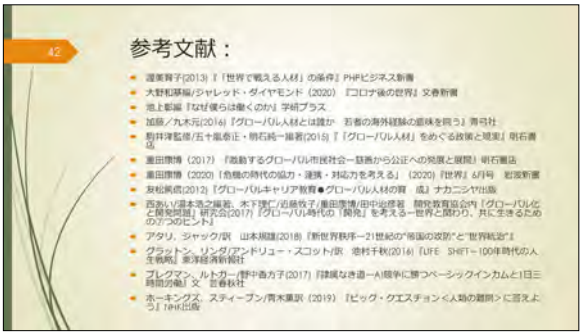
39

2018年8月25日宇都宮大学タイ国同窓会総会（2000～1500、バンコク郊外、Phuan Restaurant）
タイ帰りら、タイ人の宇都宮大学卒業生（現在カセサート大学他）
同窓会卒業生1、現役学生1、等参加　、宇都宮人学教員、奇計約20名参加

国際学部国際キャリア教育科目

- 国際キャリア教育
- International Career Seminar
- 国際キャリア実習（インターンシップ）
- 多文化公共国際貢献論（グロ　バル）
- 多文化公共国際貢献論（グローカル）
- 多文化公共国研究演習
- 海外フィールドワーク演習Ⅰ・Ⅱ（Ⅱはスリランカ海外フィールドワーク）
- グローバルA演習Ⅰ・Ⅱ（海外体験、Ⅰ2020年度、21年度はタイのタイサート大学、パラッチェニの十一大学と協力）
- Global Management：Asia and Development(Learning+L、グローバル人材育成プログラム)
- RSC Management
- 情報と倫理
- 統計学





参加者のレポートより

（コメントは原文のまま記載しています。）

- 多文化共生について学び、グローバル人材、グローバル市民になるために必要な力を知ることができた。他学部、他学年の人々との有意義な交流ができた。
- 全体講義でセミナーの目標に触れながら、歴史的な背景を知ることができ、分科会などにつなげやすかったので良かったと感じています。
- 全体講義でのひとつのセクションが終わる事にブレークアウトセッションがあったことで、ディスカッションにより深みが出たのではないかと感じた。さらに、ひとつのセクションごとにディスカッションがある事でその内容を整理できるため、自分にあっていた。
- 講義内で出てくる印象的なワードがあったり、セッションごとに出会う人がいたりして、とても楽しかったです。
- 重田先生の全体講義から後のパネルトークや分科会に繋がる話もあり、とても参考になった。
- 世界と自分のつながりを考えたり、科学が発展した時代にどう生きるかを考えたり、いろいろ議論でき良い時間だった。
- 国際キャリアを考える上で、初めにグローバル人材や地球市民という言葉の意味を考えることができるのはとてもよかった。
- 先生のお話から考えたことについてすぐに他の学生と共有するというのはあまりないことなので、やはりオンライン開催のメリットはこれだなと思いました。
- キャリアデザインの重要性を学ぶことができた。キャリアデザインについてこれまで考えたことがなくどのようにデザインしていけばよいのかわからなかったが、グループでのディスカッションで、グローバル人材という理想像が確立され、身に付けるべき技術や能力が分かりやすくなった。グローバル人材に様々な技術やの力を身に付けていきたいと考えた。
- 先生の講義から、グローバル人材になるには受け身だけでなく自分から自国について発信することも重要であると考えた。そのためには、自分自身が自国について理解しておく必要がある。日本人であっても日本について知らないこと、興味関心がないことが多くあるがそれらのことについて学ぼうとすることでグローバル人材に近づくことができるのではないかと考えた。
- 若い世代の「内向き志向」というお話が印象的だった。私もまさしくこれだと思った。だからこそ、現代の日本では、「内向き志向」を自ら克服していく人材が求められているのだと思う。このセミナーで克服するためのヒントが沢山得られたので実践に移していきたい。
- 選択肢が多様化する中で自分がどのような決断をするか、自ら行動し得た経験の中から人世の目的やなすべきことを見つけていくことの重要性を学んだ。
- これまでに講義で学んだ「グローバル人材」について再確認し、これからのキャリアについて関連付けて考える良い機会となった。

4. 分科会・講師及び講義概要

分科会Ａ	自分に何が出来るか、改めて考えてみよう！
講　　師	**黒崎　めぐみ　氏** NHK 宇都宮放送局　局長
分科会Ｂ	教育×ビジネスの可能性を探る
講　　師	**粕谷　直洋　氏** 株式会社 SKT　教育事業部　部長 CAN!P　代表
分科会Ｃ	違いを強みに変えるコミュニケーション
講　　師	**岩井　俊宗　氏** 特定非営利活動法人とちぎユースサポーターズネットワーク　代表理事
分科会Ｄ	「自分らしい」キャリアを作っていく
講　　師	**菊池　礼乃　氏** 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 事業サポート課　課長
分科会Ｅ	気づこう！無意識の思い込みが生活や職場に与える影響
講　　師	**川面　充子　氏** 宇都宮大学　ダイバーシティ研究環境推進本部　特任助教
分科会Ｆ	「多文化」が「共生」する社会とは？
講　　師	**申　惠媛　氏** 宇都宮大学　国際学部　助教

分科会 A

自分に何が出来るか、改めて考えてみよう！

黒崎　めぐみ（くろさき　めぐみ）
NHK 宇都宮放送局　局長

略　歴：
平成３年、東京大学文学部英語英米文学科卒業後アナウンサーとして NHK に入局。名古屋局、大阪局、東京アナウンス室、編成局等を経て令和２年８月より現職。
キャリア形成の中で一番影響を受けたのは 1989 年に報じられた世界の様々な出来事です。特にルーマニア革命はかつて住んでいた国だったこともあり大きな衝撃を受けました。

講義の概要

1.　仕事の概要

NHKに入ってから27年間は主に放送の現場でアナウンサーの仕事をしていました。
放送コンテンツをどうすれば多くの人に、分かりやすく届けることが出来るのか、試行錯誤する日々の中で「日本語」の奥深さ、難しさ、そして素晴らしさも体感しています。
編成局時代は組織について広く考える仕事が中心でした。「コロナ禍でのメディアのあり方」や「持続可能な働き方」も追及してきました。現在は宇都宮放送局の局長として、「地域に頼りになっていただける、あって良かったと思っていただける公共メディアとして」何が出来るのか、職員全員とともに考え、チャレンジを続けているところです。

2.　キャリアパス

大学の専攻は英語英米文学科でした。小さい頃は「英語の先生になりたい」と漠然と思っていたので、英語の教員免許も取っています。放送に興味を持ったきっかけは「親しみがあるし、楽しそう」という単純な理由からでした。自分の小さい頃からを振り返り、「何をしたいのか」色々考えた中で「放送局で子供向けの英語番組を作りたい！」と思うようになりました。ただ、ゼロから生み出す「ディレクター」よりは「表現を磨いて伝える」仕事に次第に魅力を感じるようになり、最終的に「アナウンサー」として社会人生活をスタートさせました。仕事内容は幅広く、学ぶことの多い充実した日々があっという間に過ぎていった感じです。

3.　分科会の内容

自分のキャリアを考えていく中で一番大事なのは「自分を知ること」だと思います。
ただ自分で考えているだけでは幅が広がりません。分科会では参加した皆さんの考えから様々な発見をして、自分がキャリアを考えていく中で必要な事を自分自身の力で見つけていただきたいと思います。

4.　事前に調べてほしいキーワード

- 最近気になる世界のニュース・話題
- 最近気になる地元のニュース・話題

■　現時点で目指している自身のキャリアについて（漠然としていてもかまいません）
■　上記キャリアを決める上で大切にしたこと（３点ほど）

5.　参考資料等

特にありませんが、情報収集の際、NHK のサイトも色々ありますので参考までに記載します。

■ 国際ニュースをわかりやすく世界の最新情報を掘り下げた特集や解説記事などをまとめた特設サイト
NHK 国際ニュースナビ 世界の最新情報をわかりやすく
https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/

■ 日々のニュースや特集記事、地域の情報など
NHK ニュース 速報・最新情報
https://www3.nhk.or.jp/news/

■ 実際に就職活動をしている大学生向けのサイト
NHK 大学生とつくる就活応援ニュースゼミ｜ニュースや時事問題が１からわかります（nhk.or.jp）
https://www3.nhk.or.jp/news/special/news_seminar/

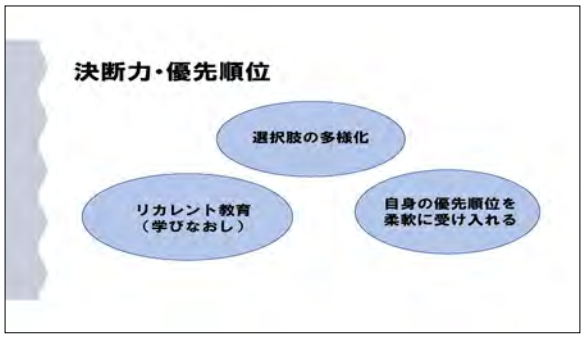
■ NHK 宇都宮放送局の HP にも栃木の情報を掲載しています。
NHK 宇都宮放送局
https://www.nhk.or.jp/utsunomiya/index.html

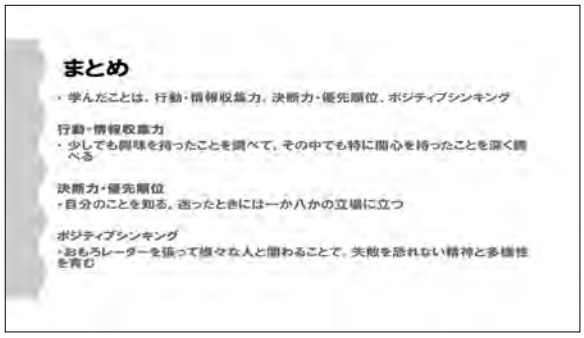
■ 過去の番組なども見られます。
NHK アーカイブス
https://www.nhk.or.jp/archives/

6.　事前予習用リーディング課題

特にありません。上記のサイト等を見て、自身のキャリア形成について考えておいてください。

参加者による全体発表

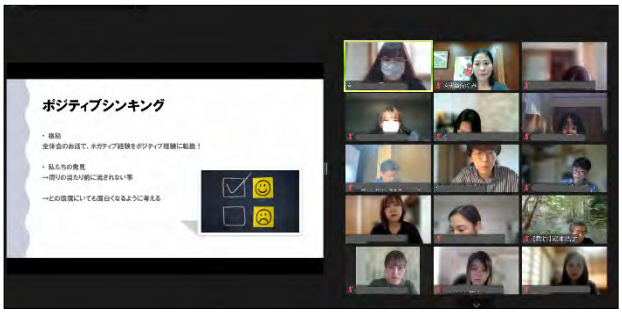




参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- セミナーを通しての発見の一つは自分が本当に何をしたいかを考えるには、今までの自分を振り返ることが重要だということである。高校時代に描いていた「在日外国人労働者のサポートをしたい」という希望を忘れかけていたことに気づいた。当時考えていたことを思い出し、行動していきたいと思う。
- 分科会を通して、「自分に何ができるか」を考えることができたことは主に３つある。１つは、今までの自分を振り返ることである。（中略）そこから自分の将来について考えることができた。（中略）2つ目は、一か八かの立場に立ってみるということである。（中略）３つ目は上手に人に頼るということである。留学に関する情報、就職に関する情報を得る上で、自分より経験があり、その分野に精通している方に頼ることも重要であると感じた。ピアサポートのシステム等を活用して、自分の不安を解消することができたらよいと思う。
- 自分のキャリアについて考えるとても良い機会となった。分科会Ａは講義が少なく、学生同士で話し合いアドバイスをしていく形式だったため、学ぶだけでなく、相手のことを考えてアドバイスするという力も身に付けることができた。
- 分科会の中でも話が多く出たが、そもそもキャリアに関する情報が圧倒的に不足していると感じた。自分はある程度キャリアについて方向性は定まっているが、そこから深く調べることはできいなかったため、課題であると感じた。更に、実際に行動に移していくことだと感じた。情報収集とも関連するが、調べて興味を持つがそれで終わってしまうことが多かった。資格であったりインターンであったり，このセミナーに参加したという行動をきっかけにして、積極的に取り組んでいこうと思う。
- 今後の課題として、分科会で出た共通の悩みとしての「何か行動をしたいが周りの目や意見が気になり、（怖くて）行動に移せない」ということを改善したい。そのためには、アクションプランでも発表したように「ポジティブシンキング」を自分の軸にして物事に取り組んでいきたいと思う。

- 最近気になるニュースがなぜ引っかかるのかを突き詰めていくと自分の核の部分が見えてくるということを黒崎先生から学ぶことができ、自分にとっては衝撃的な気づきであった。
- キャリア開発に関する活動に参加するのは何度目かになるが、今回は徹底的に自己分析を行い、反省を通して「自分に何ができるか」変に背伸びせず考えることができたのが新鮮で糧になった。自分のペースでこれからもキャリア形成していきたい。
- 分科会では、自分が目標とするものが曖昧でやりたいことが何なのか決まっていない人が集まっていた。一人一人自分が考えていることや悩んでいることを共有し合い、お互いアドバイスしあい、自分が考えているキャリアに向かうためには具体的にどのような行動をとればよいかを考えた。行動力や決断力がない場合は、抽象的ではなく行動計画を具体的に立てることで小さいことからでも行動に移せると考え、少しずつ自分が目標とするキャリアに近づくための方法を学んだ。
- 私たちの分科会は「働くこと」についてとことん突き詰める分科会だったので、それについて深く考えることができる３日間でした。目標を立てるだけでなく、そこにたどり着くためのアクションプランを考えることが大切だということを学びました。そこで、今国際学部にいるからこそできる語学力の向上と、新たに興味をもった福祉分野の学習を両方することで将来目指す仕事に役立てるという過程が明確になり良かったです。（中略）また、全員でプレゼンテーションを作る過程で、意見を出し合いデザインを提案したりと、いつもは内向な自分から少し成長できたことも、成果の一つだと考えました。



分科会Ｂ

教育×ビジネスの可能性を探る

粕谷　直洋（かすや　なおひろ）
株式会社 SKT　教育事業部　部長
CAN!P　代表

略　歴：
2009 年に宇都宮大学を卒業後、公文教育研究会に７年間勤め、国内、海外で経験を積む。2016 年に福岡へ移住し現職へ。「自ら考え、選択・決定できる子」を育てるべく、民間学童事業を中心に、幼児、小学生向けに様々な教育サービスを手がけている。2021 年度にグロービス経営大学院で MBA を取得。２児の父で昨年５ヶ月間の育休取得。

講義の概要

1.　仕事の内容

・概要
幼児は小学生向けの民間の教育を仕事としています。現在は民間の学童保育や、英語教室などの学習塾を運営する会社の経営に携わっています。

・仕事の面白さ
なんといっても子どもの成長に関わることができることです。働いた成果がこれほどわかりやすく、やりがいを感じることができる仕事はないかもしれません。また預けてくださる保護者からの感謝の言葉も、仕事のモチベーションになっています。現在は立場上、直接子どもと関わることは減っていますが、経営サイドとして、子どもの成長を促す環境をどう作るかが面白さの一つです。

・仕事の意義
教育という仕事は、人の成長を後押しする仕事です。また大きな視点で見れば国造りにも貢献するとも言えます。一人一人の子どもたちと向き合い、成長をサポートしていく中で、自分自身も成長させることができる非常に意義のある仕事だと思っています。

2.　キャリアパス

【学生時代】
元々教員志望でしたが、浪人時代に出会った講師の影響で、国際関係にも興味が沸き宇都宮大学国際学部に入学。国際協力を研究テーマにして活動していた中で、貧困解決における教育の重要性を感じていました。教育実習を経て、新卒で教員になることに疑問が沸き、民間での就職を決意。就職活動はグローバルに活動ができる分野で行い、教育で海外進出している公文教育研究会に就職しました。「教育で世界平和を」というビジョンにも共感したことも大きな志望要因でした。

【社会人 1.0】～新卒で民間の大手教育会社へ～
「30 歳までに海外に行く」を目標に、がむしゃらに働き、30 歳で目標を達成しましたが、その後の目標が定まらず、迷走していました。自分が当時やりたいことは、子どもの成長に直接関わることだと思い、31 歳で転職を決意しました。（当時は改めて教員を考えていました。）会社の哲学であった「悪いのは子どもではない」「子どもの可能性の追求」は今でも仕事の原点となっています。

【社会人 2.0】～社員 5 名の中小企業へ転職～
　ふとしたきっかけで、転職し福岡へ移住。民間学童保育「きりんアフタースクール」の事業を立ち上げ、3 年後には事業部の責任者となりました。社内の他のビジネスにも関わり、徐々に経営サイドへの役割が増えていきました。直接子どもの成長に関わり、かつ経営にも関われる環境は充実していました。一方で経営の知識や経験がない中で苦労の壁にぶつかることも多々あり、仕事をしながら、経営大学院に通うことにしました。

【社会人 3.0】～自分の目指す教育を創る～
　立ち上げた事業が成功し、後任に引き継いだタイミングで、第 2 子が誕生し、5 か月の育児休暇を取得しました。大学院も無事卒業し、2022 年 4 月に復帰と同時に、社内で次なる挑戦として、CAN!P というブランドを創設しました。このブランドでは、「達成感」「驚き」「感動」を感じることができる「！」な体験を届けることをビジョンに掲げ、探究型スクールやアドベンチャー事業を展開しています。

3.　分科会の内容

　分科会では私の話を聞くよりも、皆で議論、実践を中心に進めます。教育をテーマにして、皆で議論しながら、実際に教育ビジネス提案を作ってもらう予定です。その実践の中で、「仕事とは」、「社会貢献とは」、「ビジネスという手法とは」について一緒に考えていきます。
　教育は人を創る上で欠かせないものです。時代に応じて求められる教育も変わり、21 世紀に入り、世界各国も教育を変化させています。一方で日本の学校教育は少しずつの変化をあるものの、いまだ「言われたことを早くこなす昭和型の教育」から抜け出せていない印象があります。グローバル人材を育てる中で、学校の教育が全てではありません。放課後やオンライン、フリースクールなど様々な教育のカタチが存在します。民間でできること、また持続可能なビジネスとして成立させる方法を一緒に考えてみたいと思います。

4.　キーワードリスト

- ソーシャルビジネス
- 人生 100 年時代
- 21 世紀型スキル（21 世紀型教育）

5.　参考資料等

- リンダ グラットン他「ライフシフト」東洋経済新報社、2016
- キャシー・ハーシュ=パセック他「科学が教える、子育て成功への道」扶桑社、2017
- 安宅和人「シンニホン」NewsPicks パブリッシング、2020
- ポールタフ他「私たちは子どもに何ができるのか」英治出版、2017
- 平成 29・30・31 年改訂学習指導要領（本文、解説）
  https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm

6. 事前予習用課題

見ておいてほしいサイト

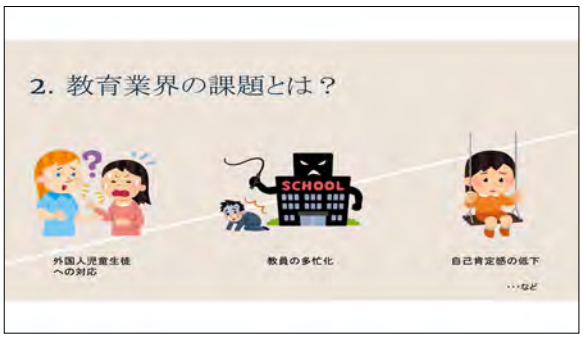
- 10 分で読める『ライフ・シフト 100 年時代の人生戦略』
  https://type.jp/tensyoku-knowhow/skill-up/book-summary/vol6/
- 家庭教育新聞　OECD 教育 2030 を公表　“生き延びる力”とは
  https://www.kknews.co.jp/post_ict/20180305_1b
- サイモン シネック: 優れたリーダーはどうやって行動を促すか
  https://www.youtube.com/watch?v=qp0HIF3SfI4
- CAN!P　WEB サイト（私の立ち上げたブランド紹介サイトです。）
  https://canp-edu.jp/

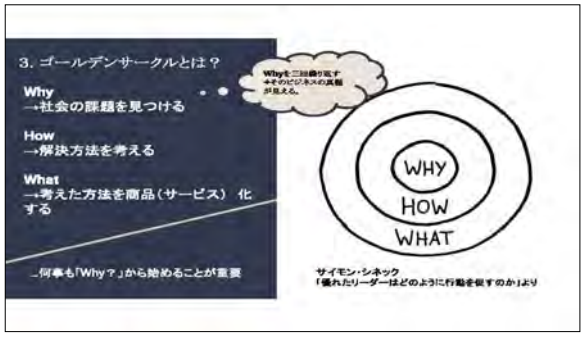
参加者による全体発表

分科会B
「教育現場の問題を
ビジネスで解決するには」
講師：柏谷直洋
池田小春、今井杏、上山楠々
草山彩夏、千葉成南美、蓮見詩歩、横井春香
教育×ビジネスの可能性を探る

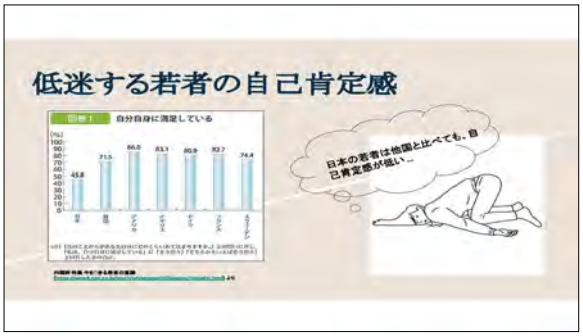
Summary
—分科会で学んだこととそれを生かして—
1. ビジネスとは？
2. 教育業界の課題について
考えてみよう
3. ゴールデンサークルで
考えてみよう
4. 課題の解決方法を
考えてみよう

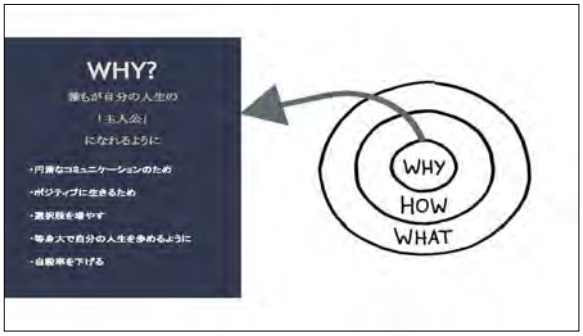
1.ビジネスとは
①誰かに喜んでもらうためにするもの
②人や地域の課題を解決するもの

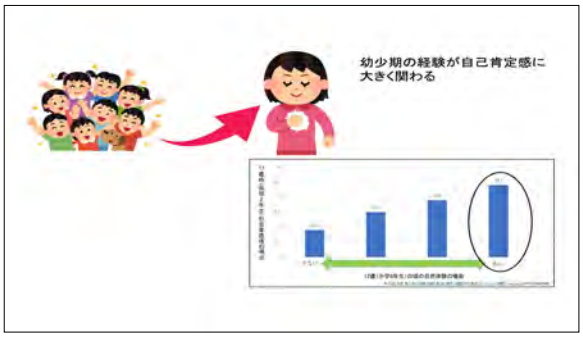

2. 教育業界の課題とは？
SCHOOL
外国人児童生徒への対応
教員の多忙化
自己肯定感の低下
…など

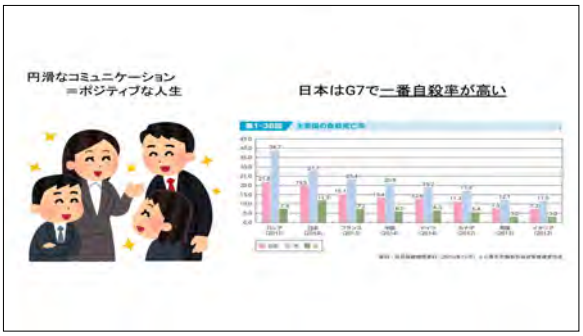

3. ゴールデンサークルとは？
Why
→社会の課題を見つける
How
→解決方法を考える
What
→考えた方法を商品（サービス）化する
…何事も「Why？」から始めることが重要
Whyを二回繰り返す
→そのビジネスの真髄が見える。
WHY
HOW
WHAT
サイモン・シネック
「優れたリーダーはどのように行動を促すのか」より

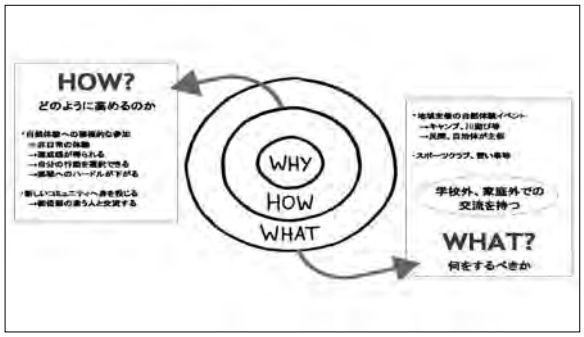
ゴールデンサークルを使って
教育業界の課題を解決してみよう！


低迷する若者の自己肯定感
自分自身に満足している
日本の若者は他国と比べても、自己肯定感が低い…

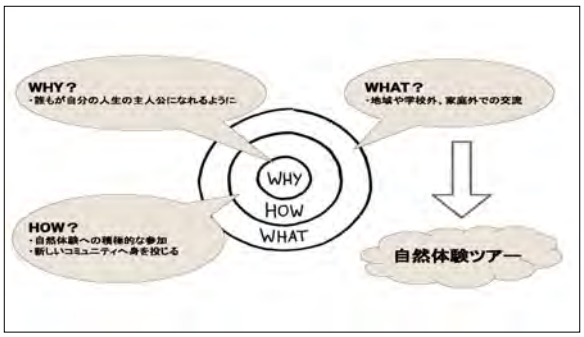

WHY?
誰もが自分の人生の
「主人公」
になれるように
・円滑なコミュニケーションのため
・ポジティブに生きるため
・選択肢を増やす
・等身大で自分の人生を歩めるように
・自殺率を下げる
WHY
HOW
WHAT


幼少期の経験が自己肯定感に
大きく関わる

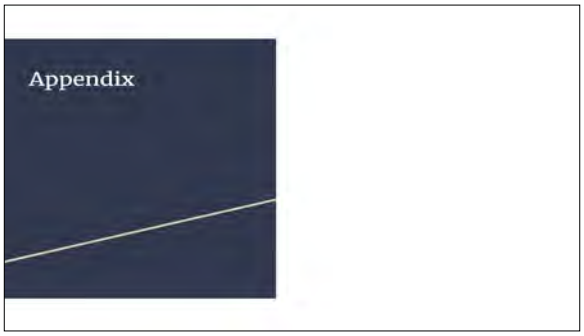

円滑なコミュニケーション
＝ポジティブな人生
日本はG7で一番自殺率が高い


HOW?
どのように高めるのか
・自然体験への積極的な参加
→非日常の体験
→達成感が得られる
→自分の行動を選択できる
→進路へのハードルが下がる
・新しいコミュニティへ身を投じる
→新視野の違う人と交流する
WHY
HOW
WHAT
・地域主催の自然体験イベント
→キャンプ、川遊び等
→民間、自治体が主催
・スポーツクラブ、習い事等
学校外、家庭外での
交流を持つ
WHAT?
何をするべきか

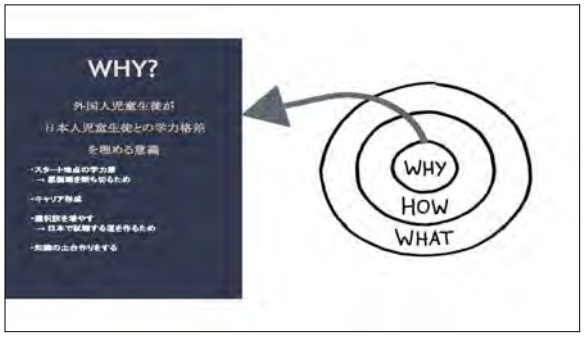
アクションプラン
地域の児童生徒が集まる
親と離れた
自然体験ツアー
・いつ／どこで
長期休み中
地域・学校／家庭外
・誰が／誰に対して
民間や自治体が主催
保育園児・幼稚園児・小中学生を対象
・何を／どのように
年齢、地域に縛られない自然体験（山、川、森林など）
資金：参加費、自治体所有の建物
・目標／期待される成果
達成感が得られる、仲間が増える、価値観が広がる、
挑戦することへのためらいが減る

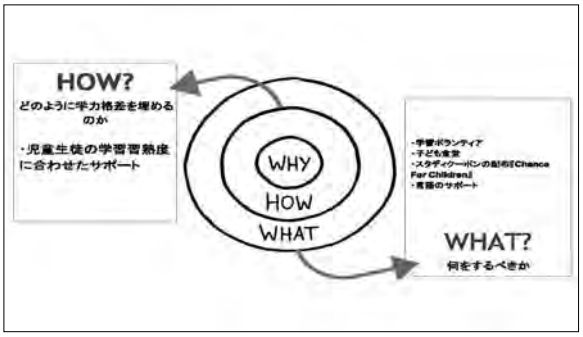

WHY？
・誰もが自分の人生の主人公になれるように
WHAT？
・地域や学校外、家庭外での交流
WHY
HOW
WHAT
HOW？
・自然体験への積極的な参加
・新しいコミュニティへ身を投じる
自然体験ツアー

学びを活かす方法
WHY
HOW
WHAT
・就職活動
・自己分析
・判断材料


Appendix

日本人生徒と外国人児童生徒
の学力格差


WHY?
外国人児童生徒が
日本人児童生徒との学力格差
を埋める意義
・スタート地点の学力差
→ 基礎環境から切り離すため
・キャリア形成
・選択肢を増やす
→ 日本で就職する道を作るため
・知識の上塗りをする
WHY
HOW
WHAT


HOW?
どのように学力格差を埋める
のか
・児童生徒の学習習熟度
に合わせたサポート
WHY
HOW
WHAT
・学習ボランティア
・子ども食堂
・スタディクーポンの配布『Chance
For Children』
・言語のサポート
WHAT?
何をするべきか

アクションプラン
外国人児童生徒への
スタディクーポンの
配布

WHAT? - 実際の活動
学生ボランティア活動
子ども食堂
Chance for Children

参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 分科会講師の粕谷先生は立ち止まり、自分の興味関心を分析し、興味関心を実現するためにやるべきことを考えたという体験談を話して下さった。そして、仕事をすることの楽しさを教えて下さった。そのおかげで、自己分析と楽しむ姿勢の大切さを学ぶことができた。自己分析の方法についても、ゴールデンサークルという自己分析の方法を学ぶことができた。ゴールデンサークルは自己分析の他にも自分の考えの整理や判断材料とすることもできる。ゴールデンサークルを用いて自己分析をし、立ち止まることを大切にしていきたいと考えた。そして物ごとをできるだめポジティブにとらえ色々なことを楽しんで行きたい。
- まずゴールデンサークルを活用して自己分析、自分を知ることから始めていきたいと思います。今回の学びを自分の糧とするだけでなく、周りの友人とも共有しより良いキャリアを築いていきたいと思います。
- 自分の目指すキャリアの立場に近い方の話聞くことができとても参考になり、自分の将来について改めて考えるきっかけになった。
- オンラインでの会話の進め方や議論のまとめ方を学ぶことができ、貴重な機会でした。参加するまでは、初めて出会う人たちとのグループ作業やプレゼン制作に不安を感じていましたが、グループで協力して作業を進め、様々な話題について詳細そして深く議論を進めることができ、無事最終発表を迎えることができました。スタッフの皆さんや先生方に感謝しています。ありがとうございました。
- 教育現場での課題について、民間企業がどのようにサポートできるか主体的に考えることができた。ビジネスについて学んだことで、数年度自分も何等かの形でビジネスに関わっていくことへのビジョンを明確にすることができた。
- ゴールデンサークルという考え方を知り、物ごとは、すべて WHY から考え、それを明確に出来てから、HOW→WHAT へと展開していくことの重要性を学ぶことができた。また、実際にプレゼンテーションを作るにあたって自分たちでゴールデンサークルを活用したことで理解が深まり、今後更に活かしていきたいと思った。
- 無形資産が重要。自分が他の人にはないどんな特性をもつことができているのかについて、ゴールデンサークルを用いて問い続け、モティベーショングラフによって過去の自分と向き合いながら自分の持つ価値観をしっかりと知ることが出来るようにしたいと思った。また、人との縁を大切にしたいと考えた。何かチャンスがあった時にすぐに対応できるように、日頃から興味を持ったものに積極的に行動し常にスキルアップを心掛けたい。
- アクションプランを考える上で沢山選択肢がある中からどのような目的を持って、何を用いてプランを考えるかを、様々な視点から考えることで、メリットデメリットの他、ビジネスには様々な人の関わりがあることを知ることができた。
- 企業との確実なマッチングを目指し、自分にとって良い環境で社会に貢献できる人材になれるよう WHY の繰り返しと、それを活かして HOW→WHAT へと発展させていきたい。

分科会Ｃ

違いを強みに変えるコミュニケーション

岩井　俊宗（いわい　としむね）
特定非営利活動法人とちぎユースサポーターズネットワーク
代表理事

略　歴：
1982 年生まれ。栃木県宇都宮市出身。2005 年宇都宮大学国際学部卒業後、ボランティアコーディネーターとして宇都宮市民活動サポートセンター入職。NPO・ボランティア支援、個別 SOS に従事。2008 年より若者の成長機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し、若者による社会づくりの加速を目的に、とちぎユースサポーターズネットワークを設立。2010 年 NPO 法人化。代表理事を務める。
その他、認定 NPO 法人宇都宮まちづくり市民工房理事、栃木県協働アドバイザー他、多数。

講義の概要

1.　仕事の内容・研究テーマ

若者の力を活かして、地域の課題解決・活性化を加速することを使命とし、若者の挑戦と新たな力・新たな変化を求める地域の現場をつなぎ、育むプログラム開発・コーディネート事業を実施。

【独自事業】実践型インターンシップ GENBA CHALLEGE(2012～)、ソーシャルグッドスタートアップキャンプ「iDEA→NEXT」(2012～)、ソーシャルビジネスセミナー(2014～)

【受託開発事業】宇都宮大学課題発見・解決型インターンシップ(2013～)、栃木県 UJI ターン促進事業「はじまりのローカルコンパス」(2015～)、宇都宮市起業家精神養成講座「起業の実際と理論」(2015～)、那須烏山市ローカルベンチャー育成事業(2016～)、栃木県地域づくり担い手育成事業(2016～)、宇都宮大学　宇大未来塾(2017～)、コカ・コーラジャパンボトラーズ CSR 事業「ミライ×キャンバス」(2017～)、栃木県創業プロデューサー事業(2019～2021)、栃木県グリーンツーリズムネットワーク組織づくり事業(2020～)、那須烏山市民話デジタル配信(アニメーション制作)事業(2020～2021)、那須烏山市山あげ祭り新たな映像化事業(2021～2022)など街の新たな事業開発実施や触媒機能を担う。

創設から 12 年、関わってきた 20 代～30 代の若者は、37,515 人(活動時間 138,024 時間)を越える。その内、自らの意志と力で課題に立ち向かう起業した若者が約 60 組輩出。また組織の次の一手を創り出す現場に若者が長期間参画する実践型インターンシップや行政施策のプログラム開発など、多様な組織に若者の力を取り入れた変化を提案・実施するプログラム開発と運営、それらを通じて化学反応として新たな価値を創出する「触媒」の機能を持ったコーディネート力は、他県からの講演依頼や『ソトコト』などの全国紙にも取り上げられることを踏まえ、高いものと自負している。これらの実績から、変化を創り出していくコーディネート事業に加え、若者と民間企業、また行政(国、県、市)、大学、をパートナーとし協働による事業推進をしていることが独自性であると捉えている。

〈受賞歴〉　中小企業庁表彰　創業機運醸成賞　（2018.2.9、全国 22 団体）、
下野新聞社「とちぎ次世代の力大賞」奨励賞(2018.5)
栃木県経済同友会「社会貢献活動賞」(2020 年)
北村地方創生担当大臣視察　等

2. キャリアパス

1982 年宇都宮生まれ。4 人兄弟(長男)、7 人家族。幼少期は、ガキ大将。森に基地を創って遊ぶ。小学生：サッカーに打ち込む。夢は、冒険家と医者。中学生：バスケットボール(部長)に打ち込む。生徒会長→リーダー的役割を主体的に捉えるようになる。

高校生：JRC 部。2 年の夏、赤十字派遣でネパールへ。3 週間現地で井戸掘り、学校見学、献血事業視察。→将来、“途上国で働く”ことを描き、現地の日本人の駐在員にどうしたらその仕事に就けるか手紙を書く。そのお返事に“大学生で世界の勉強してください。英語プラスもう 1 ヶ国語”→大学に行く意味を見つける。→地元に、それができる大学→宇都宮大学国際学部へ進学。

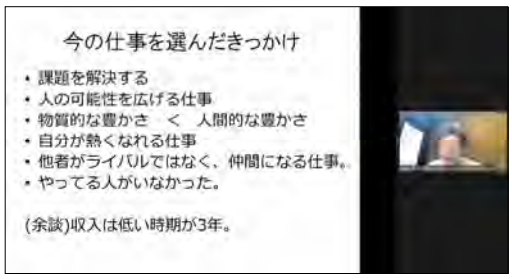
大学生（宇大国際学部、友松研究室）：NGO マネジメント、住民主導の開発を専攻。2 年生くらいから国内問題にも目を向ける。特に NGO・NPO などの市民による社会課題解決に可能性を感じるものの、職業として成り立っていない現状→“NPO・NGO で飯を食うモデルになる”と自分に旗を立てる。

2005 年大学卒業後、ボランティアコーディネーターとして、NPO・ボランティアを支援する宇都宮市民活動サポートセンター入職。制度では支え切れない SOS(年間１００件程度の相談)に、ボランティアチームを組み対応する。その中で大学生等若者が関われると突破できる数多い体験から、2008 年若者の成長の機会創出と持続的に取り組む人材を輩出し若者による社会づくりの促進を目的にした事業を行うとちぎユースサポーターズネットワークを設立。2010 年　NPO 法人化。現在代表理事を務める。

現在 40 歳、妻(国際学部同級生)13 歳の中一息子、7 歳の小 1 娘と 4 人暮らし。学生時代の趣味は、国内外を旅すること(屋久島、ママチャリで富士山・成田空港・レインボーブリッジ、アメリカ、韓国、マレーシア、シンガポール、ベトナム)。

3. 分科会の内容

- 違いを強みにしていくためのコミュニケーションとして、質問力、言葉の意図を読み解く力、建設的に意見を積み上げていく思考、相手の HAPPY を提案していく力を養う。
- 演習(ワークショップ)を通じて、実践的にコミュニケーションを重ね、自身のやりたいことの実現に向けて仲間の力を借りていくこと、またそれが相手に対しても HAPPY に感じられる提案を創り出していく。
- コミュニケーションとは何か。
- 人が喜びに感じるメカニズム、マズローの 5 つの欲求、ジョハリの窓など。
- アイデアを形にしていくプロセスと提案書の作り方



4. キーワードリスト

- コーディネート
- ダイバーシティ
- 価値創造

5. 参考資料

特になし。

6. 予習用リーディング課題

- 自身の自己紹介をご用意ください(氏名、所属、大学で学んでいること、分科会を選んだ理由、将来の展望、今回持ち帰りたいこと)

参加者による全体発表

違いを強みに変える
コミュニケーション

国際キャリア教育　分科会C
岩井俊宗講師

小熊華　小濱瑠七　小林可奈　小向ふうか
酒巻大雅　高橋風子　玉木怜馬　弦巻百華
鮫川光　古澤菜摘　矢村実咲

ちがいってどんなもの？
ちがいって怖いもの？

違いを強みに変えるコミュニケーションとは

お互いがお互いの未来に
向かって活動する

違いを楽しみ受け入れる
→新しい時代に新しい社会をともに創る

「ちがい」の例
性的マイノリティ、女子の制服でズボンを履く
⇩
ある大多数の中で自分だけが違うと違和感

・ちがいって怖くないの？
・どうやったらちがいを受け入れられる？

漢字のアクティビティ

◎口に二角たして漢字を作ってください
→田、兄、右、旦、甲、申、号、古、叶、占、．．．などの意見が出た

５個考えられた人、１０個以上考えられた人がいた
自分が思いつかなかった漢字を思いつく人がいた
⊟しかし、この違いを誰一人、怖がったり怖しがる人はいなかった

それはなぜか？？

⊟なぜなら、みんなが共通の目的を持っていたから
学んだこと
→共通の目的があるため違う答えを持っていても怖くない

質問のアクティビティ

◎パートナーに15分間質問してください
⇒質問を続けてもお互い不快に感じなかった

共感・共有することで相手の違いは理解し納得できるものになる
→違いを強みに！
→適切な距離感や声量を意識した正しいコミュニケーション

適切なコミュニケーションに必要なこと

①距離感(自己開示)
②声の調子
③Yes/Noで答えられる簡単な質問(クローズドクエスチョン)
④What/Howで答えるやや難しい質問(オープンクエスチョン)

質問者は場の空気を作る
⇩
実演！！！

質問するということ

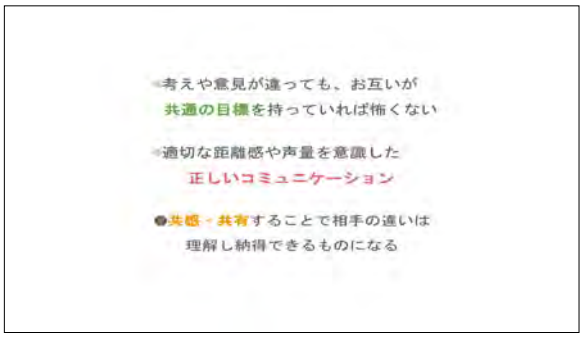
適切なコミュニケーションをとる
⊟議論して共に未来の景色を描くために必要なこと

◎自己開示＋相手への関心のサイン。相手からの本音を引き出す方法
→本音受け入れることで信頼を得る
→より深い議論ができる

まとめ

違いを強みに変えるコミュニケーションとは

正しいコミュニケーションによって共通の目標を持つことで、違いを受け入れ、お互いがお互いの未来に向いて協働するために必要なもの



参加者のレポートより

（コメントは原文のまま記載しています。）

■　今回一人一人提案書を書き共有したことで、「違いを強みに変えるコミュニ―ケーション」を深く実感できたと思う。

■　分科会では、コミュニケーションをテーマに違いが生じた時の思考等について学んだ。分科会前は、「違いを強みに変えるコミュニケーション」がどうキャリアと関わってくるのか正直理解していなかったが，「同じ目標、目的を持って将来を見る」ことや「理想と現実のギャップを見る」ことなど、実際に講義を受けてキャリアとの関連を見出すことができた。

■　分科会のテーマについて深く考え、行動に移せた３日間だった。アクティビティの中で実践して質問力をつけたことで、より深い学びになった。また、そこから強みについて考えることができた。

■　今回自分が設定したセミナーでの達成目標は、興味のある国際協力の分野と分科会のテーマである「違いを強みに変えるコミュニケーション」を結び付けて考えられるようにするというものでした。国際協力において海外の人々との関わりの中で多くの違いを感じることになると思います。この時に感じた違いを、コミュニケーションを通じて相手を深く知るきっかけにして、「強み」に変えていきたいです。

■　「違い」を強みに変えるコミュニケーションを学んだ。コミュニケーションのポイントはもちろん、「違い」を排除するのではなく受け入れるという姿勢はお互い創りたい未来のために必要な姿勢だと学んだ。また、地域や人々のために、世の中にある課題を考えどのように取り組んでいければよいのかについても学んだ。これまでは課題を洗い出すことばかり考えていたが、理想を描きそこにあるギャップに焦点をおくことは、課題を解決する上で、目指す未来ややるべきことを想像しやすくすることから良い方法だと思った。

■　３日間のセミナーを通して、本当に貴重で意味のある時間を過ごすことができたと感じる。その中で、将来の目標が変わったというよりビジョンが広がったと感じている。もともと公務員になりたいという目標は抱いていたが、何故なりたいのか、何をしたいのかという点ではまだ不明瞭な部分があった。しかし３日間を通して有益な情報を得ることができ、夢に対する考え方、それ以外の考え方など自分なりにまとめることができたと思う。特に岩井講師がおっしゃっていた「わからないに飛び込む」という言葉はとても印象に残っている。自分が知見を広げていくには正にぴったりな言葉であると感じた。大学内外のイベントに積極的に参加することで将来の道筋を広げて行きたい。

■　今まで課題解決と漠然と言ってもその方法を知らないでいたが、分科会で、問題解決には現状を把握し理想形に向けて活動すべきだと学んだ。まずは、地元や宇都宮の地域活動に参加し町の人々の声を聴き、地域の抱える問題が何かネットではなく実際に足を運んで調べるべきだと思った。岩井先生が活動例を教えて下さったので、興味のあるものに積極的に参加して今のうちから経験を積んでいきたい。

■　これまで考えてきたキャリアは「人に必要とされたい」という目標であったが、セミナーを通してそれが自己中心的なものであることに気づかされた。他人の役に立つためには、他人と関わることは必須でその方法についてはまだ考える必要がある。同時に、どの地域のどういった人の役に立つべきかということ模索中で課題として残る。

■　「適切なコミュニケーションは何か」と「それをどのように未来で活用するか」を学ぶことができた。(中略)今回、自己開示や相手の本音を引き出すことなど心理学に基づいた知識を得ることができ、その上、グループディスカッションや質問の場などすぐに実践できる場があったので、自分自身にとってはこれからのコミュニケーションの指針となる良い機会であった。

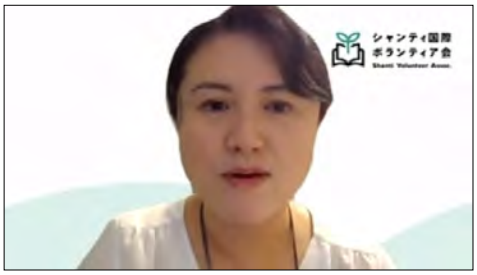
分科会Ｄ

「自分らしい」キャリアを作っていく

菊池　礼乃（きくち　あやの）
公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
事業サポート課　課長

略　歴：
大学卒業後、一般企業、イギリス留学（修士号取得）、NGO や国際機関でのインターンを経て、2011 年にシャンティに入職。ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所のプロジェクトマネージャーとして 7 年間難民支援に携わる。帰国後、2018 年 10 月より事業サポート課に配属、2019 年 7 月より現職。

講義の概要



1.　仕事の内容

日本の国際協力 NGO で働いてから 10 年になります。最初の 7 年間は､タイとミャンマーの国境にある難民キャンプで教育支援事業に従事し（うち 2 年間はインターン）、図書館事業の計画、実施、モニタリング・評価などの事業運営、カウンターパートや関係団体との事業調整、研修交流受け入れ、現地職員の人材育成などに携わりました。その後 3 年間は、東京事務所から海外事務所をサポートする立場で、アジア 6 か国での教育事業の管理、資金調達、アドボカシーネットワークへの参画、研修交流の調整などを担っています。

これまで子どもの教育、読書推進、難民支援に関心を持ち、NGO の事業を通して、現地住民、現地行政、海外事務所職員、日本の支援者（企業、個人）と協働しながら、貧困や災害、紛争下にいる子どもたちが安心して学べる環境や機会を作ってきました。現場での課題の洗い出し、その解決に向けた事業の形成、関係者と調整した上での事業実施､成果やインパクトを確認するための評価などの事業運営の過程の中で、様々な壁にぶつかることもありますが、それを仲間と共に試行錯誤しながら乗り越えたときの達成感や、受益者から喜びの声や子どもたちが楽しく学ぶ姿を見聞きすることの嬉しさは、NGO 職員として働くことの大きな励みになっています。

2.　キャリアパス

父が日本人、母が韓国人の家庭に生まれ、幼い頃から海外や自分のルーツに関心を持っていたものの、高校生までは海外との接点があまりありませんでした。大学生になってはじめて国際協力の道を知り、日本と韓国の若者がアジアで識字教育支援に携わることを通して日韓の歴史の壁を乗り越えることをミッションとした NGO でボランティア活動をはじめ、自分がやりたいことはこれだと思い、将来的に国際協力の道で働きたいと思うようになりました。その後、周りの助言もあり、一般企業で 3 年間働きましたが、やはり国際協力の道に進みたいと思い、国際機関や NGO でのインターン、海外の大学院への留学を経験しました。その中でも、タイとミャンマーの国境の現地 NGO でインターンをしてきた時に、自身が難民でもある同僚から、難民や移民の若者が抱えるアイデンティティの課題や教育への強い思いを聞く中で、彼女の問題は自分の問題だと感じ、それから難民・移民支援、教育支援に携わりたいと思うようになったことが今でも自身の関心の中心にあります。その後、シャンティ国際ボランティア会のタイ・ミャンマー国境の難

民キャンプでの図書館事業に関わるインターンに応募し、2011 年 3 月に入職しました。それから 7 年間、20 代後半～30 代半ばにかけて、インターン、調整員、プロジェクトマネージャーとして現地の図書館事業に携わり、さらに、現地で結婚、出産をしました。子どもが 2 歳になる頃に、これまでとは異なる立場で国際協力に携わりたい、子どものアイデンティティ形成や教育の場を日本に移したいと思い、帰国しました。帰国後は、東京事務所からシャンティの海外事務所の事業管理や資金調達などに関わり、人道支援、開発支援の中での教育事業をサポートしています。

3. 分科会の内容

国際協力への関わり方が多様である今、この道でキャリアを作っていく第一歩は、自分はどんな課題を解決したいのか、どのような立場で関わりたいのか、自分の強みは何か、自分に向き合って考えることだと思います。国際協力 NGO を中心に、国際協力に関わるアクターやその役割、変化する国際協力業界の今を紹介しながら、社会課題の解決に向けて、自分自身がどのように関わっていくのか、ワークやディスカッションを通して一緒に考えていきたいと思います。

4. キーワードリスト

- 国際協力
- NGO
- SDGs

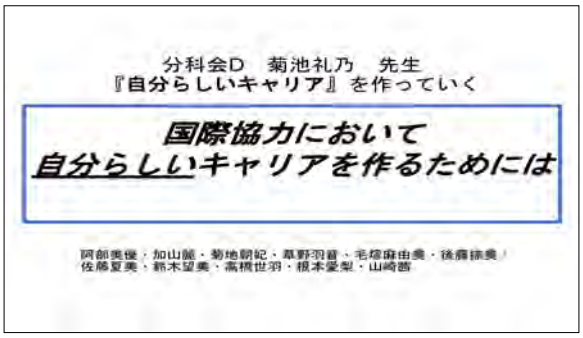
5. 参考資料等

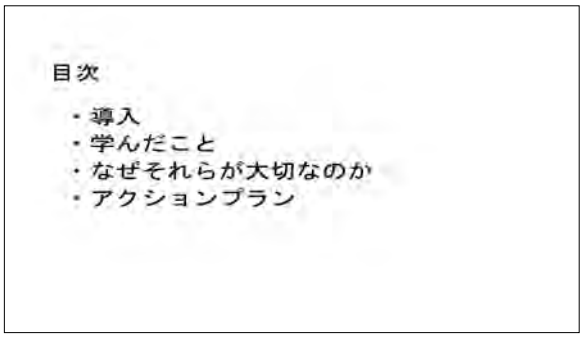
- ディビッド・ヒューム著、佐藤寛監訳『貧しい人を助ける理由―遠くのあの子とあなたのつながり』日本評論社、2017 年
- 紀谷昌彦・山形辰史『私たちが国際協力する理由 人道と国益の向こう側』日本評論社、2019 年
- 小松太郎編著『国際緊急人道支援のキャリアと仕事－人の命と生活を守るために―グローバルキャリアのすすめ』国際開発ジャーナル社、2020 年
- 松本悟・佐藤仁『国際協力と創造力 イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社、2021 年
- 国際協力 NGO センター（JANIC）『NGO データブック 2021 数字で見る日本の NGO』外務省国際協力局民間援助連携室、2022 年　https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/files/100312453.pdf
- 平成 30 年度 外務省 NGO 研究会『2030 年を見据えた日本の国際協力 NGO の役割－3 つのあるべき姿と 10 のアクションプラン－』https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/files/000477259.pdf

6. 事前予習用リーディング課題

- 5～10 年後の自分が、どこで、どういう立場で、何をしていたいのかを考えておいてください。

参加者による全体発表





国際協力の現状

国際協力は多様化している！
→分野の多様化
→アクターの多様化
→関わり方の多様化

自分らしいキャリアとは？

学んだこと

なぜ大切なのか

1. 出会い

・出会いそのものが大切

・自分一人の思考だと考えが限られてしまうため、人との出会いが多いインターンシップやボランティアに参加することで視野を広げることが大切

・目を背けずに現地で本当に必要な支援を知ることができる

なぜ大切なのか

2. 価値観・アイデンティティ

・多様化する国際協力のあり方において、自分の価値観が判断基準になる。

・自分がどのような分野で？ どのようなレベルで？国際協力として携わる時にどこで妥協するか考えることで柔軟に対応することができる。

なぜ大切なのか

3. 情報収集・知識・語学力

・様々な課題の改善・解決に向けて活動する上で何をすべきか判断する際に、判断材料として情報収集や知識が必要となるため。
・地球規模の課題や文化の多様性を知るため。
・情報収集によって、支援を必要としている人を探すため。

・語学力は、コミュニケーションをとる際に重要であるため。

提言・アクションプラン　1（出会い）

ボランティアやインターンに積極的に参加する
様々な体験や経験には、人との縁が必要不可欠

国際協力と一口に言っても様々な関わり方がある
あまり関心がない国際協力の分野、方法にも関わってみる

おすすめサイト：**Activo**→海外でのボランティア、リモートでのボランティア
JANIC、JICA Partner→より本格的にNGOなどに関わりたい人に

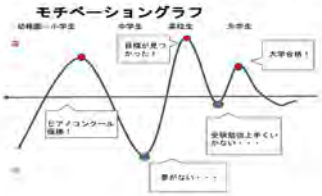
提言・アクションプラン　2（出会い）

人の話に耳を傾ける意識を持つ

・人との出会いから知識、経験を得るには聞く力が必要。
・SNSの普及により、直接人と対話する機会が減った現在、しっかり耳を傾ける意識を持つことが大切。
・日常生活から、様々な人の話をしっかり聞き、受け止める訓練をする。

提言・アクションプラン　3（価値観）

モチベーショングラフ



どんな時が高い？

どんな時に低い？

自分の価値観が見えてくる

提言・アクションプラン　4（情報収集・知識・語学力）

国際社会に関心を持ち、地球規模の諸問題を、自分事として考える習慣をつける。

タイ・ミャンマー国境の難民キャンプ

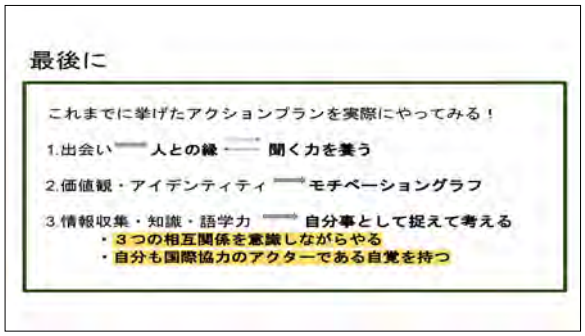
モルドバのウクライナ避難民の生活

写真提供：シャンティ国際ボランティア会　©Yoshifumi Kawabata

自分らしさとは

出会い × 価値観 アイデンティティ × 情報収集 知識 語学力

自分が納得する道に進んでいくこと



参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

■ 分科会では、「国際協力をする上で自分らしいキャリアを作るためには」について取り上げた。価値観、人との出会い(縁)、情報収集・知識・語学力の三要素がキャリア形成で重要な要素であると見出し、それぞれアクションプランを挙げた。「国際協力する上で」必要とされるアクションプランであるが、これは国際協力を前提としなくとも、多くの場面で役立つと感じた。

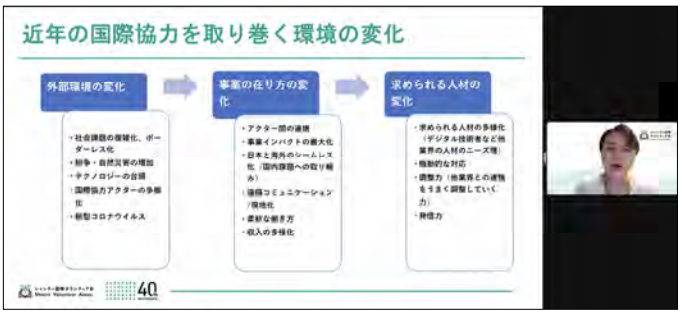
■ 今回分科会 D では「価値観・アイデンティティ」「出会い」「情報収集・知識・語学力」の三要素が重要であると考え、それぞれのアクションプランを提示した。どれも難しいことではないため、取り組みやすい。自分はまず「人の話に耳を傾けること」そして「情報収集の際、自分事として支援する側として考える習慣をつける」ことから実践していきたい。その過程で再び再び課題が出てくるであろう。その課題から目を背けるのではなく、向き合っていくことがキャリア形成において重要であると思う。挑戦、課題解決、挑戦、課題解決、このサイクルが自分のキャリアを形成していくと考える。

■ 分科会では、出会いや価値観を大切にして国際協力のアクターとしての自覚を持って何ができるかを考え続けることが大切という話し合いを行った。私は「出会い」という言葉にぴんときた。私は人と出会うことが好きで、出会いを大切にしている。国際協力のアクターとして携わるときに人との出会いを意識したいと考えた。国際協力の在り方も多様化しておりアプローチの仕方も様々だが、今回のセミナーを通して少しイメージが固まった。ビジネスとして国際協力に携わり企業で補えない部分をＮＧＯなどの他のアクターと連携させた事業を展開したい。そこでの出会い。そして実際に現地に趣更なる出会い。現地の人々の声を聞いて何が出来るか，出会いを大切にして考えたい。

■ 国際協力に自分も関わりたいという気持ちはあったが、NGO や NPO などのように専門的に携わる方法以外をあまり知らなかったが、分科会で企業や個人として関わる様々な方法があることを知ることができ、キャリアを考えつつ、国際協力の分野に自分自身どうかかわっていくかを考えることができた。

■ 分科会では国際協力について学んだが、今まで自分が持っていたＮＧＯ等の国際協力に関して持っていた興味を更に深めることができた。特に印象に残っていることは、国際協力の多様化だ。これまで国際協力に関わるにはＮＧＯ等に入らなければならないと思っていたが企業や大学、個人レベルでも関わることができると知り、選択の幅を広げることができた。また、先生のお話から国際協力は生半可な気持ちではいけないということが分かり、自分のこれからの経験に活かしていきたいと思う。

■ まずは行動しないと何も始まらない。失敗を恐れず自分のキャリアを形成していくためにチャレンジして行きたいと思う。国際協力の中でも役割が様々であり、仕事として、個人としての関わり方があることを知った。国際社会も時代共に変化しているため、1 つの分野に留まるのも選択肢だが、柔軟に対応していけるような能力も必要であると知った。そのために、今からボランティアやインターンの活動に積極的に参加して行こうと思う。



分科会Ｅ

気づこう！無意識の思い込みが生活や職場に与える影響

川面　充子（かわづら　みつこ）
宇都宮大学　ダイバーシティ研究環境推進本部
特任助教

略　歴：
三重県出身、法政大学院政策創造研究科にて雇用・人材育成の政策学を学び、女性管理職登用について研究。栃木県男女共同参画センターで広報・調査研究事業に携わり、その後地方議員 2 期務め、2013 年より宇都宮大学男女共同参画推進室に勤務。yoga でワーク・ライフ・ インテグレーションを実現してます。

講義の概要

1.　仕事の内容・研究のテーマ

宇都宮大学は、平成 24 年に男女共同参画推進室を設置して以来、学内の男女共同参画意識の醸成と共に、女性研究者の仕事とライフイベントの両立支援に取り組んでいます。平成 30 年には、多様性向上の観点からも女性研究者が活躍でき、そして、誰もが個性と能力を発揮できるように「ダイバーシティ研究環境推進本部」を立ち上げ、私はそこに所属しています。http://diversity.utsunomiya-u.ac.jp/image/image01.png
そこでは、教職員のワークライフバランス推進のための環境整備はもちろん、研究者の子育て・介護と研究の両立や女性研究者のリーダー育成、理系分野における女性活躍推進、次世代理系女子育成など様々な活動をしています。また、基盤教育科目「ダイバーシティ社会の中の男女共同参画」授業を学問と実践で教えています。「頼まれ事は試され事」をモットーに、お声がかかればどこにでも出かけ講演・社会活動を行っています。女性労働・育成をテーマに研究をしています。

2.　キャリアパス

私の両親は共働きでした。当時両親の年代（昭和 4 年と 8 年生まれ）が共働きをしている家庭はめずらしく、私はお母さんが日中家にいる家庭がとても羨ましかったのを覚えています。女子校育ちの共働き世帯ということもあり、社会に出るまで男女の差異など感じたことはありませんでした。

転機１：就職（20 代～）　現実社会を知る

1986 年男女雇用機会均等法が施行され、まもなく三菱化学㈱に就職しましたが、女性はお茶汲みで始まり茶碗洗いで終わる、25 歳で寿退社する(クリスマスケーキ)など不思議なルールが出来上がっていました。ここでは、お茶汲みと茶碗洗いを廃止し、結婚して子どもができるまで働き続けました。

転機２：夫の転勤（20 代後半～）　キャリアブレイク★1

当時、夫の転勤に妻はついていくものだ、となんの疑問も持たず栃木県にやってきました。長時間労働は当たり前、よって、育児はワンオペです。働くキャリアと縁遠くなった私は、社会活動に参加し、その後とちぎ男女共同参画センターで広報・調査研究事業担当で働き始めました。キャリアと聞くと仕事上での経歴や経験を浮かべると思いますが、広く定義をするとキャリア＝生き方です。私は、このキャリアブレイク中、たくさんの社会活動に参画したことが、次のステップにつながったと思います。

転機３：夫の海外単身赴任（40 代前半～）　チャレンジ
夫が海外単身赴任となったのをいい事に、地方議員を 2 期(8 年)務めました。ここでは、政治分野に女性参画が少ない理由が身をもって実感することができたと同時に、物事を決定する場所には多様な視点が必要であることを痛感しました。その後数年は、議員と本学コーディネーター「二足の草鞋」で仕事をし、常に机上の空論にならないよう今までの経験を糧に大学院で学び直しをし、現在に至っております。
★１キャリアの中断を肯定的に捉える「キャリアブレイク」という考え方

3.　分科会の内容

女性活躍、ジェンダーと聞くと、女性の問題と思われていた（る）ことこそが、今の日本の男女格差につながっていると考えます。性別に関係なく、みんなで一緒に考えていくことが必要です！
男女共同参画基本法第 2 条には、「男女共同参画社会とは、男女が社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、ともに責任を担うべき社会」と記されています。にもかかわらず、やりたいことに参画できないのはなぜ？　その理由の一つに無意識の思い込みが影響していると言われています。例えば、私は子どもを産んでからもバリバリ仕事をしたいのに、上司がさせてくれない。5 時半退社なのに誰も帰らない。これらのどこに無意識の思い込み・固定概念が潜んでいるのでしょうか？　その思い込みがどのような事柄に影響するのか？　どう対応していけばよいのか？　をみなさんで一緒に考えていきましょう。

4.　キーワードリスト

アンコンシャス・バイアス、ジェンダーギャップ指数（GGI）、固定概念、ジェンダーバイアス

5.　参考資料等

- 野村浩子・川村昌（2019）「組織リーダーの望ましさとジェンダーバイアスの関係－男女別、階層別のジェンダー・バイアスを探る―」
- ジェニファー・エバーハート「無意識のバイアス　人はなぜ人種差別をするのか」明石書店 2020
- 男女共同参画学協会連絡会　https://www.djrenrakukai.org/unconsciousbias/see_bias_block_bias/index.html

6．事前予習用リーディング課題

- 男女共同参画局　令和 4 年度男女共同参画白書
  https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r04/zentai/index.html
- 男女共同参画局　令和 3 年度　性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究　https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/seibetsu_r03.html

参加者による全体発表

ある日、父親とその息子が乗った車が交通事故に遭いました。
父親は即死、助手席の息子は意識不明の重体になり、すぐに救急車で病院に運ばれました。
病院に運ばれてきた子どもを見て、院長は「私の息子！」と嘆き悲しみました。

一体どういうことでしょうか？

解答

・答えは……

⇒院長は子供の 母親

ここで「病院の院長＝男性」と思い混乱した方はアンコンシャスバイアス（無意識の思い込み）をしている可能性がある。

アンコンシャスバイアスの特徴
→誰もが潜在的に持っている。
無意識であるため、自分で気づけない。
無意識に相手を傷つけている場合がある。

なぜ今、日本で「アンコンシャスバイアス」？

男性らしさスコア
→Masculinity(MAS)
男らしさを求める強さ

順位：2位
(78ヶ国・地域中)

出典
：https://geertinfstede.com/research-and-vsm/dimension-data-matrix/
(2015) から
川面充子先生が作成

日常に潜むアンコンシャスバイアス

①家庭

②学校

③仕事・就職

家庭

事例1:CM（メディア）によるアンコンシャスバイアスの形成

事例2:女性は家庭に入るもの。だから、大学行かなくていい？
⇒進路が狭まる。キャリアへの影響。

問題点　閉鎖空間であり一番関わりのあることが多い家庭だからこそ、影響が外には見えにくい＆干渉が難しい。

《アクションプラン》

社会を形成している世論はメディアの影響を受けやすいため、鵜呑みにしない。調べる際にも自分の考えを補強するものでなく、様々な意見を比べながら調べる。

教育現場で「差別」「多様性」を考える授業等を行う。

絵本・遊べる道具（すごろく、カルタ等）を作り、子どもが教具として学べるものを寄付する。

学校

事例1：吹奏楽部の仮入部にて、大きい楽器を男子、小さい楽器を女子が勧められる

事例2：「帰国子女だから英語話せるでしょ」

問題点　個人の意志ではなく、男女という性別基準で振り分けられている
勝手な思い込み、期待
同年代の仲間と多くの時間を共有する学校だからこそ、そこでの影響が大きい

《アクションプラン》

事実か推測か、言葉を発する前に一度考える

仕事・就職

【健常者の就職活動について】

事例1：高学歴の人は内定が得やすい

事例2：障がい者や、妊婦などの属性によって、仕事の幅が狭められている

問題点　その人の能力を見ていない
上下関係がはっきりしており、新人は声を上げにくい

《アクションプラン》

その人自身の能力をみる。学歴だけで判断しない。公平なテストを実施する。ブラインド採用など

各個人の「やりたいこと」を重視して仕事の自己決定権を保証する。障がい者雇用に関する法律をもっと整える。

アクションプランのまとめ

①家庭　事例：CM「わたし作る人、ぼく食べる人」、家族の考え方
→**鵜呑みにしない、楽しみながら学べる教材(絵本,すごろく,かるた)**

②学校　事例：男子→大きい,女子→小さい、帰国子女→外国語話せる
→**セルフチェック「事実？推測？」**

③仕事・就職　事例：学歴・障がい者・妊婦→能力の決めつけ
→**ブラインド採用、仕事の自己決定権を保証する仕組み**

誰もが持っているアンコンシャスバイアスで決めつけずに
個性の尊重、「自分らしく」生きることができるように！

クイズ

あなたは、満員のエレベーターに乗っています。
扉が閉まる直前に、もう一人女性が乗ってきました。すると、重量オーバーのブザーが鳴り響きました。
こういう時は、最後に乗った人が降りるのがマナーですが、その女性はブザーがなり続いているにもかかわらず、全く降りようとしませんでした。
あなたはこの女性に対し、どのように感じますか？

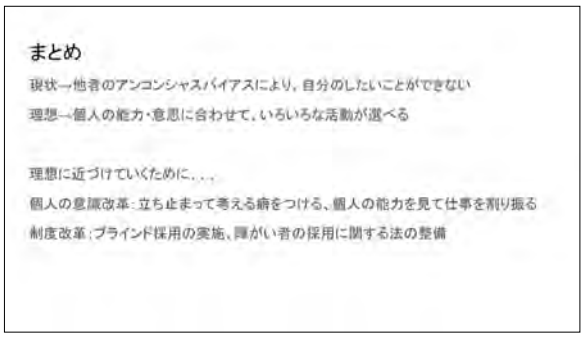
答え

この女性は耳が聞こえない人だった。

最後に乗った人がおりるのがマナー＝女性は自分勝手な人だ

もしかしたら、、、　耳が聞こえないのかも？
ブザーがなぜなるのか知らないのかも？

一度頭に浮かんだ考えだけで判断して決めつけてしまうのではなく、
他の可能性を考えること、考え続けることが重要



参加者のレポートより

（コメントは原文のまま記載しています。）

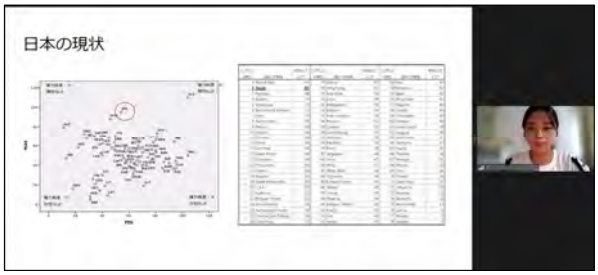
■ 分科会出は無意識の思い込みについて学んだ。最も共感したのは、妊婦さんに「身体のために仕事を休んで」と言うことがアンコンシャスバイアスだということだ。一見思いやりに見える言動が、もしその妊婦さんが仕事をしたかったらその方の可能性を狭めることにも成り兼ねない。私はこのことに気づくことができなかということは無意識で誰かを傷つけている可能性があるということだ。普段から言動の前に一度考えてはいるが、もっと慎重になるべきだと考えた。また見た目ではなく実際の関わりの中から相手を知ることが重要であり、心に留めて行動しようと思う。

■ アンコンシャスバイアスは誰もが持っており、自他のキャリアの妨げの可能性となることを分科会で学んだ。さらに、リーダーを担当したことでどうしたらメンバーが意見を言いやすいか、仕事を振り分けることの重要性を学んだ。

■ アンコンシャスバイアスは無意識のうちに形成され、その存在に気づきにくいこと、そしてそれを理由に無意識に周りの人を傷つけているかもしれないことを学んだ。アンコンシャスバイアスのせいで自分や他人のキャリア形成に悪影響が出る可能性についても学んだ。実際に分科会の中で、アンコンシャスバイアスをしているかどうかのクイズをしたのだが、自分自身もアンコンシャスバイアスをしていることが分かり、身近な問題であるという気づきを得ることができた。

■ 私の将来の夢はジャーナリストになることである。国際キャリア教育を通して、アンコンシャスバイアスは無意識のうちに形成されていくもので、その一因にメディアが関わっていることが分かった。メディアは人々の生活と密接に関わっており、メディアが伝える情報は、様々な場面で影響力がある。だからこそ、ジャーナリストとして将来メディアに関わるならば、人々のアンコンシャスバイアスを形成しないようなより多角的な視点から情報を伝えることが重要であると考えた。そのためには、自分自身のアンコンシャスバイアスを出来るだけ減らしていく必要があり、今から意識して生活する必要がある。当たり前を疑うこと、色々な人と意見交換すること、多くの情報に触れることを今から心がけてキャリア形成をしていきたい。

■ 分科会の内容には多くの新しい気づき、学びがありました。もっとも印象に残ったことは、「無意識の思い込み」はなくすべきものではなく、気づいて表に出す前に修正することが重要だということでした。アンコンシャスバイアスは誰もが持っている当然のもので良い悪いという意識とは関係のないものであるという新しい「気づき」がありました。



分科会Ｆ

「多文化」が「共生」する社会とは？

申　恵媛（しん　ひぇうぉん）

宇都宮大学国際学部　助教

略　歴：

韓国ソウル市生まれ、2001 年来日。熊本や東京で学生時代を過ごす。東京大学大学院総合文化研究科にて博士（学術）を取得。東京大学教養学部附属教養教育高度化機構・特任助教を経て、2022 年より現職。専門は社会学、特に観光地化など新しい局面を迎える地域社会における「多文化共生」の研究に取り組んでいる。

講義の概要

1.　仕事の内容・研究テーマ

宇都宮大学国際学部で教育や研究に取り組んでいます。専門は社会学（特に移民・エスニシティ研究、都市社会学）。現在の研究テーマは、エスニック・ビジネスの集積地域におけるローカルな社会関係の再編です。これまでは主に東京都新宿区の「新大久保」と呼ばれるエリアをフィールドに調査・研究を進めてきました。韓流や K-POP のブームで知られる観光地化は、地域の人々にどのような影響を与えたのか。それは従来の「多文化共生」という枠組みから、あるいはそれを越えてどのように捉えることができるのか。こうした問いを立てて研究してきました。現在は引き続き、エスニック・ビジネス経営者の実践や、グローバル化・モバイル化の進むなかでの地域社会の変容などに関心を向けています。

2.　キャリアパス

2001 年に韓国から来日し、日本国内でも東京→熊本→東京と移動しながら小中高大の学生時代を過ごしてきました。こうした確たる「地元」をもたない自分自身の経験が、（出自を問わず）移動する人たちがつくる社会への関心につながったのかもしれません。

大学では教養学部に進学し、社会学を軸に幅広い学問の世界に触れることができました。卒業論文では漠然と日本に暮らす移民をテーマにしたい、と考えていたところ、当時の指導教員の先生のすすめにより「新大久保」という地域と改めて出会います。その後、大学院の修士課程、博士課程と進みながら、研究の面白さと大変さの両方を噛み締めてきました。

2020 年からは東京大学特任助教として高大接続・リカレント教育のための公開講座運営を務めながら博士論文を書き進め、2022 年 4 月に宇都宮大学国際学部助教に着任しました。

3.　分科会の内容

近年、多様性の時代といわれ、さまざまな場面で多様性（ダイバーシティ）が奨励・推進されています。これから皆さんがどのようなキャリアを進むにせよ、何らかの形で多様性と向き合うことを余儀なくされるでしょう。しかし、考えてみると近年称揚される「多様性」は、魅力的ながらもどこかふわふわとして曖昧なように思えます。これほど注目される以前には、「多様性」として包摂すべきとされる人々は存在していなかったのでしょうか？また、最近の「多様性」「ダイバーシティ」は楽しくポジティブな印象を与えますが、多様であるとは差異が存在することを意味します。「多様性」に光を当てるとき、その裏面にもとより横たわってきた、差異にもとづく不平等や差別が覆い隠されてはいないでしょうか？

この分科会では、こうした「多様性の時代」を考えるひとつの手がかりとして、いつしか耳慣れた言葉になってきた「多文化共生」という言葉について改めて考えてみたいと思います。「多文化共生」自体、非常に広い射程をもつ言葉ですが、ここではひとまず「多文化」の内容を「外国人」ないし「移民」に由来するものに限定して考えてみましょう。この言葉は、どのような場面でどのように使用され、どのような広がりと課題をもってきたのでしょうか？日本社会における「多文化共生」を他の人に説明しようとするとき、どのように伝えれば良いのでしょうか？その方法を一緒に探っていきます。

4.　キーワードリスト

多文化共生、多様性（ダイバーシティ）、オールドカマー／ニューカマー

5.　参考資料等

■ ナディ，2019,『ふるさとって呼んでもいいですか：6 歳で「移民」になった私の物語』大月書店.

■ 深沢潮，2015→2019,『緑と赤』小学館.

1 冊目はエッセイ、2 冊目は小説。下記「予習用リーディング課題」の文献は、統計資料や政策等を通じて、または概念的に「多文化共生」を考えるための資料ですが、もう少し身近に感じるところから考えてみたい人におすすめの二冊です。これらを読むことで、下記課題文献の理解も深まるでしょう。どちらも可愛い表紙とは裏腹に考えさせられることが多く、気持ちの余裕があるときに読んでみてください。

6.　事前予習用リーディング課題

■ 永吉希久子，2020,『移民と日本社会：データで読み解く実態と将来像』中央公論新社.
　→このうち、「序章　移住という現象を見る」（pp. 3-22）

■ 髙谷幸，2021,「移民・多様性・民主主義：誰による、誰にとっての多文化共生か」岩渕功一編著『多様性との対話』青弓社，pp. 68-92.

■ 小内透，2007,「外国人集住地域の現実と共生の視点」『調査と社会理論』・研究報告書，23，pp. 1-13.
　（＊専門用語も多く難しく感じると思いますが、大まかな内容をつかんでみてください）

以上の文献をもとに、次の課題に取り組んでください。

(1) 以上 3 つの文献を読む前に、「多文化共生」という言葉に対するイメージや、関連して自分が知っていることを 300 字程度でまとめてみましょう。

(2) 以上 3 つの文献を読んだ後に、(1)でのイメージが変化した場合は、どのように変化したのかを 300 字程度でまとめてみましょう。イメージがあまり変わらなかった場合は、文献を通じて新しく知ったことを書き出してみてください。

(3) 以上 3 つの文献の内容で、よくわからなかった箇所や、話し合ってみたいと思った箇所があれば、メモしておいてください。

参加者による全体発表

アウトライン

1. 授業で学んだこと
   - 多文化共生の定義
   - システム共生（制度面）と生活共生（個人の生活面）
2. 問題提起（研究動機）
3. 大学の実状（問題点や成功例）
4. 私たちにできること（改善案と示唆）

多文化共生の定義

多文化共生の定義：コミュナルな多文化共生

⇒外国人とホスト住民が労働や生活の場で、互いに偏見なく、対等な立場で、日常的にコミュニケーションをとり、新たな共同関係ができている状態（小内,2007）

システム共生と生活共生（小内,2007）

テーマは

コミュナルな共生を目指す

問題提起（研究動機）

コミュナルな共生をどのように実現させるか

大学は本当に多文化共生ができているのか？？

→大学内で実現させる方法について

大学を例に取り、身近な多文化共生を考え地域社会や企業に還元、応用する事を目的とする。

個人生活面での共生（成功例）

- **交友関係の広がり**

例）授業で仲良くなれた

→留学生の友達が生活する上での手助けにも繋がる！！

- **異文化に対する関心の高まり**

国際交流のイベントやサークルに参加できる

例）国際寄

-ZOOMなどのオンラインでの実施が可能になりより気軽に参加可能

個人生活面での共生（問題点）

- **情報の欠如**（交流したいのに、。そんなんあったん知らんよおおおおお）
- **閉鎖的コミュニティの確立**（お互いに話したいけど、。）
- **学部間で国際交流への関心に大きな差**（でもOBじゃないはず！）
- **話す機会がない**（日本人同士でも）
- **コロナ**

制度としての共生（成功例）

- **チューター制度**　（留学生大学内外での生活のサポート！日本語教育も）
- **サークル活動における交流の場の設置**（多くはないけど）
- **食事や衣服など様々な面での選択肢が多様**
- **多言語での授業**
  - 留学生とのグループワークを通して相手の国への理解を深める
  - 相手との交流を通じてコミュナルな共生を目指せる！

  早稲田大学では「多言語コミュニケーション」という授業があります

制度としての共生（問題点）

- **交流する機会、場が少ない**

気軽に参加できない、。

- **情報網の欠落**

個人間の情報網だけでは不十分、。学校などの大きな規模で情報を回す必要！！

解決策（システム、生活）

- 情報の欠如

→**SNSやインターネット上で大規模に発信**（公式lineやTwitterの活用

- 閉鎖的コミュニティの確立、話す機会の作成

→**サークルの枠組みを超えて、参加しやすく！**

例）参加人数が多い、ミニゲーム、スポーツ、誰にでも聞かれているイベント、言語を指定してイベント、オンライン

実際に、サークルに参加してくれる留学生、そこから友人に発展したことも！！

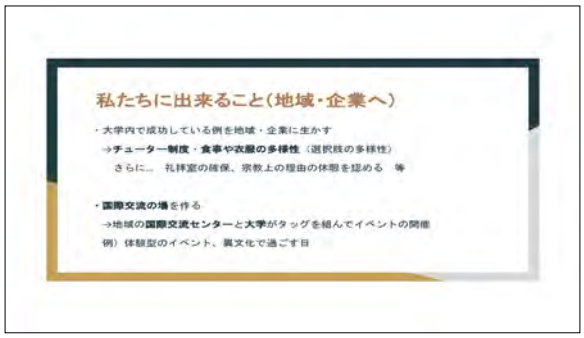
解決策（システム、生活）

- 日本人同士でも、外国人同士でも…新たに交流できる機会が少ない

→**交流をメインにした活動**の作成

- 大学内でも関心の違い、学部間で国際関心に大きな差があ

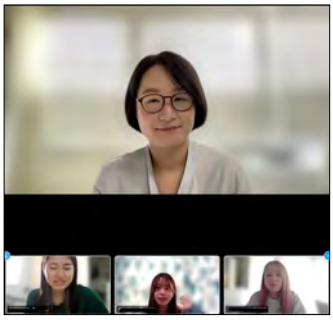
→関心を引くために、**経験者からのメッセージや経験談**



参加者のレポートより

（コメントは原文のまま記載しています。）

- 「多文化共生」というこの宇都宮大学に入学してから何度も何度も耳にしてきた言葉、曖昧なイメージで共通認識が不明瞭ではあったが、今回分科会を通して定義を自分達なりに定めて概念的なところまで掘り下げていったことが学びに繋がった。
- 分科会 F のメンバーは、多文化、他文化を受け入れようとしている人が集まっていたので、話し合いはスムーズにいくと考えていましたが、それぞれが多文化共生に関する考えがあってその一つ一つが間違いではなく、とても深い話し合いができました。結果、難しいテーマながらも、素敵な結果を作りだせたと思います。また、申先生のご助言のおかげで、自分たちの論点を見逃すことなく、最後までやり切ることができました。
- 私自身他の参加者と同じように、大学の授業を通して「多文化共生」の曖昧さや理想像のようなものに疑問を持ち、実現の難しさから批判的な考えを持っていた。しかし、セミナーで、リーディング課題、先生からの解説・説明、分科会の話合いから次のことを学んだ。まず、多文化共生を論ずる上で、観点に種類があることを学んだ。現実を分析する存在論、理想を考える理想論、その現実と理想の狭間で考える政策論があり、これらはあらゆる面からのアプローチが必要であることを表しているように感じた。そして、自分にも出来ることがあり、一人一人の意識の部分や小さな行動から始めることが出来ることを学んだ。自分自身、勉強をしていく中で、「多文化共生」の概念を知ることに必死になり、大きな重要性のようなものを見失っていたように感じた。この分野においては、深く考えることと広く見ることの両方が必要であると考えた。
- 今回アクションプランとして大学内の取り組みで出来ることを挙げた。グループ内で自分たちが出来ることについて考え、私自身は、まずは国際交流のイベントの場に参加することから始めたいと思う。そして、いずれは、企画運営する側に関わりたい。そこで経験を積むことで、自分自身のキャリアへの刺激となるようにしたい。



- 「多文化共生」がとても曖昧なものであり、実現可能なのか？とずっと疑問に感じていた部分があったが、自分自身の身の回りにある「大学」や「企業」などにおける多文化共生を捉えること通して、世界レベルに少しずつ実現していけるのではないかと考えた。
- コミュナルな多文化共生として大学が例にあげ、大学と留学生の関係性や学生との関係について学ぶことができた。学内には、留学生のチューター制度やサークルがあり、自分から行動しようと思えば出来る環境があることを知った。今後、積極的に関わってみようと思った。

5. パネルトーク

グローバル時代におけるキャリア形成について

司会：髙橋　若菜　　宇都宮大学　国際学部　教授

各パネリストが、体験を踏まえて、キャリア形成に関して「大切なキーワード」を 3 つ挙げ、その理由を説明した。その後、参加者によるパネリストへの質問、グループ別ディスカッション時間を設けられ、意見が発表された。

パネリスト：　黒崎　めぐみ　（くろさき　めぐみ） NHK 宇都宮放送局 局長	①　これまでの自分 ②　今の自分 ③　未来の自分

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 過去の経験を大切にし、現在の自分の立ち位置を考慮し、未来の失敗を恐れず計画を立てることの大切さを学んだ。
- やりたいことはその都度変わっていくもの。「リセット&リニューアル」の姿勢が大事。
- 社会も変化していく。どんどん変化していくことは悪いことではないと励まされた。学びや交流を通しての成長（変化）を楽しみたい。

パネリスト：　粕谷　直洋　（かすや　なおひろ） 株式会社 SKT　教育事業部　部長 CAN!P　代表	①　刺激 ②　社会貢献 ③　立ち止まる

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 仕事＝楽しくないやりたくないというイメージがあったが、先生のご経験を踏まえての「ワクワクを大切にしてほしい」というメッセージに衝撃を受けた。自分のワクワクを見つけていきたい。
- それぞれの分岐点で立ち止まる時間があったからこそ自分のしたいことに忠実でいられるのだと思った。自分軸をしっかりと持ち時には立ち止まることが大切だと感じた。
- どんな環境でも面白いことを考える「おもろレーダー」を大切にしたい。

パネリスト：　岩井　俊宗　（いわい　としむね） 特定非営利活動法人とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事	①　共創 ②　提案力 ③　信頼

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 「冒険家と医者」や「他者がライバルではなく仲間になる仕事」というという捉え方が素敵だと感じた。幼少期の経験や学生時代の些細な経験が人生を形作るのだなと感じた。
- 人々と関わる際に同じ目標に向かってより良い策を生み出す提案力が必要で、また、期待と信頼を高めていくことでチャンスが生まれるいうことを学んだ。物質的な豊かさだけでなく、人間的な豊かさを追い求める姿勢が重要だと感じた。
- 信頼や期待に応える人間性の豊かさが、可能性を広げていくということばを心に留めて行動していきたい。

パネリスト：　菊池　礼乃　(きくち　あやの) 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 事業サポート課　課長	①　自分事 ②　縁 ③　家族

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 衣食住だけではなくアイデンティティが保たれないと生きていけないという一言が印象的だった。国際協力の場においては、物質的な支援のイメージが強いが、単なる物質支援ではなくアイデンティティの保持といった視点が重要であると感じた。
- 「縁」－出会いを通して新たな視点や学びを得る重要性について学んだ。
- 「家族」－優先順位の変化を柔軟に受け入れる。自分のライフステージの変化でどうしても優先順位は変わってきてしまうが、抗うのではなく柔軟に受け入れていく姿勢が大切だという視点を得た。

パネリスト：　川面　充子　(かわづら　みつこ) 宇都宮大学ダイバーシティ研究環境推進本部 特任助教	①　性的役割分業 ②　地域活動 ③　アンコンシャスバイアス

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 自分に科した偏見がどれだけ自分のキャリアを狭めるかを考えた方が良いというメッセージに感銘を受けた。
- 自分の当たり前がおかしいと気づくのは難しいが，意識的に自分に問いかけ気づきを得ていきたい。
- 「頼まれごとは試されごと」チャンスが来たときにそれを掴み取る力。
- アンコンシャスバイアスについては誰もが持ってしまっているものだと思うので、どのように対策していくべきか興味を持った。

パネリスト：　申　恵媛（しん　ひぇうぉん） 宇都宮大学国際学部 助教	①　多文化共生 ②　地域社会 ③　当事者と研究者

参加者のコメントより（コメントは原文のまま記載しています。）

- ご自身のルーツに纏わる経験談から、社会を構築する一人(当事者)でありながらそれを観察し分析する(研究者)というという姿勢が印象的だった。難しい内容ではあるが、今の時代だからこそ理解しておくべきものだと感じた。
- アイデンティティはその人が生きる社会そのものである。全世界を自分のふるさととして考えることで、根を張ることと翼を持つことを両立できる。いずれも、多文化共生について考える時に重要となる視点だと考えた。
- 自分を作るのは社会との関わりが基盤にあるというお話から自分が教員になった際には、そうした視点を持って子どもたちと関わっていきたいと改めて考えることができた。

参加者のレポートより（コメントは原文のまま記載しています。）

- 様々なお話を聞き、自分の興味関心が少し明確になったと思いました。自分の進路を決めるという重大な分岐点にたっている今、このようなお話を聞けてとても良かったです。
- パネルトークでは、様々なキャリア形成された先生方の貴重なお話を聞くことが出来、今後の自分のキャリアを考えていく上で活用できるものが多くありました。また、先生方のお話を聞いた後のブレークアウトセッションも充実していました。皆で先生方の共通点や疑問点を出し合い、そのディスカッションの中で得た気づきもありました。
- 様々なお話をお聞きすることで、新しいキャリアの考え方を知ることが出来、自分のキャリアについて以前よりも明確に想像することが出来た。体験談からカルチャーショックを受け、また、新たな価値観、知識を得ることが出来て良かった。
- 講師の方々それぞれのバックグラウンドや思い、大切にしたいことなどを聞くことができてとても参考になりました。
- 選択肢の多様化やリセットアンドリニューアルなどの言葉にパンチや説得力があってとても興味深かったです。
- どのような話題があり、それについて他の分科会の方々がどのように考えていくのかの起点に触れる機会にもなったので良かったです。
- とても貴重な体験を聞くことができた。遠く離れたところにいらっしゃる講師の方からも話を聞くことができたのでよかった。
- 講師の方々の話を聞けて、様々なバックグラウンドを知ることができ「働く」ことには様々な形があり、自分自身と向き合い続けることが重要であることがわかりました。ありがとうございました。
- 自分の分科会の講師の方以外のお話を聞くことができる良い時間でした。この時間から学んだことが、自分にできることは何かについて考える、ということに繋がったので、私にとって必要不可欠な時間でした。講師の先生方の歩みを聞き、とても刺激を受け、視野を広げることができました。
- 分科会の先生方のパネルトークは短時間の中、バリエーションに富んだ内容を一気に拝聴でき、なかなか体験できない貴重な機会でした。
- パネルトークではとても有意義な講演を聴くことができた。多くの方からこれまでのキャリアについて聞く機会はあまりないので非常にためになった。
- 講師の先生方のキャリアに、どの方もリセットポイントを持っていたことが印象的でした！方向転換することを恐れなくてもいいんだと思い、とても参考になりました。
- パネルトークの中で、学生時代の何気ない行動が職のきっかけになっていたり、自分のやってみたいことや刺激を感じることに忠実に行動していたりすることが印象的であった。加えて、学生時代は、社会に出る前にある程度時間の取れる最後の機会である。自分のやりたいこと、興味のあることはもちろん、些細なきっかけで生まれるチャンスを大切にしていきたい。その過程で自分はこれだと思える分野に出会いたい。
- パネルトークのキーワードが講師の先生方の間でいくつか通じるものがあることが印象に残った。(中略)全てのことに通じるわけではないが、物事はある程度共通性を持っていて１つのことに力を入れることで他の事にもポジティブな影響を与えることがあるということは、本セミナーで学ぶことのできた大きな収穫であると感じた。
- キャリアの中でいつもリセット&リニューアルして良いという考え方や、どんな状況でも面白くしようとする「おもろレーダー」、他者との縁を大切にときには仲間と行動してみるのも良いということ、チャンスが来たときにそれを掴む力の重要性、他者の問題を自分事として捉えるという考え方を講師の先生方から学んだ。

International Career Seminar

1.概要

目的

－世界で通じる即戦力の英語力を－
国際分野の専門知識やグローバルな課題を英語で学ぶことで、実務に関わる実践的な英語能力を身につけます。また、第一線で活躍する講師より、各テーマや仕事の背景及び実状を学び、課題を話しあいながら解決策を考えます。

開催日程

2022 年 10 月 1 日（土）、8 日（土）、9 日（日）
事前指導：2022 年 7 月 20 日(水)　18:00-19:30

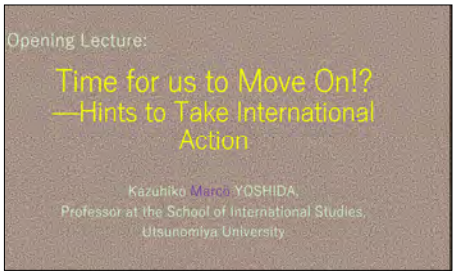
実施形態

Zoom によるオンライン授業

開講式

アイスブレイキング

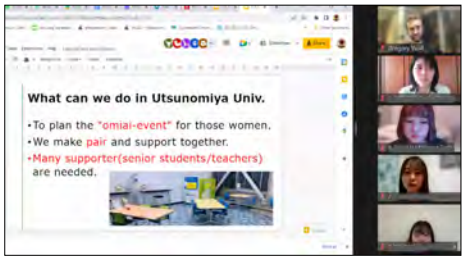
アイスブレイキング



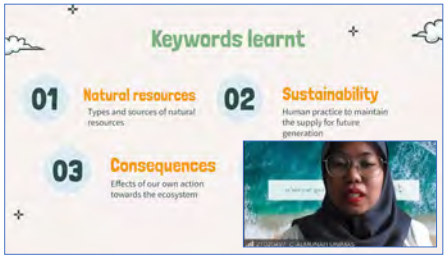
全体講義

パネルトーク

分科会



中間発表



最終発表

閉講式

２．開催日程

１日目（10月１日　土曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
9:00 9:30	受付 Registration	13:00 15:00	パネルトーク Panel Discussion by the Lecturers
9:30 10:40	開講式・オリエンテーション Opening Ceremony and Orientation	15:10 15:30	趣旨説明 分科会・プレゼン方法の説明等 Introduction to Methods
10:50 12:00	全体講義・ワークショップ Opening Lecture and Workshop	15:50 17:50	分科会 Work Group Session
12:00 12:50	昼食 Lunch		

２日目（10月８日　土曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30 12:00	分科会 Work Group Session	15:30 16:30	分科会まとめ・中間発表準備 Wrap-up Session and Presentation Rehearsal
12:00 12:50	昼食 Lunch	16:30 17:30	中間発表 Presentation Rehearsal
13:00 15:30	分科会 Work Group Session	17:30 18:30	発表準備 Presentation Preparation

３日目（10月９日　日曜日）

時間	プログラム内容	時間	プログラム内容
8:30 10:00	発表準備 Presentation Preparation	12:20 13:10	昼食 Lunch
10:00 12:20	全体発表 （発表 10 分、質疑応答 5 分、講評 5 分） Final Presentation	13:30 15:00	ふりかえり・閉講式 Reflection

３．全体講義

Time for us to Move On!?
-Hints to Take International Action

Kazuhiko YOSHIDA, Ph.D.

Director, International Career Education Program
Professor, School of International Studies,
Utsunomiya University

Profile:
Kazuhiko YOSHIDA, descendant of Emishi and Yamato from Northern Honshu, Japan, is the chairperson of the International Career Education Committee and a professor teaching general linguistics and multilingual communication at School of International Studies, Utsunomiya University. He is also a non-professional bass player. Music and dance (just like languages) always bring him joy and interesting communication issues to consider. In the mid-80s of the last century he was just a 25-year-old hopeless mediocre Japanese monolingual punk. Having hit rock bottom with communication problems in everyday life he felt isolated from everyone else in the world. Inspired by an adventure novel saying “So, to devour landscapes, that’s the thing I should do now,” he decided to move to a place where nobody knew him. That was Montpellier, France in which people of 140 different nationalities live. Luckily he started his social life and his study of languages and linguistics in such an ideal multicultural and multilingual environment. While being enrolled in the graduate school, he was sent as a visiting lecturer to Pakistan for 2 years then to Thailand for 3 years. He has been working for Utsunomiya University since 2003 after receiving a Ph.D. in linguistics, and supporting JICA volunteer teachers overseas since 2007. He has been learning and using a dozen languages which are indispensable for communication with people around him.

Information

This opening lecture allows participants to take their time and think about how to start communication in a non-native language, provides an opportunity to rehearse in their mind building relationship with the work group lecturer and group mates, working collaboratively for the common objective and motivates them to take their international action.

1. Current Work and Research Topics

At the university, he gives lectures and seminars in general linguistics, multilingual communication, Japanese as a foreign language and foreign language education in which students from different countries of diverse social, cultural and linguistic backgrounds meet, work together, change perspectives, teach and learn from each other and cultivate their communication skills. In linguistics, he is much interested in relationships between language and human cognition and conducts contrastive research between different languages on information structure both in sentences and in discourse. In educational studies, he is carrying out surveys of successful foreign language learners and roles of language instructors. Also, he is working hard on philosophy or methodological issues of language science.

2. Main Topics for the Opening Lecture and Workshop

The lecture discusses cases of multilingual communication and multicultural collaborative activities in international communities, based on the lecturer’s own experience. Through the discussions, students will notice tips by themselves

to apply for their trials and efforts in the work group session and in their real life. Also, the lecture gives an instruction on how to start to use the Workbook and explains key concepts in the book.

Keywords:

Imagination

Living a multilingual life

Living in a community

List of topics:

- What is information gap?
- Playing games in social contexts
- Adding another means of communication than the mother tongue
- Finding your role and playing it
- Changing perspectives
- Getting back to basics
- Etc.

3. Reference

Nothing will be specially required, so long as you are able and ready to talk about everyday topics coherently with people who happen to be next to you in the morning session on the day 1. If you are not really self-confident, the following books (or other books of similar topics) will be helpful.

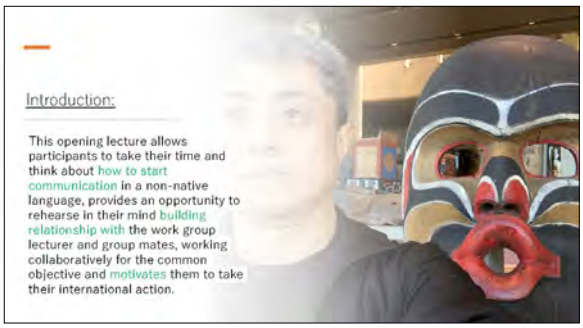
中井俊樹（編集)(2009)『大学生のための教室英語表現 300』アルク

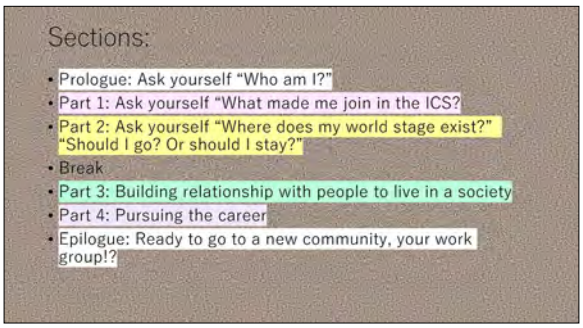
塚本亮（2021）『ネイティブなら 12 歳までに覚える 80 パターンで英語が止まらない! 』高橋書店

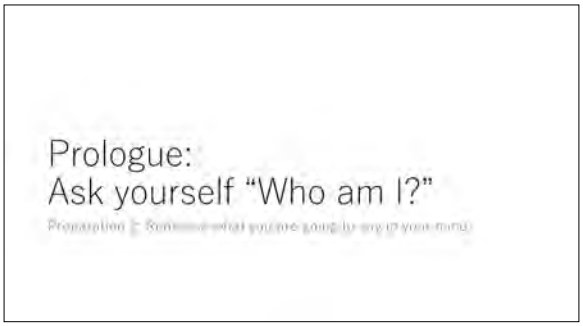
If you find it difficult to motivate yourself to communicate in English these rather small but inspiring books are highly recommended:

塩田勉(2001)『おじさん、語学する』集英社新書

竹内理(2007)『「達人」の英語学習法』草思社







05:00

Prologue:
Ask yourself "Who am I?"

Preparation 1. Find by yourself 3 or more points that differentiate you from others. Be sure about how to tell those points in English and rehearse saying.

Prologue:
Ask yourself "Who am I?"

Practice 1 : Please get back to your previous group (breakout room), introduce yourself and get reactions from your former group mates.

Please react to each other in the group.

Prev 5

Prologue:
Ask yourself "Who am I?"

Practice 2 : You are divided into pairs automatically. You will have 3 short sessions with different partner. Each session lasts 3 minutes. Introduce yourself and ask questions to each other so that you can get to know your partner's personality. In the 2nd and 3rd sessions please introduce your self and the former partner too.

pair: 3 × 3

International
Career
Seminar

Training Seminar Workbook

Otsuromiya University, Faculty of International Studies

Part 1:
Ask yourself "What made me join in the ICS?"

Task 1. Checking the Workbook: Let's rethink the purpose and goals of the seminar. Open the page 1 of the workbook and have a look.

Part 1:
Ask yourself "What made me join in the ICS?"

1. Engage with those who wish to work on the world stage.
Ask yourself "What type of people do I wish to work with? "
Or "What is my world stage? Where does it exist?"

2. Think about your roles in local and global society.
Ask yourself again "Who am I?" "What am I good at or poor at?"
Keep wondering "What part of work suits me?" "What efforts of mine do my group mates appreciate or smile at?" Do it during the work group session which will start this afternoon!

Part 1:
Ask yourself "What made me join in the ICS?"

3. Consider how to work in society with motivation.
Let's think about it in Part 3 after the break. But what is a society?

4. Find motivation to actively pursue your career
Let's think about it in Part 4 after the break. But what is my career?

Part 1:
Ask yourself "What made me join in the ICS?"

Workbook page 3:
As the International Career Seminar starts, describe your goals/objectives and career plans in 10 minutes.

After 10 minutes you will be divided into groups of 4 people. You are expected to exchange ideas with each other.

4 : 5

10:00

International
Career
Seminar

Training Seminar Workbook

Otsuromiya University, Faculty of International Studies

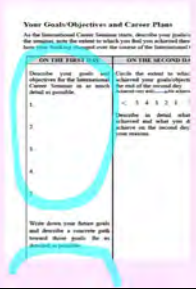
Part 1:
Ask yourself "What made me join in the ICS?"

Task 2. Checking the Workbook: Open the page 3, have a look at the entire table, and then fill in the column "ON THE FIRST DAY" right now.

Part 1:
Ask yourself
"What made me
join in the ICS?"

Workbook page 3:

As the International Career Seminar starts, describe your goals/objectives and career plans. On the second day ···



International
Career
Seminar

Training Seminar Workbook

Otsuromiya University, Faculty of International Studies

Part 1:
Ask yourself "What made me join in the ICS?"

Task 3. Checking the Workbook: Open the page 22. Imagine "how will I evaluate myself after the final day?"

Part 1:
Ask yourself "What made me join in the ICS?"

I spoke English as much as possible.
I spoke English only because the common language for the seminar is English and I spoke much.

I tried to participate in presentation and lectures.
Yes, I did. Because it's quite natural that a participant participates in the activities.

I was able to make comments and ask questions.
Yes, I was. And I did it as much as I could.

I used English during the workshop.
Yes, I did, of course.

I used English to talk to other members of the seminar.
Yes, I did, of course.

Part 1:
Ask yourself "What made me join in the ICS?"

I was able to exchange ideas with others.
Yes, I was, and I did it. Because otherwise it would be too boring.

I will be able to apply what I learned at the Career Seminar to my future.
!?

How useful was the international career seminar?
!?

10 minutes' break

Part 2:
Ask yourself "Where does my world stage exist?" "Should I go? Or should I stay?"

Question 1: Ask yourself "What is my motivation or stimulant? Do I really need that? Where should I work?"

Part 2:
Ask yourself "Where does my world stage exist?" "Should I go? Or should I stay?"

Motivation Case 1:

Devouring landscapes, that's what I need to do. Like one who would never be satisfied with land, or life, or woman, for whom more things are needed. It's not a matter of understanding. It's not a matter of self-analysis. No, it's to become a motor, a hot metal monster that pulls its weight towards an unknown direction….

Part 2:
Ask yourself "Where does my world stage exist?" "Should I go? Or should I stay?"

Motivation Case 2:

Living here with an irreplaceable person

Part 3:
Building relationship with people to live in a society

Review: Remember the seminar goal No. 3 on the page 1.

3-1:
How should we deal with small issues with people whom we have met for the first time?

Question 1: A man in front of the machine in Shinjuku Station, struggling with the one with no electricity. What will you do?

3-1:
How should we deal with small issues with people whom we have met for the first time?

Question 2: A lady with a silk scarf is walking in the street. Her scarf has dropped down, but she does not notice it.

3-2:
How should we build relationship with people at distant places.

3-2:
How should we build relationship with people at distant places.

03:00

5 minutes' group discussion and report!

8:5

03:00

Part 4:
Pursuing the career

5 minutes' group discussion and report!

8:5

Part 4:
Pursuing the career

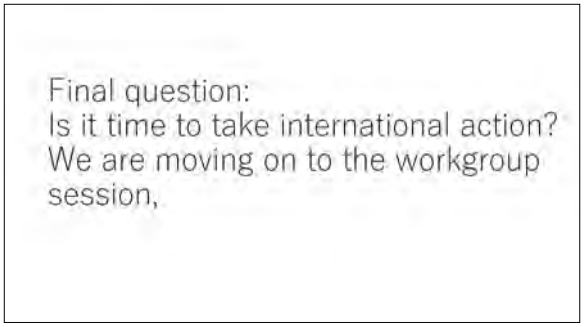
Review: Remember the seminar goal No. 4 on the page 1.

Task 1:Try to find the answer by yourself in 3 minutes for the following questions: What is career? Does it necessarily need to be international?

Part 4:
Pursuing the career

An example not to imitate 1:

Graduation from a university ⇒ salesperson
⇒ air conditioning technician ⇒ foreign student in France
⇒ radio station assistant/security guard/student
⇒ graduate student/visiting lecturer abroad
⇒ graduate student/Web and database programmer
⇒ professor
⇒ non-commercial musician earning the living with music



From the Comments of Students (Comments below are taken directly from students workbooks.)

- I think that it is very important to build a relationship with people in working on any things. When we talk with people who have different backgrounds it is very important to understand their own culture. I will think about my future career throughout the lectures and talking with the other students.
- I found that it is very difficult to find the 3 different points from others by myself. I need to know who I am.
- I learned how to create a new project and we could create our own projects. They may not be perfect but this was good opportunity for building up our own careers and establishing our own ideas.
- It would be easy if we could decide to do or not to do something depending on how we feel, but what criteria we should use to make decisions when we have to choose between what we have to do and what we want to do. This depends on, I think, but now I am wondering how those criteria would be formed.
- In this presentation, there were many catchy phrases. I was impressed by the phrases “Should I go?” and “Should I stay?” We need to understand our own abilities and capabilities so that we could work in the adequate fields in the future. I would like to find “what I should do next.”
- I think it is very important to be aggressive about any experiences that I have never known in order to get diverse experiences.
- Dr. Yoshida tells us his own casual experiences as a straight point. He uses examples of the things that happen to everyone and makes them easy to understand, which makes me feel relaxed and allows me to deepen my own thought.
- It was a precious experience that I can work with the people who have various kinds of experience and backgrounds. In my group, there are some students who are from Malaysia and India. And one of the members has her own career and her own family. I could know many thoughts and sense of value. I was so excited.
- I believe that it is important to face ourselves now, to know who you really are, and to express your own mind visions.

４．分科会・講師及び講義概要

Work Group A	**Make It Up / Make It Happen: Collaboratively Creating an Original Future**
Lecturer	***Gregory Wolf*** Teaching Manager, Teaching Artist, Songwriter Youth Theatre Japan
Work Group B	**Learning from Yesterday, For Safer Tomorrow; Skills Required in the Age of New Normal**
Lecturer	***Takeshi Komino*** General Secretary of CWS Japan CWS Japan
Work Group C	**Multidisciplinary Approach in Field-based Studies**
Lecturer	***Tatsuhiro Ohkubo*** Professor, School of Agriculture, Utsunomiya University
Work Group D	**Maximizing Individual Choice and Capabilities by Building Transnational Careers**
Lecturer	***Ana Sueyoushi*** Associate Professor, School of International Studies, Utsunomiya University
Work Group E	**Dreams, Skills, Jobs & Well-being**
Lecturer	***Bernadett Kiss*** Lecturer, Lund University, Sweden
Work Group F	**Human Security Paradigm: Partnership in Non-traditional Security Issues**
Lecturer	***Sugit Arjon*** Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University Former Visiting Researcher, the Institute of International Relations and Area Studies (IIRAS), Ritsumeikan University

分科会 A

Make It Up / Make It Happen: Collaboratively Creating an Original Future

Gregory WOLF

Youth Theatre Japan,
Teaching Manager, Teaching Artist, Songwriter

Profile:
Gregory Wolf works at Youth Theatre Japan (@ytj_official), an 18-year old startup that creates new value in the areas of education and entertainment. Gregory holds a BA in theatre and East Asian Studies and has studied, written, directed, and appeared onstage in theatre productions throughout Japan and the United States. He has an artistic background in acting, directing, collaborative-theatre-making, and songwriting. While most of his life has been spent in the United States, he has lived in Japan as a child, a student, and now an adult.

Information

1. Current Work and Research Topics

I currently work at Youth Theatre Japan as the project manager for an artistic and educational project called wordplay (which I helped create 2 years ago). wordplay is a magical world where the alphabet comes to life and children enjoy English, diversity, and creativity.

This year, in 40 different locations throughout Kanto, Kansai, and Chubu, nearly 1,000 children ages 7-12 will rehearse and perform the wordplay musical. As project manager for this, I collaborate with a multicultural team of illustrators, choreographers, video editors, musicians, dance teachers, English teachers, singing teachers, acting teachers, marketing professionals, merchandise sales professionals, studio managers, corporate managers, and others. Together, we aim to contribute to children's lives, to Youth Theatre Japan, and to society.

2. Career Path

I graduated with the highly unusual combination of the two majors of Theatre and East Asian Studies (in other words, I learned how to make art in English and how to have conversations in Japanese). Everyone, including me, had little expectation of there being any job in the world that combined these skills (it can be hard to find a job that uses even one of these skills). Yet, to the surprise of everyone, including me, I now have a job at YTJ which uses both!

Prior to Youth Theatre Japan, I worked as an assistant English teacher in junior high school and elementary school in Kobe and, before that, spent a year volunteering with children's and youth community-based education programs in the Eastern United States (and before that I was in college).

3. Main Topics for the Group Work Session

I believe the world can benefit from new, original, collaborative projects (doing something that has never been done before and inviting others into the process), and there are many people who would like to make such projects. I am one of these people, and I think you are too.

Perhaps you are thinking: wait! Where do I start? How do I get an original idea? Who can help me? Where will I get money? How do I know I am actually making a positive difference in the world?

Fear not. Everything in life is hard anyway, so why not aim for a noble goal and create something you love?

In this session, I will share my limited knowledge of the process of HOW TO make original and inclusive projects. We will talk about how to
1. Think collaboratively and globally
2. Search for inspiration
3. Make concrete plans

And we will not just talk; we will do. By the end, you will create your own concrete plan for your own original project in education, entertainment, art, business, or activism. You can choose whether or not to do the project on your own time after the seminar, but we will create a plan together.

I cannot wait to see your ideas!

4. Key Words

- Absence
- Reference
- Organic Growth
- Unity in Diversity
- Fail Faster

5. References

- Applebaum, Ann, Ronald Young Jr., Jacob Weisberg, Solvable Podcast (Pushkin Industries)
- Bogart, Ann, And Then You Act (Routledge, 2007)
- Doerries, Bryan, The Theater of War: What Ancient Greek Tragedies Can Teach Us Today (Penguin Random House, 2015)
- Gaiman, Neil, Speech at Bucknell Forum tech/no (2012)
- Stella Adler Studio of Acting, Actor Warrior
- UNESCO, Four Statements on the Race Question (1967)
- Universal House of Justice, The, The Promise of World Peace (1985)
- Youth Theatre Japan, Company Principles

6. Reading

This seminar is about YOU creating, but first let us look at some other creative people for inspiration and reference.

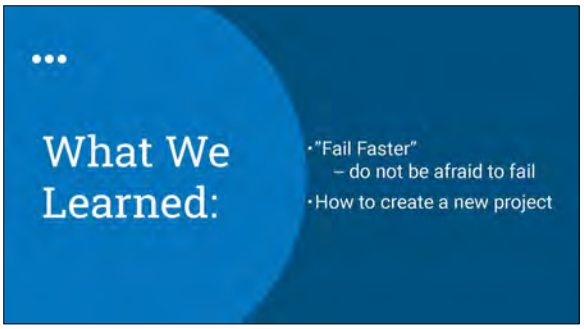
1. Please first read the company principles of Youth Theatre Japan (as they summarize a number of key ideas that are helpful for collaboration and creativity).

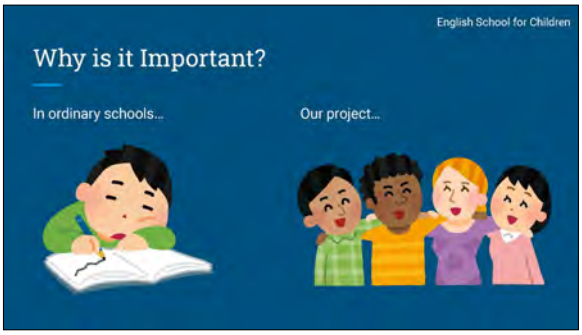
https://drive.google.com/file/d/1lOyC1vOIqJlK__xQ2DzdB5M0q_DLmg06/view?usp=sharing

2. Next, please pick any two of the following four reference projects, and watch the videos or read the article. Each of them is just one example of an original and collaborative project/movement in the US, Japan, or somewhere else. Maybe we will find them inspiring.

a. EDUCATION PROJECT: Girls Make Games: https://youtu.be/ptqdwPuFG_E
b. ACTIVISM PROJECT: #EducationisnotaCrime Street Art Campaign: https://vimeo.com/214890238?embedded=true&source=video_title&owner=47130166
c. ART PROJECT: Afrofuturism: https://www.youtube.com/watch?v=bmEShkZaxuY
d. BUSINESS PROJECT: Mitaka Multi-Generational Home: https://note.com/mrn1224/n/ne16b1e6fdf35

Final Presentation by Participants





2. Why is it important?

- Students teach their mother tongue to each other
- Cross-cultural exchange can be easily done.

3.How can people get involved

- Parents of students
- Teachers
- Neighborhood

Traditional music

1.What is this project?

introducing each country's traditional music
→ playing the music live or playing a recording

2.Why it is important?

-can feel other culture's mood.
-Deeper understanding about cross culture

Traditional game

1.WHAT is this project?

Play traditional games.
ex) Japanese : KENDAMA, AYATORI,MENKO
Malaysia : Congkak, batu seremban, zero-point

2.WHY is it important?

Traditional games = particular characteristics

→Better **cross cultural understanding**

3.HOW can you get involved?

Sponsor our project
Donate to our fundraiser

Cross Cultural Exchange Camp for Underprivileged Children in Malaysia

Will be presented by: Kimm

WHAT is the project?

"Exposing underprivileged children to a **multicultural environment** via **cultural exchange** and **English language learning.**"

Key Activities

Cultural exchange
(Foreign-Malaysian; East Malaysia)

Learning our own culture
(Rungus, Kadazan Dusun, Iban, etc.)

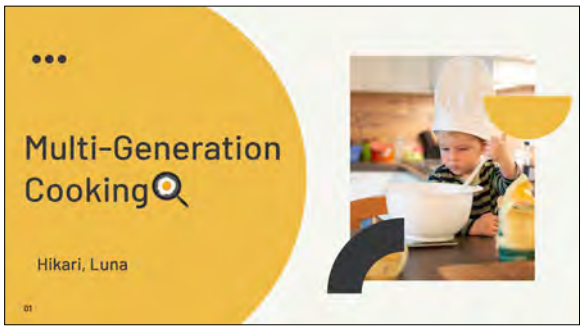
English language workshops
(Lingua Franca; opening new opportunities)

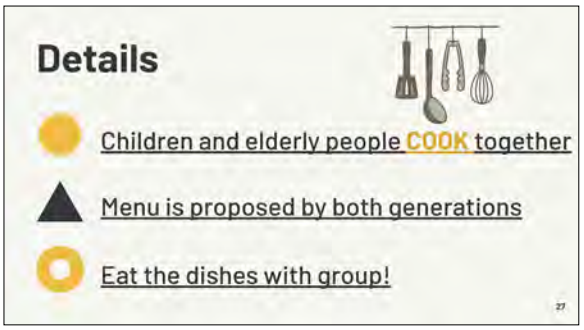
Long Term Goal
Sponsor children to do cultural exchange abroad

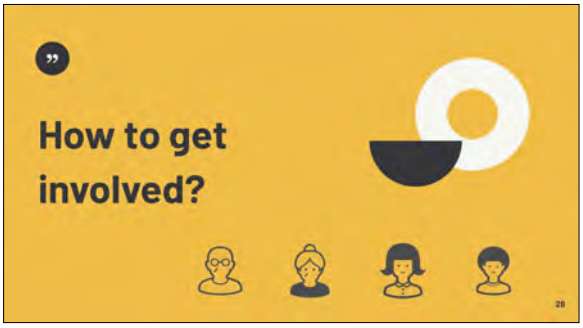
WHY is it important?
Avoid prejudice & stereotypes
Giving children equal opportunities
HOW can you be involved?
Sponsor
Donate
Volunteer
Collaborate
Host
Promote

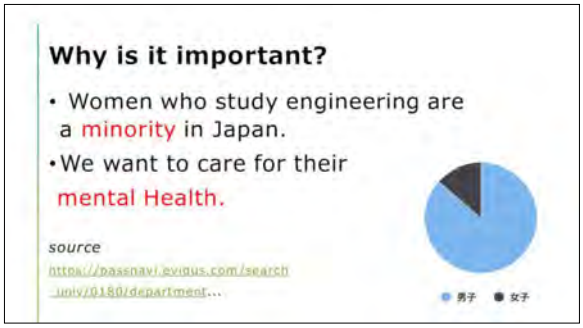
Supporting women's mental health project
By Nazuna & Haruka

What can we do in Utsunomiya Univ.
・To plan the "omiai-event" for those women.
・We make pairs and support together.
・Many supporters(senior students/teachers) are needed.


Multi-Generation Cooking
Hikari, Luna

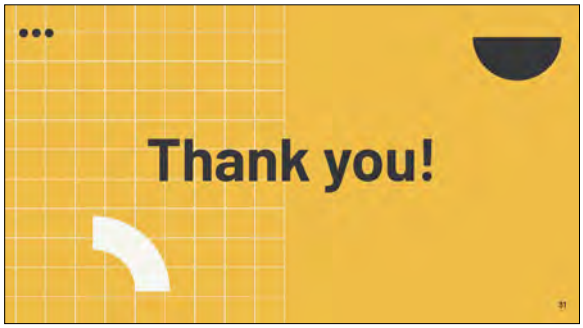

Details
Children and elderly people COOK together
Menu is proposed by both generations
Eat the dishes with group!


How to get involved?


Why is it important?
・ Women who study engineering are a minority in Japan.
・We want to care for their mental Health.
source

communicating and cooperating for common goals!
Talk about their own experiences

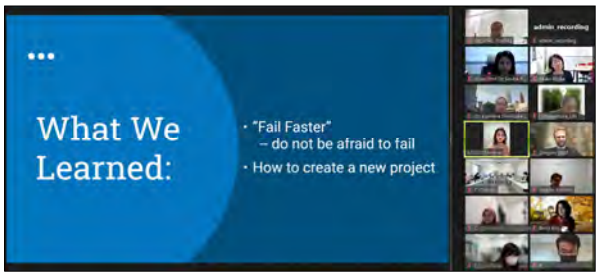
Conclusion
・the attitude "do not be afraid of failing"
・analyze targets and environments then make plans
what you LIKE → new project!



Student Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- In my work group I had found it would not be so difficult to make a new project. At first, I thought we should make it perfectly, but I leaned it is more important to make plans, even if they are vague ones. By working with people who have common ideas, we will be able to make a good plan.
- I would like to join in some volunteering work and internships for my future careers. I did not know what kind of jobs I would be interested in, so I would like to find what I want to do in the future. I like travelling and I would like to visit various countries. I am going to study English and Spanish much harder and I will take language proficiency tests.
- I am really happy to take this course with Lecturer Gregory and my group members, I learned how to be creative and how to make people more creative. I am interested in diversity and education, so this group session suited to me. I was impressed by the lecturer's words; "Everyone has his or her own character." and "Everyone has meaning." The play that the lecturer wrote has great meanings for everyone. I would like to think about these messages when I work for children. Thank you for everything!
- I like the quote in the text of "Fail Faster." People who are not afraid of making mistakes can grow up. I am sometimes afraid of failure and I am a different kind of person. So, these quotes impressed me a lot.
- English skill is important to tell my opinion. But I could not work well at the seminar. I will learn from this failure for my future success. "Fail Faster" is the word that we learned from the lecturer, I would like to keep this phrase in my mind.
- We learned how to make a new project and we made a project based on the things that we were interested in and we liked. Also, in our work group, we exchanged our ideas easily thanks to our lecturer and the group members.
- We learned from the lecturer the importance of "failing faster," that is, the importance of "Don't be afraid of failing" and "Learning from mistakes," etc. His lecture made me more active than before and made me think that I should try, challenge and I should be more confident in myself. So, I want to do something based on what I like. That will be very helpful to think about my career. This workshop was very significant for me. I would like to start from a small thing to create my future career.
- Fail faster - this phrase teaches us to take actions towards our plans without being afraid of our mistakes and to learn from our mistakes. The attitude not being afraid of failure is important when developing our career. Challenging something makes us stronger and past difficulties make us grow up.



分科会 B

Learning from Yesterday, for Safer Tomorrow; Skills Required in the Age of New Normal

Takeshi KOMINO

General Secretary of CWS Japan,
CWS Japan

Profile:
After my career in working in Afghanistan, Pakistan, Myanmar, Thailand, I started to be involved in NGO activities in Japan from east Japan Earthquake and Tsunami in 2011.　I currently serve as General Secretary of CWS Japan, and my responsibilities include: oversight and management of CWS Japan projects in Japan and liaison and oversight for Japan-funded projects elsewhere in Asia; leadership in fundraising and programming for emergency, disaster risk reduction, climate change adaptation programs in Asia; serve as resource person for CWS Global in disaster risk reduction as part of Technical Unit, and emergency response in the event of a major, sudden onset disasters; and representational role in key networks in Japan and in Asia region.

■ My current representational roles include:

- Deputy Chairperson, Executive Committee member, leader in innovation hub, Asian Disaster Reduction and Response Network (ADRRN): 2014-current.
- Chairperson, Japan Quality and Accountability Network (JQAN): 2015-current.
- Joint secretariat, Japan CSO Coalition for DRR (JCC-DRR): 2014-current.
- Co-founder and a member, NGO2030: 2017-current.
- Co-founder and a member, More Impact: 2016-current.

Information

1. Current Work and Research Topics

Our work involves emergency response for life-saving needs of disaster-hit areas both within and outside of Japan, and spreading the know-how on disaster risk reduction, which I believe it is relevant for everyone in this era. It involves working with many stakeholders, starting from communities across the Asian region, local and international NGOs, local and central governments, private companies, universities and researchers, as well as international organizations. It is sort of like, producer for resilience, and I take great pride in the impact of what we collectively achieve.

2. Career Path

Please see below video for my career path:
https://www.youtube.com/watch?v=kkc4HH7Y3Y0
2020 年 10 月 2 日開催 NGO 職員のキャリアぶっちゃけ対談 vol.1 小美野剛(JPF 代表理事)、渡辺 早希(WELgee リソース部門統括)

3. Main Topics for the Workshop

Disaster are ever increasing, and protecting ourselves from disaster risk is becoming a priority, no matter what your professions are. This course explores evolution of disaster risk reduction field, and see critical skills required in ever-disaster prone time of our lives; the New Normal. We will explore learning from the experience and strengths to be derived from each participant's hometown. The flow will be the course will be as follows:

1. The course will provide an overview of disaster risk reduction, and why it is relevant/important in the society.
2. We will explore specific disasters that happened in the hometown of the participants.
3. We will explore how to practically reduce the risks.

4. Key Words

- Disaster risk reduction
- Sendai Framework for DRR
- Resilience

5. References

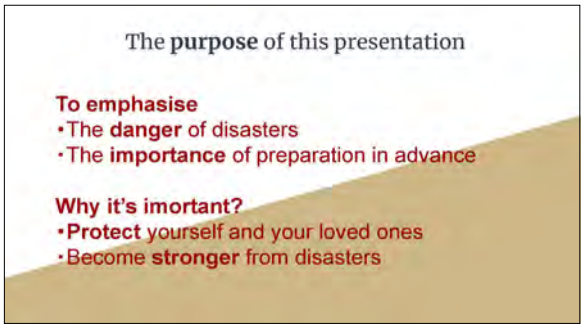
- The Citizen's Guide to the Sendai Framework for Disaster Risk Reduction
  https://jcc-drr.net/wpJD/wp-content/uploads/2017/03/SFDRR_EN_1a.pdf
- Sendai Framework for Disaster Risk Reduction
  https://www.youtube.com/watch?v=izpDdnaSxN0
- (Japanese) 命を守る防災教育
  https://www.youtube.com/watch?v=yXE1PvHLzpw

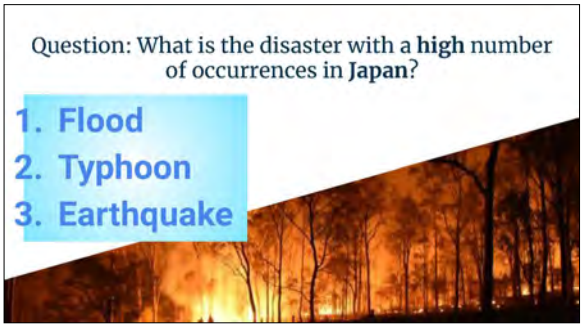
6. Required Reading and Assignment

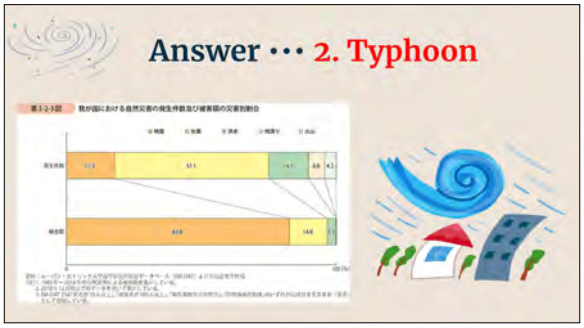
1. Please visit this website (https://disaportal.gsi.go.jp) and identify hazard map of where you live.
2. Describe key disaster risks in your area.
3. Please visit the website of local authority of where you are from (hometown), and search for the information on past disasters. Please list up at least 3 disasters that happened in the past (including year and damage).

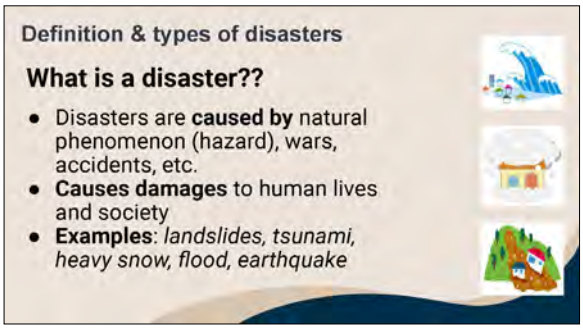
We will ask each participant to do brief presentation at the beginning of the session – one way of getting to know each other!

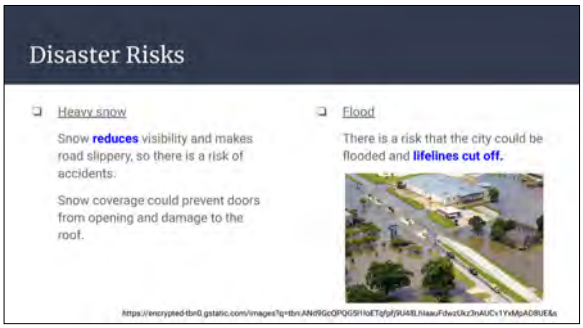
Final Presentation by Participants

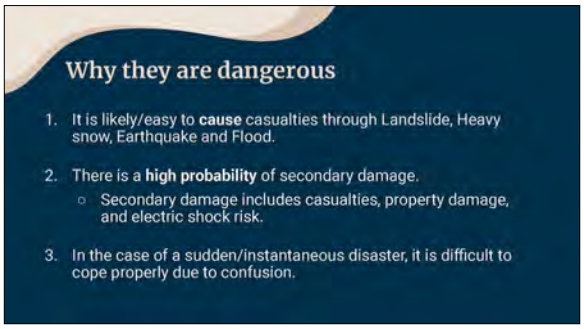


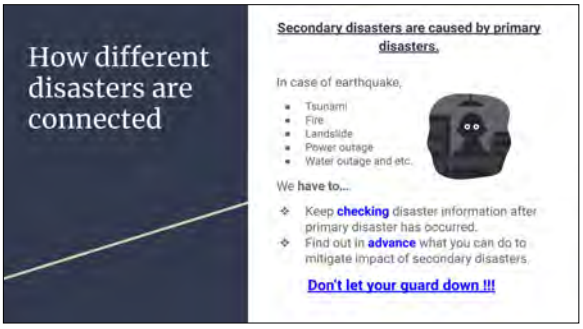


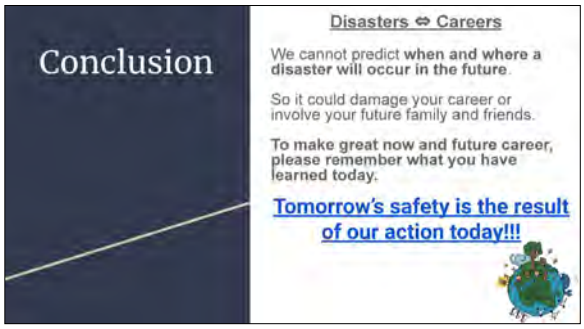












Student Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- "Tomorrow's safety is the result of our action today." We learned this is a crucial way of thinking regarding disaster risk reduction.
- I have three action plans to develop my career. First, I must get better speaking Skills in English. I found it difficult to express my opinion in English throughout the seminar. So, I am going to talk to exchange students more. Second, I will keep thinking about what I value in my life. By doing

so, I want to work in a field that I find rewarding. Finally, I will prepare for disasters in advance no matter which profession I choose.

- I learned a lot of things during this seminar. In group B, I learned about disasters. I knew that knowing about the disasters and getting accurate information very important. I started living alone from last year, but, I have not prepared for disaster prevention yet. I would like to prepare from now. I also learned a lot of things on presentation skills and methods.
- It is important to have correct knowledge about my hometown in case of emergency and to prepare for disasters in advance. One disaster risks another disaster, so we must remember this. I learned that “hazard” and “disaster” are different. I learned that it is important to speak English without hesitation and express our own opinions. We should try communicating with the audience not just reading the presentation text.
- Disaster risk will influence our careers and our loved ones. Our career design is based on a safe future. However, disasters are not predictable and might break all our lives. We have to think about the disaster risks and prepare for them.
- Disaster includes many aspects and is difficult to explain. We needed help with how to explain it. Throughout the work group session, finally we could explain the disaster in simple English to the audience.

分科会 C

Multidisciplinary Approach in Field-based Studies

Tatsuhiro OHKUBO, Dr. Agric.

Professor, School of Agriculture
Utsunomiya University

Profile:

Ohkubo was born in Tokyo in 1959, and grew up in Tokyo, Nagoya and Kanagawa. He experienced the fun of field-based programs through Boy Scouts activities during his primary and junior high school days. He was interested in mountaineering, astronomy and plant science in high school. He chose forestry for the undergraduate study at Utsunomiya University (UU), and then undertook further study on beech forest ecology in postgraduate study (Master) in Tokyo. After appointment to the a research assistant at UU, he started overseas field-based studies in Europe, USA, and SE Asia for the short- and long-term. Recently, he has been involved in the UU overseas English program at Universiti Malaysia Sarawak (UNIMAS) as an instructor/coordinator

Information

1. Current Work and Career Path

Ohkubo is teaching the subjects of Forest Ecology, Silviculture, Forest environment (Forest soil), Forest Protection (Fire, Pest, Insect, Radioactive substance and others) and their field practicums in undergraduate and graduate programs in the Department of Forest Science, School of Agriculture, UU. He is a field-based forest ecologist. His current research interest is on "Effects of natural and anthropogenic disturbance on pattern and process of regeneration resilience in Tropical Forests of South East Asia (Sarawak/Malaysia, Northern Thailand, South China) and Temperate Deciduous Forests in East Asia (Japan, Korea).” He was a founder and former director of the Satoyama Science Center of School of Agriculture, UU. At the UN Convention of Biological Diversity COP10 in Nagoya in 2010, he worked as the Kanto-Chubu cluster co-chair of Japan Sayoyama-Satoumi Assessment (JSSA) and compiled a report, Kanto-Chubu cluster; The future of Satoyama, Satoumi and Cities in Satoyama-Satoumi Ecosystems and Human Well-Being: Socio-Ecological Production Landscapes of Japan. After the nuclear power plant accidents in Fukushima in 2011, he started studies on radioactive cesium dynamics in forest ecosystems, especially focusing on resume of leaf litter origin compost production in deciduous broad-leaved forests in Satoyama, Tochigi.

He studied forestry as an undergraduate, then had further studies on forest ecology in a master’s program at a graduate school in Japan. After graduation he started professional research and teaching work in academia at UU. As for his international career, he started a short-term field-based research project in Korea, Europe, and USA concerning beech forest ecology. Then he was involved in a long-term residential-type field-based research project in Sarawak, Malaysia; Chiang Mai, Thailand and Guanxi, China for the restoration and a resilience study on degraded forest areas. Through the project, he came to know about the importance of team building, project management and communication. During

his sabbatical term in 2005 he had an opportunity to stay at a professional forestry school as a visiting faculty in Connecticut, North Eastern USA; together with local and foreign students from around the world, he experienced multidisciplinary approaches to solve complex issues on sustainable forest and natural resource management, and also the importance of strengthening professional communication skills for non-native speakers through active learning.

3. Main Topics for Workshop

The aim of this session is to analyze complex issues on sustainable land use and natural resources management. Issues can be both ecosystems (biodiversity and the environment) (climate hazards, fire, animals, insects, pathogens etc.) and social (multiple value conflicts, property rights, over and under use etc). Solutions are sought through synthesis and analysis of relevant literature for field-based case studies that are of common interest for the participants with various backgrounds and disciplines. The participants will try to introduce solutions for the complex issues from each case study of projects in different area and communities. The instructor will be happy to discuss mutual interests with participants in field studies, especially considering rural and mountain region in SE and E Asia.

4. Key Words

- Field Science
- Multidisciplinary Approach
- Natural Resources Management
- Rural Area Studies
- Environmental Conservation
- Satoyama, socio-ecological production landscape

5. References

Shogo Kudo, Doreen I. Allasiw, Kanako Omi, Melissa Hansen. Translocal learning approach: A new form of collective learning for sustainability, Resources, Environment and Sustainability 2 (2020) 100009
https://www.researchgate.net/publication/348377224_Translocal_learning_approach_A_new_form_of_collective_learning_for_sustainability
Other references will be posted later in Slack.

6. Required Assignment

After checking key words and before attending the workshop, as for case studies, the participants should choose natural resource management issues and projects to solve those issues relating to local/global environmental conservation (Forestry, Agriculture, Fishery and others) in an area/a country where you are interested in, or where you are already involved in. And you should prepare answers to/ideas about the following questions.

What was the background of the issues?
What was the project about?
What lesson did you learn from the project?
What were the strengths of the project?
What were the weaknesses of the project?
What were the things you would do differently?
What were the things you can do at home?

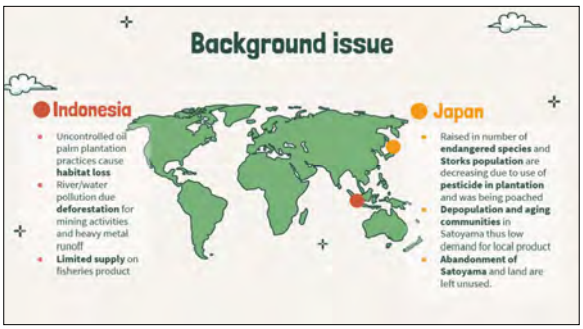
This session will be conducted through hybrid flexible learning, combination of face-to-face and online.

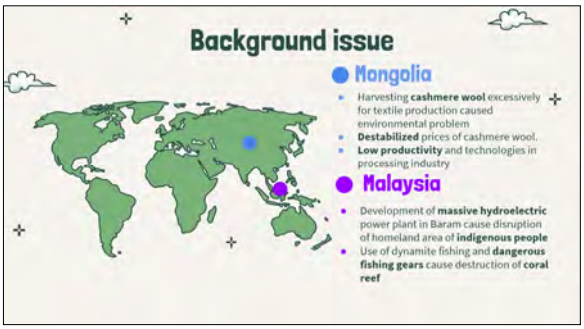
Final Presentation by Participants

*Natural Resources
*Biotic components
Discussed topics
Sea turtles
Sri Lanka
Water pollution
Global ocean
Palm oil & forest plantation
Indonesia
Mongolia
Textile (wool) production
Storks
Japan
Malaysia
Indigenous people
Aquaculture and fisheries

Purpose/Goal
To discuss the issues on natural resources utilization and restoration in the world.
To suggest solutions and implementations for the presented issues.
STOP BARAM

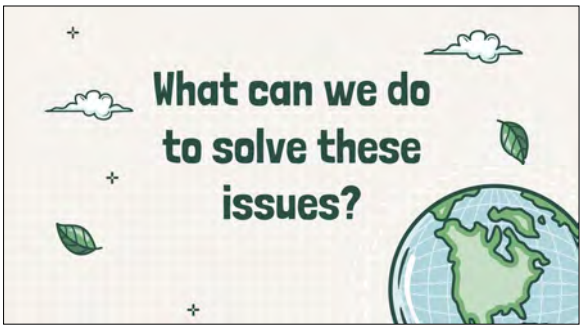
Purpose/Goal
To raise awareness on endangered and protected animals as well as human's rights.
To acknowledge the importance of conservation and preservation of natural resources.
RED LIST


Background issue
Indonesia
Uncontrolled oil palm plantation practices cause habitat loss
River/water pollution due deforestation for mining activities and heavy metal runoff
Limited supply on fisheries product
Japan
Raised in number of endangered species and Storks population are decreasing due to use of pesticide in plantation and was being poached
Depopulation and aging communities in Satoyama thus low demand for local product
Abandonment of Satoyama and land are left unused.


Background issue
Mongolia
Harvesting cashmere wool excessively for textile production caused environmental problem
Destabilized prices of cashmere wool.
Low productivity and technologies in processing industry
Malaysia
Development of massive hydroelectric power plant in Baram cause disruption of homeland area of indigenous people
Use of dynamite fishing and dangerous fishing gears cause destruction of coral reef

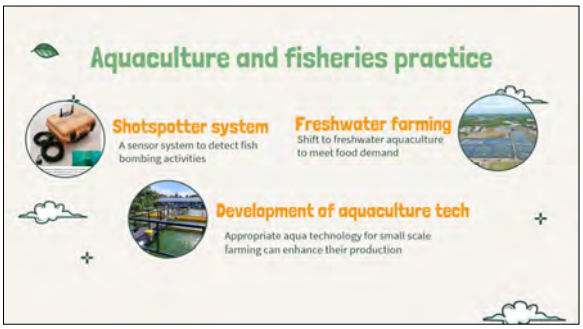
Background issue
Sri Lanka
Sea turtle are eating plastic from the ocean and mistaken it for jellyfish
Illegal poaching and hunting sea turtle's products such as eggs, meat, fat and shell
Forest lost and damage leads to global warming

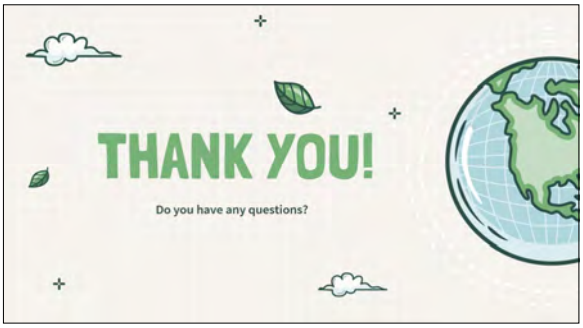
Background issue
Global ocean
Water pollution disrupts the water quality which cause disturbance of marine life.


What can we do to solve these issues?

Purpose/Goal
To discuss the issues on natural resources utilization and restoration in the world.
To suggest solutions and implementations for the presented issues.

Plastic problems and water pollution
Ocean cleanup
Use of buoyant fence and interceptor to collect plastic waste
Phytoremediation
Using plants to remove the pollutions near waterbanks





Student Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- I learned global issues and so many new things throughout the seminar. There are many global issues that I didn't know. For example, fishing with bombs in Malaysia, Satoyama crisis, issues of the oil palm plantation, etc. I could know how to solve these problems as well.
- I joined the seminar on campus. That was great for me. We could talk face to face.
- I learned about modern sustainable agriculture. I didn't know anything about Tochigi's Satoyama conservation activities, so this was a good opportunity for me. I was also able to learn about the role of "Yudai 21" rice development at Utsunomiya University. I am interested in this kind of activity. The university can contribute to the revitalization of Satoyama in cooperation with the local communities.
- I decided to participate in this work group because of my "curiosity" to learn something that we cannot study at the faculty of International Studies. I did my best throughout the session to fulfill my curiosity.
- I leaned biotic components issues and environmental problems in the world. Many projects are conducted all over the world. I cannot join such big projects but there are many things that I can do at home and in my daily life. For example, using my own shopping bags, joining volunteering activities. Taking small actions in our daily lives is important and useful for environment and the Earth.
- One of my goals throughout the seminar was to have an interest in international issues and to broaden my perspective. Study of natural resources management was pretty difficult for me, but it was really fun. I enjoyed the conversation with the students from Malaysia.

分科会 D

Maximizing Individual Choice and Capabilities by Building Transnational Careers

Ana SUEYOSHI, M. Phil.

Associate Professor, School of International Studies, Utsunomiya University

Profile:

Prior to taking my current position, I worked as researcher, economic consultant and economic advisor in Peru. After my studies at the Graduate School of International Political Economy (GSIPE), Tsukuba University, Japan, I joined the School of International Studies, Utsunomiya University, where I am in charge of Latin American Studies. My research interests include Latin American economy, the link between higher education and employability in the APEC region, and Nikkei workers in Japan, and Nikkei returnee children in their homeland.

Information

1. Current Work

Currently I am associate professor of Latin American Studies at the School of International Studies, Utsunomiya University, where besides Spanish language, I also teach an introductory class to Latin American studies and other more specialized classes meant to present Latin American politics and society and create an environment that enable constructive class discussions. As these classes are also taken by foreign students, it is interesting to listen to comments and questions from students, whose diverse backgrounds let them find commonalities and differences between their own history and Latin American history that enrich further discussion. Before teaching at Utsunomiya University, my research was solely focused on Latin American economy, more precisely on models of economic growth and the impact of fiscal policy. In the last decade, I have been able to broaden my research interests that now also include the link between higher education and employability in the APEC region, Nikkei workers in Japan, Nikkei returnee children in their homeland, and since 2016 Japanese immigrants in Peru during the WWII. These researches are allowing me to tell the stories of people in Japan and Peru, and to convey them to both societies. For me, there is no greater satisfaction nor greater reward that tending a bridge between these two countries.

2. Career Path

Economic Advisor for the United Nations Development Program（UNDP）(1992-1993), Economic Advisor on Public Policy at the Ministry of Finance of the Government of Peru (1993-1997). Since 2006 teaches courses of Latin American Studies at the School of International Studies, Utsunomiya University. She obtained her Master of Philosophy in Economic Development and Policy Management, and pursued doctoral studies at the Graduate School of International Political Economy (GSIPE), Tsukuba University. Her research has been focused on Latin American economy, the link between higher education and employability in the APEC region, and Nikkei workers in Japan and Nikkei returnee children in their homeland.

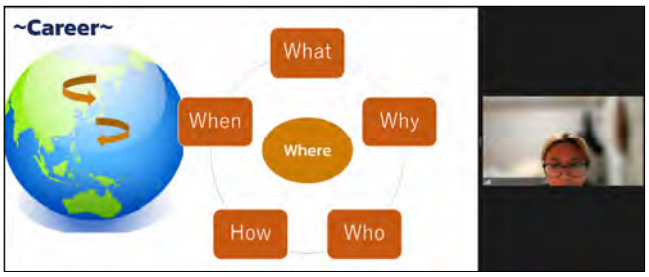
3. Main Topics for the Group Work Session

In Japan, the number of South American workers and their families, most of them of Japanese ancestry or Nikkei, had steadily increased since the late eighties. However, due to the improvement of the economic conditions in their homelands, different patterns of circular migration have been observed among first and second generation of Nikkei Peruvians between Japan and Peru. For the second generation of Nikkei Peruvians, circular migration emerges as a vehicle for self-realization, as Japan and Peru can both become places they can find not only material or economic well-being, but also emotional and moral well-being. By experiencing circularity, the second generation of Nikkei Peruvians can make good use of their capabilities in a manner most meaningful to themselves, opening chances for a career path in either country or in both that overlaps with their personal goals. Moving between Japan and Peru is inextricably linked to their own desires and values, which in turn allows them to exercise their agency in pursuit of a self-conceived better life: they are true agents of their own circularity.

In this working group, after one first session of introduction to the case study, that is to say, transnational mobility of second-generation Nikkei Peruvians, and establishment of the main theoretical components, the participants will use the same framework to think about their own career building by having the opportunity for reflection on their own career goals and practices. The discussion will be focused on the meaning of capability, how circularity opens further opportunities or freedom for developing or using more capabilities, and how career goals overlap with personal-life goals and values.

Key Words

- Capabilities approach
- Self-realization
- Transnational-career building
- Second-generation Nikkei Peruvians
- Circular migration



4. References

- Sen Amartya (2009) The Idea of Justice, Penguin Books.
  センー・アマルティア著、池本幸生訳（2011）『正義のアイディア』明石書店。

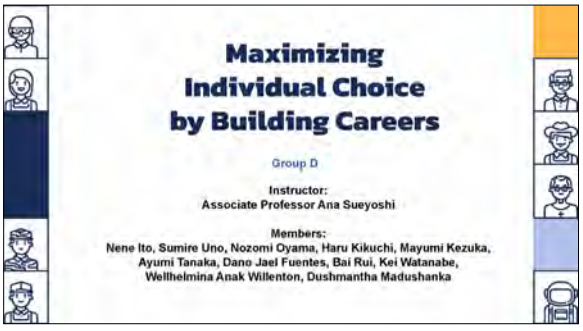
- Nussbaum, Martha C. (2011) *Creating Capabilities, the human development approach*, Cambridge: the Belknap Press of Harvard University Press.

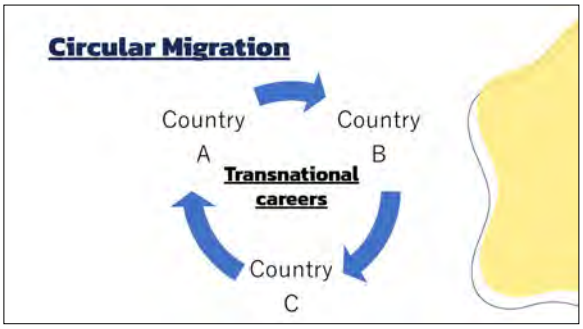
5. Preparation for Participation

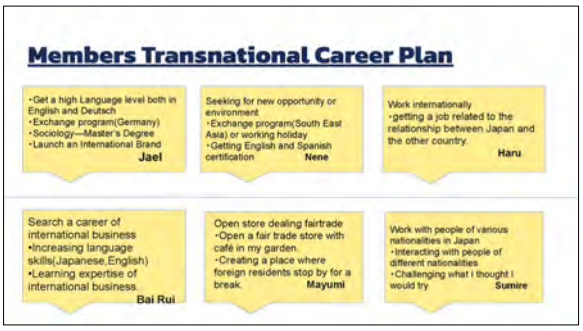
1. スエヨシ・アナ (2015) 「ペル-と日本を行き来する子どもたちー日系人児童生徒の二重準拠枠を視野に入れて-」 田巻、スエヨシ（編）『越境するペル-人、外国人労働者、日本で成長した若者、「帰国」した子どもたち』宇都宮大学国際学部国際学叢書第 5 巻、宇都宮：下野新聞社、150-171 項。
   This reading will provide the participants with a general knowledge of the Nikkei Peruvian history in Peru and Japan.

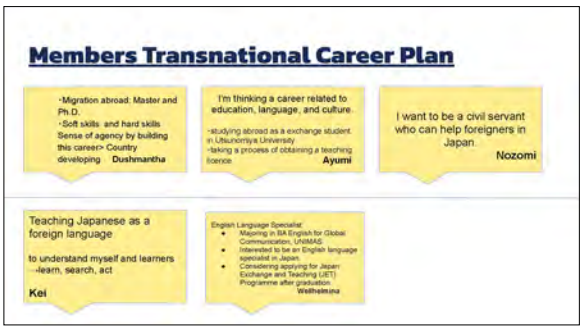
2. Sueyoshi, Ana (2017) “Intergenerational circular migration and differences in identity building of Nikkei Peruvians,” Wolfram Manzenreiter (ed), Contemporary Japan, Special Issue, Squared Diaspora: Representations of the Japanese diaspora across time and space, Routledge, vol. 29, number 2, 230-245.
   It covers circular migration between Japan and Peru of first and second generation of Nikkei Peruvians. Participants should focus on the experience of the second generation. However, the review of the first generation will also shed light on second-generation mobility as they are connected and analyzed contrastively.

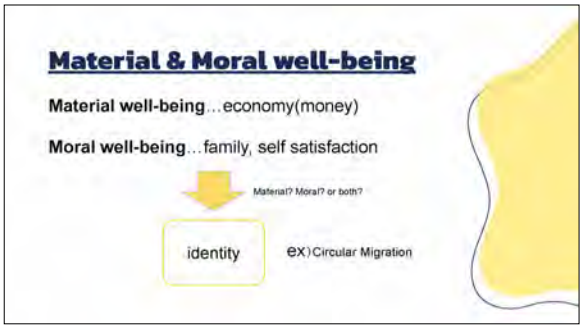
Final Presentation by Participants

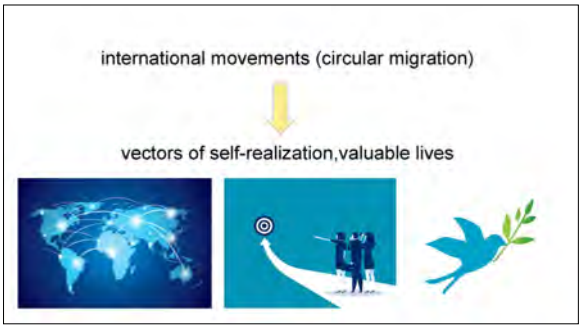


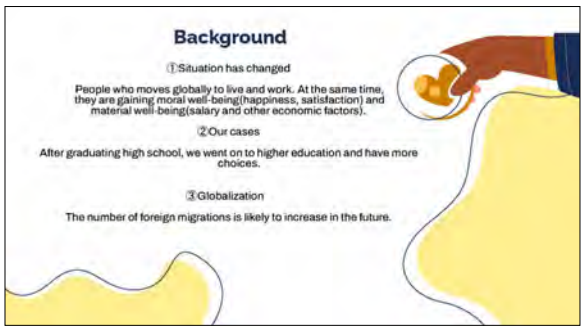


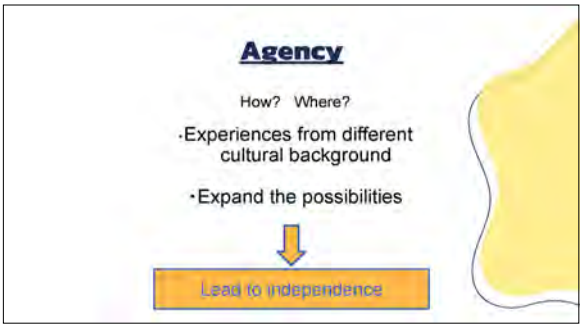


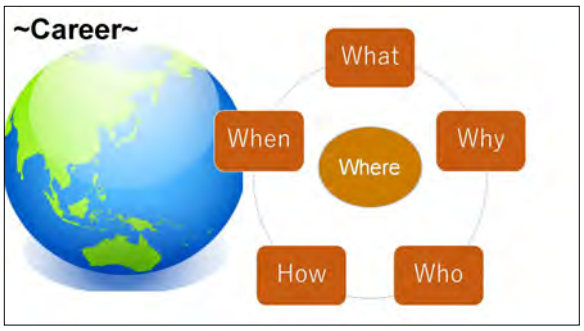












Student Comments

(Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- We learned about maximizing individual choices and by building careers. Also, we learned about circular migration and transnational careers like Prof. Sueyoshi's career and career of Peruvians coming to Japan. Our group members thought about each transnational career plans and we found common things among our career plans. That is the need of "agency" and "capabilities." Agency is the ability to line up our options and capability is the freedom to take actions. Then we defined our goal: To find identity through exploration of personal agency and the development of new capabilities by building transnational careers. Then we finally decided our action plan like joining in international programs, participating in foreign exchange programs and volunteering abroad.
- I found that my possibilities are not limited and I can freely create my options for the future. Sometimes gaining something means losing another. This seminar deeply influenced on my career development. In communication with the group members as a group leader, I tried to find the ways to improve the opinions of the others after many twists and turns. I felt it was difficult to organize the sessions but I made the effort. Time management was the key to the goal.
- My action plan is to find my identity which leads to independence by agency and capability approach that I can get by transnational careers. It is important to keep my identity for three reasons. First, knowing the sense of value of working. Second, knowing my strengths and weaknesses. Third, having aims to live in diverse societies.
- I found that the world career is a broad concept and each person should create it individually. Also, I realized that possibilities for my future career have no limitations and there are many things that I can do during my university days. To realize my dream, I would like to find the opportunities to interact with foreigners positively for my future career.
- After I learned about circular migration and transnational career, my interest towards overseas expanded much more than before. I want to study abroad in the near future. This must change my perspective.
- Making presentation was very hard because we had 11 members and what we want to tell was quite different from each other. However, we were able to put our ideas in one presentation. That was a though way but we could accomplish our successful goal.

分科会 E

Dreams, Skills and Jobs & Well-being

Bernadett Kiss

Lecturer, Lund University, Sweden

Profile:

My career has followed a winding trail across a variety of landscapes, countries, disciplines and professions. While the destination has not always been clear, certain interests and values have carved my path and given me plenty of life experience. In the past 20 years, I have worked in different multicultural environments with a variety of actors in the field of communication, human resources and environmental project management. Today I am an environmental researcher, and, who knows what tomorrow brings.

Finding your 'life call' is not always straightforward, you might require support along the way. In this session, we explore personal strengths, reflect on individual preferences and see how these can contribute to career dreams, well-being and the planet's sustainability.

Information

1. Current Work and Research Topics

I am a lecturer and researcher in environmental management and policy at the International Institute for Industrial Environmental Economics at Lund University (Sweden). As a researcher, I am interested in sustainable urban development, and more specifically how we can sustain a healthy and happy planet through having more and better-quality nature in cities. Green roofs, street trees, parks, rain gardens and city lagoons help to mitigate and adapt to climate change, enhance biodiversity and improve environmental quality, while contributing to our economic and social wellbeing. In the face of increasing environmental, economic and social pressures, cities in collaboration with a variety of urban actors, businesses, academia, NGOs and citizens are important players in transitioning toward urban sustainability. As a lecturer, I am devoted to explore together with my students how we can engage in making our daily life more sustainable.

2. Career Path

I have a strong interest in environmental and social issues and the forces inducing different types of changes in these fields. What helped me to develop this interest has been my life experience – and my adaptive and reflective nature throughout. My teenage years' curiosity yielded two very different degrees: Master of Arts in Scandinavian studies and Bachelor of Science in business management. My longing for independence in my early 20s introduced me to different jobs in the business sector. I have worked for both local and international private companies in Hungary, as an office-, communication- and human resource-manager. Later, as a human resource manager of the European Parliament in Brussels (Belgium), I was part of facilitating the accession process and the acclimatization of hundreds of new employees into the life of the European institutions. In my late 20s, I started to be interested in environmental issues, but I could not find a job without an environmental degree. Did I want to go back to school? Not really, but my growing environmental sensitivity, determination, persistence and drive for a better world guided me back to a new field of studies and to a new country. By the age of 29, there I was, with another Masters degree, this time in environmental management and policy from Lund University (Sweden). Who said that education is not important?
Education is important, but it is not everything. Identifying your preferences, knowing and using your skills, being attentive to your environment and open to opportunities are equally important. In my professional life, I consciously

created opportunities to study and work with my interest, i.e. processes of change. The strong will to deepen this interest brought me an interdisciplinary doctoral degree in environmental engineering and social sciences at the International Institute for Industrial Environmental Economics (Lund, Sweden) and plenty of international experience both in my professional and private life. As a project manager, by organizing different events and facilitating stakeholder dialogues, I work for a stronger collaboration and commitment towards sustainable urban and regional development. As a researcher, I analyze different aspects of sustainable urban development, including technology- and nature-based innovations, governance dynamics and learning processes. As a lecturer, besides sustainable cities, I have been engaged with students in developing their writing skills, research methodology and thesis works. I am doing all these with a deep engagement in both the preset goals and the people involved.

3. Main Topics for the Group Work Session

In this session, we will together explore our 'nature' through discussing our dreams, identifying skills we have and we need to attain to get closer to our dreams and investigating personal traits and preferences to see what career perspectives all these can offer. This workshop will be based on established career-coaching practices, including skill mapping, competence profile development and road planning. Participants will have the opportunity to get to know themselves better through these practices, which will be complemented with guided brainstorming, focused group discussions, individual presentations, and peer feedback sessions. "You will only get out what you put in" – my hope is that these hours spent working on yourself will bring you closer to your 'true nature' and thus provide you with a better understanding of what you can offer to society, what society can offer to you and how it all relates to sustainability.

4. Key Words

What are the key ideals and **dreams** that guide your life?
What are you deeply **afraid** of?
What does **sustainability** mean to you?

5. Reference Material

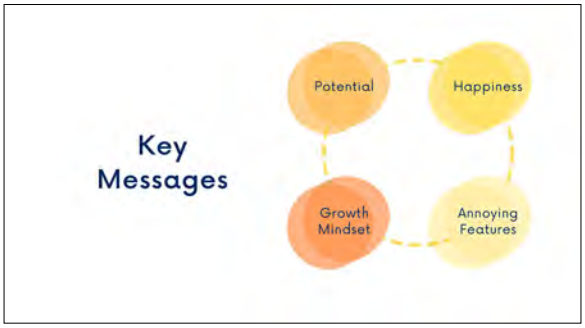
- Myers-Briggs Type Indicator:
  https://www.myersbriggs.org/my-mbti-personality-type/mbti-basics/
- Character strength survey: https://www.viacharacter.org/
- Csikszentmihalyi, M. (2002) Flow. The classic work on how to achieve happiness. London: Rider.

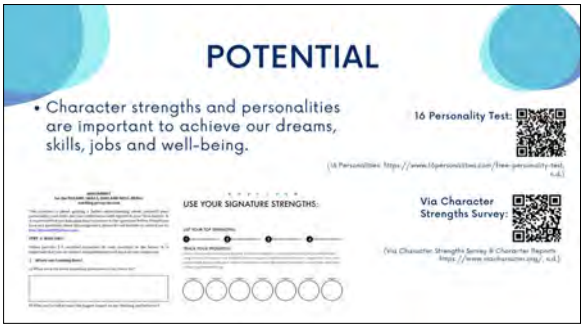
6. Reding Assignment

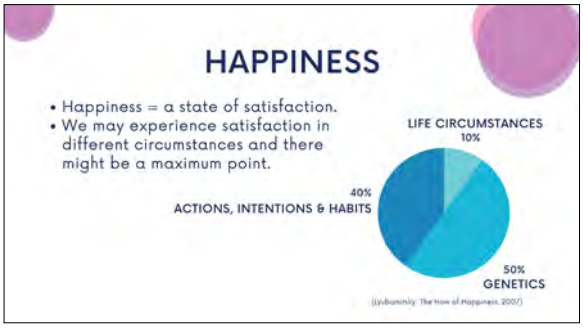
As a preparation for the session, I would like you

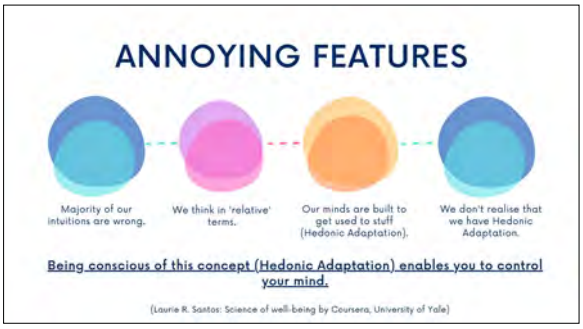
- to do a Myers-Briggs personality test:
  https://www.16personalities.com/free-personality-test
- to do a character strength test: https://www.viacharacter.org/
- to read Chapter: Happiness revisited (pages 1-22) of Csikszentmihalyi (2002)
- to read Chapter: Work as Flow (pages 143-163) of Csikszentmihalyi (2002)
- to watch a short explanation on flow: https://www.youtube.com/watch?v=8h6IMYRoCZw
- to watch Nic Mark's talk on the happy planet index:
  https://www.ted.com/talks/nic_marks_the_happy_planet_index#t-993961
- to watch Dan Gilbert's talk on happiness:
  https://www.ted.com/talks/dan_gilbert_the_surprising_science_of_happiness
- to watch Carol Dweck's talk on the power of believing that you can improve:
  https://www.ted.com/talks/carol_dweck_the_power_of_believing_that_you_can_improve
- to engage with the working material and assignments

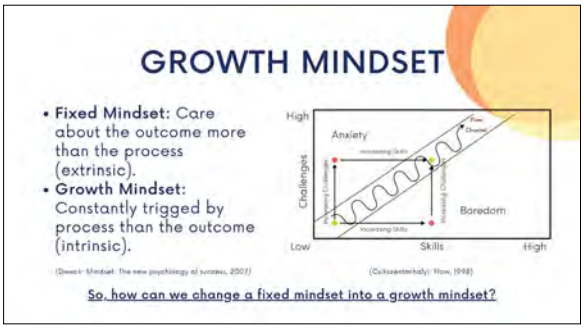
Final Presentation by Participants





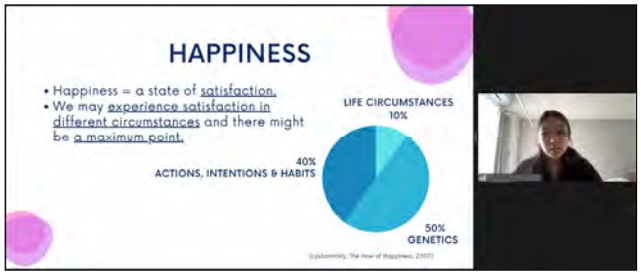






Student Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- In my group session, I learned a lot. Before taking this group session, I have not thought about my strength. I want to try to think about it from now on to develop my career.
- I could learn about myself, what happiness is and so on throughout the group session. I learned the importance of anticipating the future and take actions what I can, for example, joining volunteering, studying abroad and so on. In the group session, I was able to know the others' opinions and got new ways of thinking. This was very meaningful opportunity for me.
- I found it very good to use several kinds of diagnostic tests to understand our personal tendencies and strengths. These tests can be easily tried at any time and should be introduced to the others. I also thought that it was interesting that we have the tendency of hedonic adaptation. We would define our happiness as a state of feeling satisfied, but we cannot be satisfied forever. I learned that understanding our personality and strengths will help us to find our future career and happy life for us.
- My own happiness depends how much we act actually not just think. The worst thing is to comparing ourselves to the others' information on SNS.
- I learned that we should not be afraid of failure. I also learned that we could find our own happiness. I haven't found my dreams yet,
- When we want to aim higher, this implies that we are not satisfied with the present. If we gave up aiming higher, we were likely to regret as a result. As long as aiming higher, there will be a chance to reach certain stages where we will be satisfied with our lives.
- My concern is how we can overcome our weakness. It is quite easy to try to improve our good points or the things we are good at, as we can keep practicing doing them for fun. On the other hand, regarding our weak points, it is difficult for me to even try it. I wanted to know the others' idea or attempts to overcome their weak points and we could exchange our ideas. That was good opportunity for me.
- Although happiness is different for each person and it is a little bit difficult to define what the happiness is for me, I could get the way how we can create our career full of happiness. My action plan to develop my career is to reflect what I've done so far and to clarify what I want to do the most or which field I want to contribute to. I would also like to get my mindset and to try something for my future career.



分科会Ｆ

Human Security Paradigm: Partnership in Non-traditional Security Issues

Sugit ARJON, Ph.D.

Assistant Professor, School of International Studies, Utsunomiya University
Former Visiting Researcher, the Institute of International Relations and Area Studies (IIRAS), Ritsumeikan University

Profile:
Sugit Arjon teaches global governance and global civil society at Utsunomiya University. Sugit specializes in democratization, state violence, security, political dynasty, and civil-military relations in the Southeast Asia region and specifically in Indonesia. His doctoral research focuses on the political dynamics in the post-conflict territory. Before working in academia, he has professional experience in high-level policymaking with the Minister of Education and Culture of Indonesia and the Executive Office of the President of the Republic of Indonesia.

Information

1. Current Work and Research Topics

My class this semester introduces students to the structures, practices, norms and actors of global governance. The course examines the origins, development and challenges of global governance. Global governance is also a study filled with bilateral and multilateral agreements, apparent contradictions, unstable dynamics, and unresolved questions. Thus, the class also examines critical and specific problems such as the world's economic, political, cultural, and security dimensions.

Next semester, I will have another class which studies how social movements generate political change through several mediums such as organization, communication and mobilization. The course focuses on an introduction to civil society, social activities and ideologies. This class focuses on why specific social movements emerged and how they impact security, national ideology, policies, culture, and identity.

My current research focuses on the democratic regression in Southeast Asia and its implication for Japan. Previous studies have highlighted that democratic regression has been happening globally and impacted many nations during and post-Trump era. The decline of democracy on a global level also influences the ASEAN members. Democratic regression in Southeast Asia puts the economic system at risk and produces terrible economic outcomes. This research asks the following questions: Does democratic regression in ASEAN nations have any notable impacts on Japan? Between authoritarian and democratic leaderships in ASEAN, which leadership style best suits Japan's political and economic interests? To answer these questions, I use similar metrics introduced by Kinderman (2021), who focuses on authoritarian capitalism and its impact on business in Europe. He draws on indicators measuring civil and political liberties and corruption on the one hand and the ease of doing business, global competitiveness, and innovation on the other hand. However, my model is not limited to such metrics, and I will also look at how the ASEAN countries' bilateral and multilateral relations with Japan in business and politics.

2. Career Path

Before working as an Assistant Professor in Global Governance at the School of International Studies, Utsunomiya University, I was a visiting researcher at the Institute of International Relations, and Area Studies (IIRAS) at Ritsumeikan University focuses on Conflict and Peacebuilding in Southeast Asia. At the same time, I worked as a Tutor at the Faculty of Global Liberal Arts, Ritsumeikan University. I was also a research assistant at the Asia-Japan Institute (AJI), which focuses on Human Security in Southeast Asia in the Era of the ASEAN Community.
Before fully committed to academia, I had a hands-on experience in public policy when I worked at the Minister of Education and Culture office and the Executive Office of the President of Indonesia.
My responsibilities in the Minister of Education and Culture office included but were not limited to monitoring the implementation of the 2013 national curriculum, organizing workshops and discussions to review the performance of the 2013 national curriculum, assisting in organizing national training for curriculum instructors, conducting desk research on educational policy comparison of other countries, and develop a road map for the implementation of curriculum diversification.
In the Executive Office of the President, I experienced a first-hand process of evidence-based and data-driven public policy is essential in a national scope. Although it often competes with politically driven decision making. My office managed and was responsible for ensuring the implementation of strategic initiatives, both international and national, including priority activities which are of concern to the President. Some of the strategic initiatives that I worked on were the Post-2015 Development Agenda (Sustainable Development Goals / SDGs), Open Government Partnership (OGP) and Open Government Indonesia (OGI), and other multilateral negotiations related to progress in achieving national priority programs, and other strategic initiatives.
After graduated from Australia, I was also a teacher for elementary school students in a remote area of Indonesia. I also did an internship at the Indonesian Embassy in Canberra under the Political Attaché’s supervision.

3. Outline of Work Group Session

This course aims to introduce the basic concept of human security and advance students' knowledge about collaborations and partnerships in non-traditional security issues. Students are expected to be familiar with the idea of non-traditional security, key actors, and current practice. Upon completing this course, students are expected to be familiar with the threats to human security. Grasping the knowledge in human security will help students understand what skills are needed in the field of human security. Students will understand career development in non-traditional security career paths in the process.

4. Key Words

- Partnership
- Diplomacy
- Security
- Communication
- Bilateral

5. List of Reference Material

Bae, S., & Diaz, D. 2018, The Wax and Wane of Human Security Norms: Revisiting the Cases of Japan and Canada, Journal of Human Security Studies, Vol. 7 No. 2, 2018, pp.58-78.

Axworthy, L. 2001, Human Security and Global Governance: Putting People First, Global Governance, Vol. 7, 2001, oo.19-23.

Black, D. 2014, Civil Society and the Promotion of Human Security: Achievements, Limits and Prospects, Asian Journal of Peacebuilding, Vol. 2, No. 2, pp.169-184.

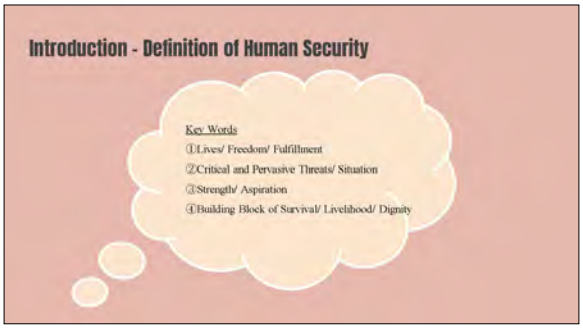
6. Reading Assignment for the Participants

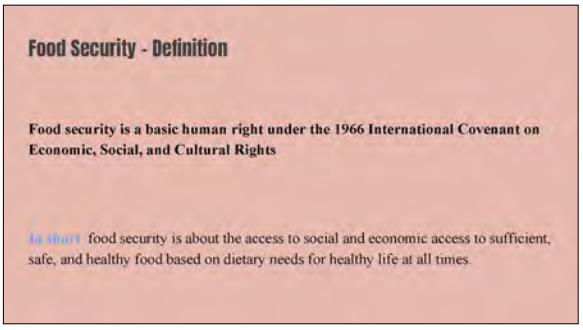
Please read these websites and identify the biggest human security threats to your current life.

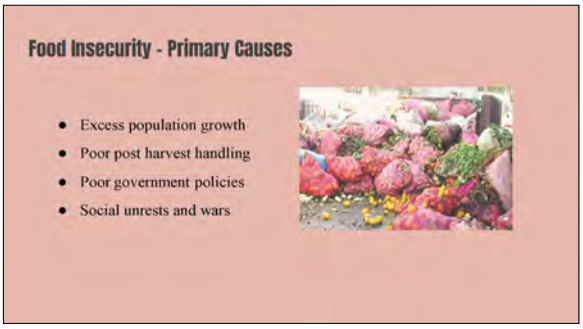
- Describe human security threats in your country
- What kind of career do you think in the field of human security?
- What type of skills are needed in the field of human security?
- https://www.iidh.ed.cr/multic/default_12.aspx?contenidoid=ea75e2b1-9265-4296-9d8c-3391de83fb42&Portal=IIDHSeguridadEN

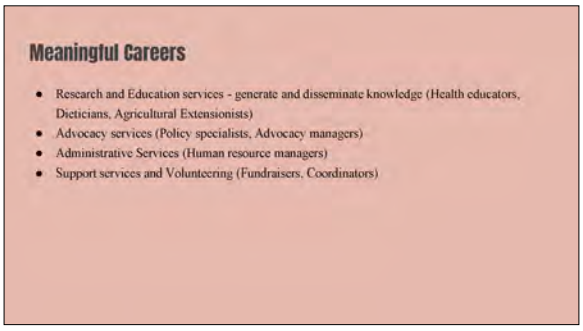
- https://www.jica.go.jp/jica-ri/publication/other/jrft3q0000002aps-att/Chapter_10_Working_for_Human_Security_JICAs_Experience.pdf
- https://www.yalejournal.org/publications/putting-people-first-the-growing-influence-of-human-security

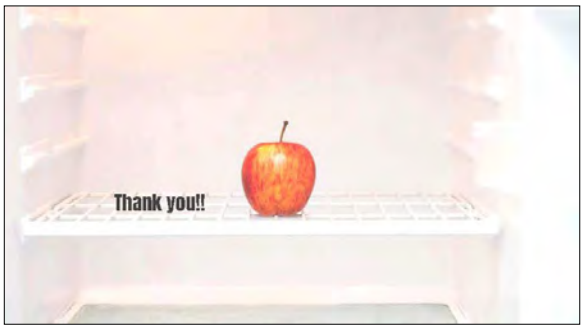
Final Presentation by Participants











Student Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- On the last day, we managed a successful presentation. Our group had fewer members than the other groups, but this allowed us to research and do a deep dive into food security. The reason the success is our "collaboration" and converting "disadvantage" into "advantage" in our group, like the lack of the number of people. Although I do not have a definite future goal yet, I learned that getting money is not the only goal. I want to experience little by little something that will help other people in my new career.
- I learned that when we think about our future careers, it is important to plan appropriately, and step-by-step. I also realized how important it is to exchange opinions throughout the sessions. Regarding my action plan to develop my future career, the first step is to think realistically. By doing so, we will gradually see what learning and skills we need. I believe that this will make it easier to prepare for our future career.
- The report presented in the session establishes the following essential characteristics; Human security is a universal concern. The degree of the threats may vary from one place to another, but they are real. Human security is easier to ensure through early prevention than late interaction.
- I learned a lot throughout the sessions. First, I could study the theme of our work group, human security. I have heard of this before, but I had no specific idea of this theme. We could deepen our way of thinking with the group members and think about our food security action plan. Secondly, I could learn how to communicate with the other members and cooperate with them. I was a little bit nervous and was not able to understand all the words at first, but our group members and teacher helped and encouraged me a lot. That was a great help for me. I learned that it is important to communicate actively and not be afraid of making failure.
- Food security is an important issue and we should deepen our insight to this. In Japan, only a few people think about food security nevertheless the other countries face hunger and food shortages seriously. What can we do about this problem? How can we solve this? We should think about this issue deeply. We were able to get an insight on this topic joining the session.

5. パネルトーク

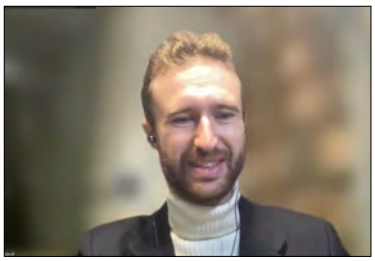
THEME: Career Development in the Age of Globalization

Panel discussion aims to provide an opportunity for the participants who pursue international careers in the future, to discuss the specific problems and the solutions and to present the achievements through the panelists' career paths and experiences. Panelists were asked to present "3 important keywords" related to the theme and explain the reasons why they were important and gave some career advice to the participants.

MC: **Shunsuke Kurihara**　Associate Professor, School of International Studies, Utsunomiya University

PANELIST: Gregory Wolf Teaching Manager, Teaching Artist, Songwriter Youth Theatre Japan	1. Code-switch 2. Exposure 3. "Keep it Real"

What did the participants learn from the panelist?



- Code-switch is important to communicate with various people.
- I've not thought about code-switch when I communicate with others. Unconsciously I change how to speak or what kind of words I use in communication with others.
- It is important to challenge yourself and try new things. That is so hard for me, but I would like to try something new.
- His work at YTJ is fascinating and challenging. I am interested in engaging in such activities abroad. "Keep it Real" – this is the most impressive word for me.

PANELIST: Takeshi Komino General Secretary of CWS Japan, CWS Japan	1. Ownership 2. Empathy 3. Partnership

What did the participants learn from the panelist?

- Empathy is very important. If we cannot agree with someone, we should think why they are thinking like that. This will be a good way of collaborating with people.
- I experienced the East Japan earthquake in 2011 and I recognized how important it is preparing for disasters which will happen in the future.
- I learned that empathy is not to agree with others, but to think about what they are thinking and feeling.
- Partnership – Interacting with people is essential to achieve our goals.

PANELIST: Tatsuhiro Ohkubo Professor, School of Agriculture, Utsunomiya University	1. Curiosity 2. Generosity 3. Leap

What did the participants learn from the panelist?

- Curiosity is the most important thing to study deeply and direct projects. I would like to find something that I want to explore deeply like Dr. Ohkubo.
- I agree with the idea that regional issues should be solved in regions. One of the advantages of small organizations is to be able to deal with the issues more directly and this will meet the people's expectations.

PANELIST: Ana Sueyoshi
Associate Professor,
School of International Studies, Utsunomiya University

1. Chance
2. Health
3. Challenge

What did the participants learn from the panelist?

- I was impressed by Prof. Sueyoshi's words, "Once you missed, the chance will never come again. Don't be afraid of failures." I always hesitate to start something, but I learned that challenge makes me learn a lot. If we don't take any risks, we cannot grow up anymore. I want to challenge everything that I want to do.
- I was impressed by the comments that management of mental and physical health is crucial to the success in our future career.

PANELIST: Bernadett Kiss
Lecturer,
Lund University, Sweden

1. SUSTAINABILITY
2. AWARENESS
3. REFLEXIVITY

What did the participants learn from the panelist?

- It is important to think about what "sustainability" means to you. Environment, against social crisis, or economic one? I think that environmental sustainability is the most important thing for our future.
- To achieve goals, it is very important to know about myself. I've heard of some methods of career-coaching tests but I've never tried them.
- Sustainability – to think what we can do. Awareness – to be careful about what we are doing to face with. Reflexibility – to deepen our understanding and think creatively.

PANELIST: Sugit Arjon
Assistant Professor, School of International Studies,
Utsunomiya University

1. CHANGE
2. SHORTAGE
3. COLLABORATION

What did the participants learn from the panelist?

- Change is important. Everyone has chances to make changes in his life and some of those changes might lead to success.
- I don't know much about global governance, but it is very crucial in working at international situations. Human security is an important aspect when we live in international societies. Critical examination is not an easy way, but I would like to gain this skill throughout the seminar.
- There are various shortages of resources, funds, foods, etc. How can we cope with these uncomfortable situations? Now, I cannot do anything on my own. I have to find my way of collaboration from now on.
- I understand that jumping into new environments will make our skills better, but I wonder how a successful person get over or manage his/her fear or weakness in changing the environment.
- I cannot do anything on my own at the moment. I don't have any specific idea of how to collaborate. I have to find my own way from now on.

1．参加者名簿

.

国際キャリア教育

	氏名	大学等	学年
1	阿久津　百香	宇都宮大学国際学部	2 年
2	阿部　美優	宇都宮大学国際学部	2 年
3	池田　小春	宇都宮大学国際学部	2 年
4	今井　杏	宇都宮大学国際学部	3 年
5	小熊　華	宇都宮大学国際学部	2 年
6	上山　樂々	宇都宮大学国際学部	1 年
7	加山　麗	宇都宮大学国際学部	2 年
8	菊地　朝妃	宇都宮大学国際学部	2 年
9	木村　卯月	宇都宮大学国際学部	4 年
10	清本　まゆみ	宇都宮大学国際学部	2 年
11	草野　羽音	宇都宮大学国際学部	2 年
12	草山　彩夏	宇都宮大学国際学部	2 年
13	毛塚　麻由美	宇都宮大学国際学部	4 年
14	後藤　捺美	宇都宮大学国際学部	1 年
15	小濱　瑠七	宇都宮大学国際学部	2 年
16	小林　可奈	宇都宮大学国際学部	2 年
17	小向　ふうか	宇都宮大学国際学部	1 年
18	酒巻　大雅	宇都宮大学国際学部	2 年
19	佐藤　夏美	宇都宮大学国際学部	1 年
20	佐藤　野乃果	宇都宮大学国際学部	1 年
21	佐藤　美蘭	宇都宮大学国際学部	1 年
22	下山　愛叶	宇都宮大学国際学部	1 年
23	鈴木　美波	宇都宮大学国際学部	2 年
24	鈴木　望夢	宇都宮大学国際学部	1 年
25	関　日奈乃	宇都宮大学国際学部	1 年
26	髙木　亜理沙	金沢大学国際学類	1 年
27	高橋　周子	宇都宮大学国際学部	1 年
28	高橋　愛	宇都宮大学国際学部	1 年
29	髙橋　世羽	宇都宮大学国際学部	1 年
30	髙橋　真心	宇都宮大学国際学部	1 年
31	田口　聖生	宇都宮大学国際学部	2 年
32	舘　真央	宇都宮大学国際学部	1 年
33	玉木　柊馬	宇都宮大学国際学部	2 年
34	千葉　成南美	宇都宮大学国際学部	1 年
35	弦巻　百華	宇都宮大学国際学部	1 年

	氏名	大学等	学年
36	苫米地　美空	宇都宮大学国際学部	1 年
37	中新井　円	宇都宮大学国際学部	2 年
38	贄川　光	宇都宮大学国際学部	3 年
39	根本 愛梨	宇都宮大学国際学部	1 年
40	蓮見　詩歩	宇都宮大学国際学部	3 年
41	畠沢　千穂	宇都宮大学国際学部	1 年
42	人見 俊輝	宇都宮大学国際学部	2 年
43	伏本　遥	宇都宮大学工学部	2 年
44	藤原　光	宇都宮大学国際学部	1 年
45	古澤　菜摘	宇都宮大学国際学部	2 年
46	別府　摩莉奈	宇都宮大学共同教育学部	2 年
47	本間　そら	宇都宮大学国際学部	2 年
48	本間　菜々子	宇都宮大学国際学部	2 年
49	前島　美飛	宇都宮大学地域デザイン科学部	1 年
50	松瀬　結月	宇都宮大学国際学部	2 年
51	松本　尚	宇都宮大学国際学部	2 年
52	水野　七海	金沢大学国際学類	4 年
53	山崎　茜	宇都宮大学国際学部	2 年
54	山城　美宇	宇都宮大学国際学部	2 年
55	矢村　実咲	宇都宮大学国際学部	1 年
56	横井　春香	宇都宮大学国際学部	1 年
57	吉池　百合	宇都宮大学国際学部	1 年

参加者内訳	合計 57 名
宇都宮大学	55 名
金沢大学	2 名

International Career Seminar

	氏名	大学等	学年
1	阿久津　百香	宇都宮大学国際学部	2年
2	阿部　美優	宇都宮大学国際学部	2年
3	粟野　晴登	宇都宮大学工学部	3年
4	池田　小春	宇都宮大学国際学部	2年
5	伊藤　寧々	宇都宮大学国際学部	2年
6	猪爪　理名	宇都宮大学国際学部	2年
7	今井　杏	宇都宮大学国際学部	3年
8	林　翰潔	宇都宮大学国際学部	2年
9	宇野　すみれ	宇都宮大学国際学部	2年
10	小熊　華	宇都宮大学国際学部	2年
11	小山　希美	宇都宮大学国際学部	3年
12	加藤　秀都	宇都宮大学農学部	2年
13	上山　樂々	宇都宮大学国際学部	1年
14	菊地　暖	宇都宮大学国際学部	1年
15	木村　卯月	宇都宮大学国際学部	4年
16	木村　美愛	宇都宮大学国際学部	3年
17	清本　まゆみ	宇都宮大学国際学部	2年
18	葛野　美明	宇都宮大学国際学部	2年
19	熊倉　由樹	宇都宮大学農学部	2年
20	毛塚　麻由美	宇都宮大学国際学部	4年
21	小濱　瑠七	宇都宮大学国際学部	2年
22	佐々木　舞緩	宇都宮大学国際学部	2年
23	佐藤　野乃果	宇都宮大学国際学部	1年
24	下山　愛叶	宇都宮大学国際学部	1年
25	鈴木　舞花	宇都宮大学国際学部	2年
26	関　日奈乃	宇都宮大学国際学部	1年
27	高瀬　弥依	宇都宮大学国際学部	2年
28	多田　奈津那	宇都宮大学国際学部	2年
29	田中　愛結実	宇都宮大学国際学部	2年
30	DANO JAEL FUENTES	宇都宮大学国際学部	3年
31	中西　朝香	宇都宮大学国際学部	3年
32	梨田　里羽	宇都宮大学国際学部	2年
33	贄川　光	宇都宮大学国際学部	3年
34	BAI RUI	宇都宮大学国際学部	3年
35	長谷川　実愛	宇都宮大学国際学部	2年

	氏名	大学等	学年
36	伏本　遥	宇都宮大学工学部	2年
37	藤原　和輝	宇都宮大学国際学部	3年
38	藤原　光	宇都宮大学国際学部	1年
39	牧野　楓南	宇都宮大学国際学部	2年
40	三浦　優希	宇都宮大学国際学部	2年
41	水野　碧衣	宇都宮大学国際学部	1年
42	御厩　慧	宇都宮大学国際学部	2年
43	山家　瞳	宇都宮大学国際学部	2年
44	楊　雪寧	宇都宮大学国際学部	1年
45	吉田　理花	宇都宮大学国際学部	2年
46	渡邉　慧	宇都宮大学国際学部	4年
47	ビナーディ　ペハンサ	茨城県立石岡第二高等学校	
48	髙橋　瑠海	東京都立国際高等高校	
49	若林　仁瑛	栃木県立佐野高等学校	
50	Sneha A/P Visvanathan	サラワク大学(マレーシア)	
51	Kimm Victoria Jaffry	サラワク大学(マレーシア)	
52	Wellhelmina Anak Willenton	サラワク大学(マレーシア)	
53	Nurul Aiman Abet	サラワク大学(マレーシア)	
54	Faith Simba Anak Ian Lang	サラワク大学(マレーシア)	
55	Anisa Paya Jose	サラワク大学(マレーシア)	
56	ALMUNAH ABD MUTALIB	サラワク大学(マレーシア)	
57	NUR HAZIAH BINTI MUSA	サラワク大学(マレーシア)	
58	H.H. Pradeep Nimantha	ペラデニヤ大学(スリランカ)	
59	W.M. Yohan Fernando	ペラデニヤ大学(スリランカ)	
60	R.S.Wijerathna	ペラデニヤ大学(スリランカ)	
61	H.G. Dushmantha Madushanka	ペラデニヤ大学(スリランカ)	

参加者内訳	合計 61 名
宇都宮大学	46 名
サラワク大学(マレーシア)	8 名
ペラデニヤ大学(スリランカ)	4 名
高校生	3 名

2. 参加者全体コメント

国際キャリア教育

参加の感想（コメントは原文のまま記載しています。）

- 少々大変な３日間であったが参加して良かったというのが率直な感想である。このセミナーに参加することさえ躊躇していた私であったが、勇気を出して一歩踏み出してみるという行動で、自分のキャリア形成に関する姿勢が明らかに変化したと思う。分科会のメンバーとも、時間を共にするにつれ、真剣に悩みや考えを共有するようになり、アドバイスを送りあうようになった。
- 自分の将来や今後の大学生活でどう過ごすのかに向き合い、考えを深める良い機会となった。多様な意見に触れ、自分だったらどうするのか、どのような行動を起こすのか考えることができた。他学部や他学年の学生と意見を交わし合える環境がとても良いと感じた。これからの学生生活の中で、様々な機会をチャンスと捉えそれを活かし自分で可能性を広げていくことが大切であると感じた。変わりゆく時代の中で「自分はどうなりたいか」を仮置きし、逆算して行動を継続する重要性を学んだ。学内だけでなく学外の活動にも積極的にチャレンジしていきたい。
- 他の分科会の発表を聞き、「国際キャリア」という名のセミナーであっても、日々の生活の中で目の向けられる点の多さに気づいた。
- コロナ禍で対面授業であってもグループワークが減少していたので、久々にグループワークをし、様々な人々の意見を聞くことができ、また、就活や働くことに対する意見をきくことができ、興味深かった。オンライン上での開催の方が初対面の人と話すハードルが個人的に低かったので、これからもオンライン開催にしてほしい。また実際に転職の経験のある方の話を聞いたことがなかったので、とても参考になった。様々な経験をお持ちの先生方をこれからも講師として招いていただきたい。
- 他の分科会の内容についても、発表や講師の先生の話を聞くことができたので、とても刺激になりました。また、分科会において進行役を務めましたが、スムーズにできた部分もあったもののもう少し円滑に進められるようにしたいという改善点も見つかったので、今後もこのような機会があれば、積極的に挑戦したい。
- セミナーに参加する前は、働くことにマイナスなイメージばかりあり、働きたくないという気持ちが強かったが、セミナーで様々な意見や考えに触れ、働くことに前向きなイメージも持てるようになった。
- ３日間中身の濃い時間を過ごすことができた。学年を超えて一つの課題に向き合い、短時間で発表まで仕上げたことは非常に良い経験となった。このような機会は多くはないので、また次回このような機会に出会ったら積極的に参加していきたい。
- ３日間のセミナーを通して、実際に社会で活躍されている方々から経験談を踏まえたためになるお話を聞くことができました。活動すること、惰性で続けないこと、失敗を恐れないこと、人との繋がりを大切にすること、変化を楽しむことなどを学び、貴重な経験となりました。分科会では、違いを強みに変えるコミュニケーションについて学んだが、来年違う先生からも学びたいと思うほど得るものが多く、自分のキャリア形成において良いきっかけになったと実感しています。
- この３日間を通して、もっと学びたい、今後のキャリアについてよく考えようと思うようになりました。どの時間帯も自分のためになるもので、参加できて良かったと心から思います。受講前に抱いていたもやもやは晴れ、言語化できるようになったのに加えて、自分が今何をしなければならないのか気づくことができました。ぜひ多くの人にこのセミナーを受けてもらいたいと思いました。
- キャリアとは、今から明確に考えて．一本道のようなものを作成しなければならないと考えていたのですが、それはほぼ間違った考えだと気づくことができました。自分の考えや世界の状況は変わり続けるので、その時々においてリセット&リニューアルしていかなげればならないし．自分の過去、現在、未来を分析して自分を常に知ろうとしなければならないと学んだ。
- 将来の夢は未定であるがまずは行動することから始めようと思う。自分は留学生や地域の人々と繋がれる場を求めていて、人脈を広げ展開していくことが課題である。知人に空き家で事業をやっている方がいるためこの縁を大切に今後に繋げたいと考えた。また将来のキャリア形成は、まず地域問題に目を

向けそこから身分のやるべきことを見出したいと考えている。まずは留学生との繋がり、地域の方々との繋がりを深め、コミュニケーションを通し今後の行動へ繋げようと思う。

- ３日間を通して、自分のキャリア形成に重要なことを学ぶことができたと感じている。個人的には今まで受けてきた大学の講義の中で、一番ためになりまた楽しむことが出来、非常に良い経験になったと思う。もっといろいろなことを学びたい、吸収したいという気持ちもあったので、研修期間がもっと長くてもよいとも感じた。
- キャリアと聞くと将来図についてとても悩むイメージだが、沢山の意見、講演を聞いて自分なりの出発点が見えた機会だった。参加した分科会の内容も国際協力と深く複雑な分野だが、それ以上に自分らしさに出会えたことの嬉しさや楽しさが勝る３日間だった。
- 非常にためになった３日間だった。とりあえずの気持ちで参加したが、３日間様々なことを学ぶことができ楽しかったと話している参加者も多く、ぜひ多くの人に参加して欲しいと思う。外部講師の方のお話を聞ける機会はなかなか無く、分野に特化した話も非常に貴重であるため、そういった点からも多くの人におすすめしたい。
- 将来何をしたいかということを決めておくことも重要だが、そのために今何をすべきかということを情報収集して具体的な行動計画を立ててみようと思った。自分の興味関心、そしてそれにどのように関わっていきたいかについて、今までを振り返って、また、アンテナを高くはって考えたいと思う。
- とても有意義な研修でした。国際学部だけでなく、工学部、教育学部、他大学から参加もいたため、様々な視点からの議論が交わされました。
- このセミナーを通して今の自分を認めることの大切さ、チャレンジすることの大切さ、ポジティブに考えることの大切さ、相互作用について学ぶことできました。自分を見つめなおすことで見つかる価値観や強みの捉えかたなど多角的に物事を捉えることの大切さを改めて感じました。
- 教育学部が知る教育現場と国際学部が見る教育現場や国際的な関わりから何ができるか考える機会を得られた。他学部ならではの視点として、「教育」の目線や「特別支援」の目線から伝える際に、伝え方について考えきちんと伝えることができた。限られた時間かつ大人数であるため自分の意見を伝えることは難しかったが、相手からのフィードバックも貰えるようになり、人に伝える自信がついた。
- グループワークが多く、頭もフル回転の非常に濃い３日間だった。先輩からリーダーシップのとり方も学べ、スライドの構成や効果的な発表の仕方も学べた。多文化共生ついて考えを広げることができ、新たな視点を手に入れることもできた。自分のキャリア形成の第１歩になった気がする。参加して良かったと心から思える。

International Career Seminar

Participants Comments (Comments below are taken directly from students' workbooks.)

- I learned how to create a new idea and how to discuss in English. Communicating in English is a little difficult for me, but I enjoyed talking and exchanging ideas with my group members.
- I was interested in the lecturers' career paths. As an undergraduate student, I often think about my future career after graduation. They helped me think about my future job and goals more deeply.
- I found that more experience is needed rather than just staying here and studying. I need to see, know and touch other cultures by myself and I need to find what I want to do for them. Without these experiences, it is difficult to think about my future career. I want to join volunteering and work as an intern not only in Japan but also in foreign countries. I made up my mind to study abroad, as well.
- Firstly, I think having passion is very important whatever I do. I haven't had anything that I want to do, but, when I find something I want to do, I never forget having passion!
- I am not sure about my future career but I am interested in education of foreign children in Japan. So, I want to think about a specific career based on this. Group A planned an event for foreigners living in Japan. Based on this plan, I would like to study and research the types and numbers of foreigners in Japan and make a concrete study.
- I am very satisfied with this seminar. On the first day, I was very nervous, all the sessions were done in English, but on the final day, my way of thinking was changed: Even if we are not good at English, we can try and do everything. So, I want to say to the following participants, "Don't be afraid of using English. This seminar is enjoyable and meaningful. ICS helps us to finding our future careers!"
- I thought all the words that the lecturers and the professors said at ICS was the words that we need to live our lives.
- I learned a lot of important things during this seminar. Here I mention two things. First, learning is to have ownership for our global issues. I think it is the most important thing for my career. We have many different problems, all of which are related in some ways to my career. Therefore, I have to have ownership for such problems and think deeply. Second, the disaster-risk reduction is necessary for all the professions. No matter where I am, there are risks of disasters. I have to prepare for disasters no matter which profession I choose to pursue.
- The panels gave the common topics about positive thinking. To think by myself and to ask myself, these are good ways to design our future career. These things will be very important in job hunting next year!
- Most of the lecturers mentioned about health, challenge and global issues. I think they are very important key words to develop my career.
- My future goal is to work with people abroad. I have to study English much harder. I realized my listening skill was not enough. I'll try to improve it.
- Regarding my future goals throughout the seminar, I want to join an internship program first. I am interested in airline companies. I'll try to get information on it on their website and join the internship.
- I learned how to achieve my future goals and how to improve my career. I need to have a clear image of them and take actions for them. I understood that this is very important for my future career throughout the seminar. I would like to work in international fields and I will think what is the meaning of working in international fields.
- I was able to think about my career and future goals deeply. I want to work in a field related to education. To achieve my future goals, I have to learn English much harder and I have to study teaching skills for it.
- I learned that career is not only job hunting. We have to take into consideration our satisfaction, happiness when we think about our future career. Self-analysis presented by Group E was interesting for me. Knowing myself leads to my comfortable and successful career.
- I learned "how to think" about my career. What's the career in the first place? What should I do? What do I want to do? Also, I considered how I can make use of what I have experienced so far. Specific contents, like human security topics, I discovered that even in an international context, there are things that individuals can contribute.
- I'd like to become a person who leads DX in Japan with business skills and much knowledge about technologies. This seminar was a great opportunity to give a thought what is important for building a "career," and helped me broaden my future vision. My future goal didn't change. I'm going to walk on a road that leads to business and technologies.

国際キャリア実習

新型コロナウイルス感染症の流行により海外渡航を伴う実習については実施を見合わせていましたが、令和４年度春期より募集を再開しました。本報告書には、実施要領、実習先概要のみ掲載いたします。

1．令和４年度春期「国際キャリア実習」実施要項

1．　趣旨・目的

① 趣旨：　本実習は、グローバルマインドを養う「グローバル人材」の育成のために行われる国際学部の「国際キャリア教育プログラム」の一環として行われるものです。「国際キャリア教育プログラム」では「国際ビジネス」、「国際協力・国際貢献」、「多文化共生と日本」、「異文化理解・コミュニケーション」の４つのテーマを掲げていますが、本実習では、特に「国際協力・国際貢献」や「異文化理解・コミュニケーション」の分野で活躍することを目指して、海外のＮＧＯや公的機関でインターンとして実習経験を積み、実務能力を高めます。

② 目的：　本実習は、「国際キャリア教育プログラム」の次の３つの目的を達成させるために、現場体験、実習経験を積み、実務能力、企画力とコミュニケーション力を高めます。さらに、自分の関心分野や専門性をより明確にします。

- 「働くとは何か」について考える。
  (Grasp the image of "working in society with motivation.")
- 自分と地域社会や世界とのつながりを考える。
  (Provide opportunities to think about your roles in local and global societies.)
- 主体的に関わりたい問題や分野を見つけ、今後の学びの動機を考える。
  (Find motivation to actively pursue your career.)

2．　実施時期・期間、募集人数

① 時　　期：令和５年２月～3 月
② 期　　間：約 2～6 週間(実習先による)
③ 実習時間：80 時間以上(実習先による)
④ 実 習 日：原則、土日を除く実質 10 日間（1 日 8 時間)。なお、実習先の活動状況により、土日も勤務する場合がある。
⑤ 募集人数：３名程度

3．　実習先団体

① 実習先団体は、南アジア、東南アジアおよびアフリカで国際協力活動を実施している政府機関や NGO。詳細は、「別紙」の受入団体一覧を参照のこと。
② 実習先団体に追加・変更・中止が生じた場合は、国際学部「国際キャリア教育プログラム」の HP（http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/activity/index.html）等で通知する。
③ 実習内容は、場合によっては、変更されることがあるので、事前に実習先に確認すること。
④ 実習先団体のやむを得ない事情、または実習国の政治・治安情勢の悪化や大規模な自然災害の勃発、感染症の発生等により、実習国の変更、または実習を中止し、緊急に帰国する事がある。

４．応募および参加の条件

①　応募の時点で次の全ての条件を満たしていること。

- ■　国際学部の１年生から３年生（実施期間に休学中の者は除く）であること。
- ■　心身ともに健康である者。（本学所定の健康診断を受診していること。受診していない場合は、病院等で受診（有料）し、応募時に健康診断書（有料）を必ず提出すること）
- ■　法定の予防接種（三種混合・結核・ポリオ・風疹・麻疹・日本脳炎など）を受けていること（不明な場合は「母子手帳」を持参して保健管理センター等で確認すること）。
- ■　本学指定の「学生教育研究災害傷害保険（学研災）」、「学研災付帯賠償責任保険（学研賠）」、及び、「学研災付帯課外留学保険(付帯海学)」に加入していること。
- ■　実習先団体が求める語学力を有していること。
- ■　参加動機および実習目的が明確であること。
- ■　本実習への参加について、保護者または家族から事前了解が確実に得られていること。
- ■　本「実習」実施国への渡航が可能であること（外務省の「海外危険情報」および「感染症危険情報」が「レベル１」以下であること）。

②　実習前までに次の全ての条件を満たしていること。

- ■　保健管理センターで健康に関する面談を受けていること。
- ■　国際学部及び全学で実施するオリエンテーションや事前研修（ビジネス・マナーおよび危機管理）に参加していること。
- ■　本学指定の「学研災付帯海外留学保険」に加入し、「アイラック安心サポートデスク」の安全確認アプリ『Pro Finder 』をダウンロードしていること。
- ■　「国際学部同窓会」の会員であること。（本「実習」は、国際学部同窓会から助成金を受けているため、非会員の場合は渡航前に入会すること。但し，同窓会からの助成を希望しない場合はこの限りではない。申請時にその旨申し出ること。）
- ■　接種していない法定予防接種がある場合、および実習受入団体が指定する予防接種があれば、出発までに接種（有料）していること。
- ■　外務省の「海外危険情報」および「感染症危険情報」が「レベル１」以下であること（これらの「情報」が「レベル２」以上となった場合、実習は「中止」となる）。

③　帰国後に次の全ての条件をみたすこと

- ■　必要書類（報告書や領収書など）を期日までに提出すること。
- ■　報告会での発表（プレゼンテーション）
- ■　国際学部同窓会への報告（必要に応じて）

５．　参加費

①　自己負担の原則

本「実習」への参加および現地での実習にかかる諸経費は、全額自己負担を原則とする。ただし、国際学部が渡航費の一部を助成金として支援する場合がある（詳細は次項を参照）

②　諸経費の内訳（例）:

- ■　渡航費（往復航空券代、国内交通費、海外旅行傷害保険料、旅券・査証等の取得経費）
- ■　国内事前研修費（交通費・宿泊費など　※受入団体による）
- ■　現地滞在費（宿泊費・食費・交通費など　※受入団体による）
- ■　予防接種代（※実習国による）
- ■　実習参加費（※受入団体による）
- ■　実習にかかる諸経費（地方視察時の国内交通費など　※受入団体による）

③　留意点

- 参加費の大半を占めると思われる渡航費の中でも、往復航空券代は、利用する航空会社や航空券の種別、購入時期によって大きく変動する。
- 現地滞在費についても、受入団体の事情によって、宿泊先（一般のホテル、受入先団体の宿泊施設、現地スタッフ宅でのホームステイなど）が異なるため、宿泊費や食費も大きく変動する。
- 受入団体によっては、現地でのインターンシップ参加にあたって、参加費の支払いや日本国内での事前研修が求められる場合がある。
- 日本国内または渡航先のコロナ禍の状況、あるいは、現地の治安状況や自然災害などの影響によって、実習が急きょ中止になる場合や、実習中の状況の変化により、実習を中止して、大学から緊急帰国が要請される場合がある。

６．　国際学部からの渡航費補助への申請

①　渡航費補助について

- 渡航費補助の支給額は、本「実習」の海外インターンシップに参加するための往復航空賃、空港税、空港施設使用料、旅客保安サービス料、燃油付加運賃及び発券手数料に相当する額の８割を上限として決定する。ただし、予算の都合上、８万円を上限とする場合もある。
- 往復航空賃は、日本国内の最寄りの国際空港から、実習先の最寄りの国際空港間の最も経済的かつ常識的な経路によるエコノミー･クラスの割引または格安航空券代とする。
- 渡航費補助は、実習を終了し帰国した後、航空券代等の内訳が明記された領収書（原本）の提出後から、１～２ヶ月後に大学から各自の個人口座に振り込まれる。

②　申請の手続き

- 「国際キャリア実習」の応募書類の提出をもって、渡航費補助の申請に代える。
- 最終審査に合格した時点で、渡航費補助の受給資格が得られる。

③　支給の要件

渡航費補助の支給を受けるには、次の要件をすべて満たすこと

- 必要な手続書類等の期限内の提出や事務手続の迅速な履行
- 担当教員や受入先団体との事務連絡は迅速に行うこと（特にメールへの返信）
- ただし緊急時を除き、連絡は電子メールで行うこと（LINE などの SNS は使用しない）
- 事前研修の参加（詳細は後日案内）
- 保健管理センターでの面談（母子手帳持参）
- 実習先到着時、実習開始１週間後、帰国時には担当教員に連絡すること
- 「実習日報」および「報告書」の提出（帰国後２週間以内）

④　「とちぎグローバル人材育成プログラム」について

「大学コンソーシアムとちぎ」が実施する「とちぎグローバル人材育成プログラム」（基礎コース）に応募し、支援金の受給が決定した場合には、国際学部からの渡航費補助を受給することはできない。

７．　単位認定

①　現地での 80 時間以上の実習を終了し、単位認定に必要な書類（報告書、実習日報等）を全て提出した学生は、担当教員の成績評価に応じて「国際キャリア実習」の 2 単位が認定される。

②　単位認定に必要な実習時間数（80 時間以上）を満たすように実習計画を立てること。

③　すでに「国際キャリ実習」を履修済みの学生は、再履修となり過去の成績は抹消される。

８．　応募方法

以下の応募書類を提出期限までに国際学部事務室に提出すること。

- 参加申込書
- 自己紹介・応募動機書（実習希望先団体に資料として提出する場合がある。）

- 健康診断書（今年度実施の本学の健康診断を受診している場合は不要。受診していない場合は、最寄りの病院等で健康診断を受診〔有料〕の上、診断結果を提出すること。）

９．　参加者の選考および決定

②　選考方法

参加者は、書類審査と面接より選考する。なお、応募者が多数で、審査結果が拮抗する場合は、以下の優先基準を適用する。

- 上級生を優先する。
- 「国際キャリア教育セミナー」および「International Career Seminar」の履修済者を優先する。
- その他のグローバル人材育成プログラム「Learning+1」の履修済者を優先する。
- 過去に「国際キャリア実習」または「国際インターンシップ」に参加したことのある者が再度応募する場合、選考結果が同順位の場合、初めての応募者を優先する。

②　一次審査について

- 一次審査（面接）実施日：応募書類提出後に随時実施（日時は個別に応募者に連絡）
- 審査の結果は、応募者本人に、一次審査後の一週間以内に電話又は e-mail で連絡する。
- 実習希望先団体との面接が不要な者は、最終審査の面接を免除する。

③　実習希望先団体との面接について

- 一次審査合格者のうち、実習希望先団体との面接等が必要な者は、所定の期日までに、実習希望先団体との面接等を受けるものとする（面接等にかかる経費は自己負担とする）。所定の期日までに実習希望先団体の面接等を受けなかった場合は、最終審査対象者としての資格を失う。

④　面接および結果の通知について

- 面接実施日：応募書類提出後に随時実施（日時は個別に応募者に連絡）
- 審査の結果は、応募者本人に、期日に電話又は e-mail で連絡する。
- 面接はオンラインで実施する。
- 実習希望先団体との面接が不要な者は、最終審査の面接を免除する。

１０．　その他の注意事項

- 参加決定後の自己都合による実習先の変更は、原則として認めない。
- 派遣先での実習前後の個人旅行は認めない。
- 海外渡航時や現地実習時には、危機管理や健康管理に十分留意して、事件や事故との遭遇を極力回避し、感染症を予防する努力を怠らないこと。
- 自己責任において、実習先に作業用パソコンを持参することが望ましい。
- 実習国の治安状況や健康管理に関する情報は、信頼のおける以下のサイトなどを参照しておくこと。
  外務省「海外安全ホームページ」http://www.anzen.mofa.go.jp/
  外務省「海外安全劇場」http://www.anzen.mofa.go.jp/video/index.html
  厚生労働省検疫所「FORTH：海外で健康に過ごすために」http://www.forth.go.jp/index.html

2. 令和４年度春期受入団体および実習概要一覧

	団体名	所属地（本部）	実習国・実習地	実習概要
1	**セワランカ** スリランカ最大の現地 NGO の一つ。宇大国際学部実施 JICA 草の根技術協力事業「プランテーション農園の小学校への課外活動支援」プロジェクト（UU-TEA Project）の現地パートナー組織。	スリランカ ハットン	スリランカ ハットン	プロジェクト対象学校でのモニタリングと広報補佐及び日本文化紹介

3. これまでの受入団体および実習概要一覧

	団体名	所属地（本部）	実習国・実習地	実習概要
1	**JICA スリランカ事務所** 独立行政法人国際協力機構スリランカ事務所。総合的な政府開発援助（ODA）の実施機関。	東京都 千代田区	スリランカ コロンボおよびスリランカ国内事業地	広報を中心とした事務所事務作業補助（場合によっては地方プロジェクト出張同行）
2	**NGO サルボダヤ運動本部** 農村村民の自立を目指し、有機農業の振興、母子保健衛生、マイクロクレジット等の活動を先駆的展開するアジア地域でも最も成果を挙げている NGO。	スリランカ モラトゥワ	スリランカ モラトゥワ	本部国際部事務作業補助
3	**特定非営利活動法人　ラオスのこども** ラオスの子供達の教育環境の向上を願い、日本および現地ラオスで活動を続けている国際協力 NGO（特定非営利活動法人）。	東京都 大田区	ラオス	ラオスのスタッフのアシスタント（セミナー・教材準備、図書室で子どもと遊ぶ）
4	**クラタ・ペッパー（KURATA PEPPER Co. Ltd.）** 古い歴史があり、ヨーロッパでは最高品質として有名であるカンボジアの胡椒が、内戦により農園は壊滅。その「世界一美味しい胡椒」を復活させようと、産地農家を回り、地元の人々と共に、胡椒農園を広げた胡椒農園経営・胡椒卸販売の民間企業。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	事務作業補助、選別作業、畑研修 ※農業研修は、本人が望めば男性でも女性でも OK。

	団体名	所属地 （本部）	実習国・実習地	実習概要
5	**特定非営利活動法人　ピースウィンズ・ジャパン** 紛争や災害、貧困などの脅威にさらされている人びとに対して支援活動を行う NGO。	広島県 神石高原町	スリランカ東部州 トリンコマレー県	内戦帰還民地域での復興支援活動補助
6	**特定非営利活動法人　かものはしプロジェクト** 子どもの人身売買問題の解決に取り組むことから始まった認定 NPO 法人。カンボジアの貧困層の女性を雇用しものづくりを行うコミュニティファクトリーを経営し、 現在はライフスキルのトレーニングを主軸ミッションとした活動を行う。	東京 渋谷区	カンボジア シュムリアップ	コミュニティファクトリー（工房）の来客対応、ショップのお手伝い
7	**特定非営利活動法人　アーシャ＝アジアの農民と歩む会** インドの貧しい農村において、農村の基盤となる「農」を通じて、アジアの農民の自立と持続可能な暮らしを実現し、共に生きるための事業を推進する NPO 法人。	栃木県 那須塩原市	インド・ウッタルプラデッシュ（ＵＰ）州アラハバード市および近郊	農村開発事業（有機農業・教育支援・保健衛生など）の見学・作業体験、人材育成事業（ハンディクラフト縫製・食品加工など）の見学・作業体験、有機農業組合活動（朝市での販売・日本米やキノコの販促など）の見学・作業体験、広報、総務の事務補助等
8	**パンニャサストラ大学の日本語・ビジネス研修センター** プノンペンにある私立大学の日本語・ビジネス研修センターで、宇都宮大学大学院国際学研究科博士課程を修了したサ・ソチア博士がセンター長。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	日本語教育、日本・カンボジアの文化交流活動のなどのサポート
9	**アンコールクッキー株式会社** アンコール・ワット型の手作りクッキーの店。カンボジア人の手による本物のカンボジア土産を作ることを目指して開業して以来、今やカンボジアの定番土産。	カンボジア シュムリアップ	カンボジア シュムリアップ	店舗での接客・販売、商品の企画開発、広報・マーケッティング等
10	**株式会社パデコ** 日本の開発コンサルタント企業として、国際協力機構より業務委託を受け「カンボジア国教員養成大学設立のための基盤構築プロジェクト（第 1 年次）」（2017 年 1 月～2019 年 5 月）を実施。	東京都 港区	カンボジア プノンペン	小中学校教員養成課程のカリキュラム・教材開発支援プロジェクトの職場体験。調達、広報の手伝い等。
11	**公益財団法人国際開発救援財団** 発展途上国の子どもたちのために、国際協力、援助事業、緊急援助事業、広報啓発事業を行う公益財団法人。	東京 千代田区	カンボジア プノンペン	小児外科支援、給食支援、農村開発、などのサポートを行う。

	団体名	所属地 （本部）	実習国・実習地	実習概要
12	**高野山　宿坊櫻池院** 高野山にある宿坊寺院の一つで、1100 年代に白河天皇代 4 皇子覚法親王により作られた。	和歌山県 伊都郡	和歌山県 伊都郡	宿坊での接客、部屋の準備、食事の準備等。
13	**島キャン（受入れ先ホテル、奄美島）** 離島で職業体験をしながら島おこしインターンを行う。	東京都 新宿区	奄美	離島の地域活性化を目的としたホテルでの研修。
14	**（株）アースアンドヒューマンコーポレーション** JICA 事業を受託するコンサルタント会社。	東京都 町田市	エチオピア アディスアベバ	日本人専門家の補佐的作業
15	**特定非営利活動法人　ブリッジ　エーシア　ジャパン** 子ども、青年、大人（父親・母親・お年寄り）といった各世代の人々が共に関わり合いながら主体的に地域の活動に参加し、「地域の伝統・環境の保全」と「地域経済の発展」との両立を実現させる社会の構築実現に向けて取り組んでいる認定 NPO 法人。	東京都 渋谷区	ベトナム フエ	バイオ農家支援、子どもへの環境教育支援
16	**カンボジア日本人材開発センター（CJCC）** カンボジアにおいて、JICA、日本企業などと協力して、人材育成事業、日本語教育、文化交流事業などを行う。	カンボジア プノンペン	カンボジア プノンペン	文化交流部門でイベントやスタディツアー受け入れなどのサポート
17	**合同会社シェトラトレーディング** （オンライン実習および実地実習） コンゴ民主共和国(DRC)コーヒーの輸入・販売を行う民間企業。	茨城県 取手市	茨城県取手市 および栃木県 宇都宮市	コンゴ民主共和国から輸入のコーヒー豆製品の販路開拓, 現地コーヒー農園との連携。

令和４年度　国際キャリア教育プログラム　報告書

協力者一覧

主　　催 ：　大学コンソーシアムとちぎ、宇都宮大学
後　　援 ：　宇都宮大学国際学部同窓会、(公社)栃木県経済同友会、(公財)栃木県国際交流協会、NPO 法人　宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流協会、JICA 筑波センター
協　　賛 ：　(一財)栃木県青年会館、(公財)あしぎん国際交流財団
特別協力 ：　宇都宮市創造都市研究センター

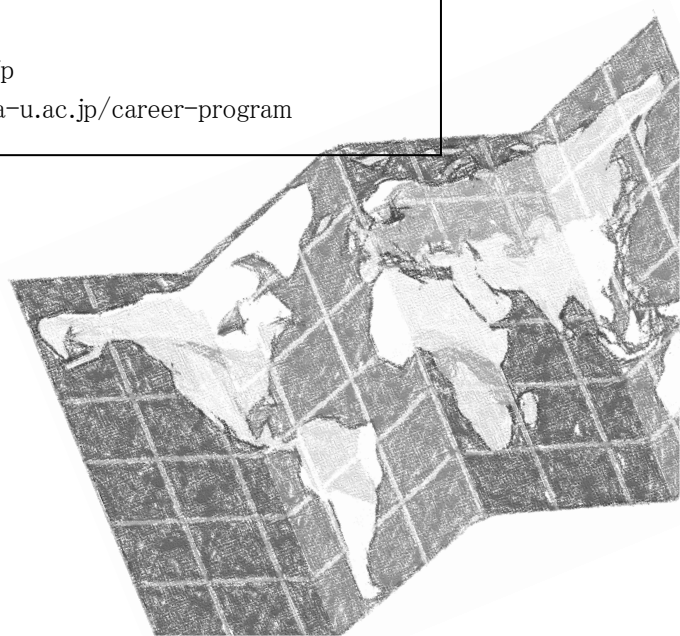
執筆・編集担当

宇都宮大学国際学部国際キャリア教育運営委員会

国際学部長　中村　真
教　　授　吉田　一彦　(委員長)
教　　授　湯本　浩之　(副委員長)
教　　授　髙橋　若菜
准 教 授　スエヨシ・アナ
准 教 授　栗原　俊輔　(副委員長)
准 教 授　飯塚　明子
助　　教　申　惠媛
助　　教　スギット・アルジョン
コーディネーター　佐藤　裕香

発行日：　令和 5(2023)年 3 月 1 日

発行者：　宇都宮大学国際学部
〒321-8505　栃木県宇都宮市峰町 350
TEL　028-649-5172
Email　kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp
Website　https://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program



宇都宮大学
UTSUNOMIYA UNIVERSITY